明治三十一年六月五日發兌

女鑑

第百五十號

東京國光社

女鑑第百五拾號目録

孝女ぎん



今様の文明

今様の文明は、智識の文明にしあれば、世間のありさまは、智識の優れたるを愛で、智識のめでたきを尊び、專ら智識をのみよろこびはやして、智に對ひては、金玉の如くあがめ、德を見ては、塵土ばかりにも思はぬならひなれど、これ、誠に、うたてくあさましき事の限りといふべし。智德二つの中に、德こそは本にて、智識は末の末なるものなればなり。

人の上下は、先づ第一に、德の如何にあり。智識の優劣は、次のみ。されば、其の德高く、且、優れたらむ智識を有ちたらむには、これ最も高く最も美はしき人ならめ。されど、さばかりの智識はあらずとも、人倫の德をだに具へたる人ならむには、これ、また、人として世に恥る所なききはの者なるべし。さるに、それならで、人倫の道を知らず、人倫の德を有たぬ者は、其の智識はいかばかり優れた

らむとも、人としては、世に恥づべききはにて、やがては、誠の人とはいふ能はざるべし。智識の末はあれど、人の本たる德義を欠きたればなり。斯の如き有智無能の者は、たゞにいやしむべきのみならず、吾人は、最も世に恐るべき者なりとおぼゆ。痴漢の名刀を懷にして大路を行くが如ければなり。

然るに、今樣は、もと智識の文明にて、智識をのみ競ふ世の中にしあれば、智を見て德を見ず、智を聞きて德をきかず、智を知りて德を知らず、智を思うて德を思はず、智を重んじて德を輕んず。されば、、至尊の命を承けて國家の政治をあづかふ大臣の智はありながら、其の德は、田夫野人にも劣れる者あり。或は、鄕里の民心を代表して、議堂に參する智はありながら、其の德は娼婦乞兒にも及ばざるものあり。或は、國家國民の干城といふなる武將たる智はありながら、不幸なる病妻に自盡をすゝむる如き禽獸にも劣れる不德者あり、或は、大家といはれ、名家といはれて、學界に立つ智はありながら、其の德は無智文盲の賤ばかりも知らぬあり。或は、富國の淵源ともいはるゝ事業に身を置く智はありながら、賣國奴

にも等しき不德者あり。或は、數千の子弟に敎ふる智ありながら、其の德は人の數に數へがたき不德の敎育家あり。而して、世人は、これ等の人物を見て、深くもあやしまざる者の如し、これ、今の文明は、智識のみの文明にて、智を知り、智を尊び、智を重んじ、智をのみよろこぶ世の中なればなり。これを思へば、吾人は、實に寒心せざる能はず。かくてのみ進みゆかば、此の世の中は、非常なる智識を有せる、人面の狐狸虎狼の團体と成りはつべければなり。

今様は、實に智識の末にのみ馳せて、道德の本に遲れたり。此の文明の弊をためさむは、他の道にあらず、國家の敎育によるべきのみ。されば、吾人は、一般の敎育場裡に、大に德育を奬勵せまほしくれぼゆ。現時の敎育場裡、もとより德育を缺ぎたるにあらねど、吾人は、なほ一層親切なる方法を取らむ事を望む。そは何ぞや、即、修身倫理の書を講ずるに留まらずして、大に感情的、或は精神的に德育の道を取らむことを望むなり



尋常師範學校女子部の増設を望む

斗南

女子の初等教育大に普及せざるべからず、女子の高等教育亦奬勵せざるべからずと雖も、今日に於ける我が邦女子教育上の急務は、先づ其の中等教育を普及し、改良し、完備するに在るなり。教育は文明の基なりと雖も、其の施設は必ず國情と伴はざるべからざるが故に、徒らに其の高きを望むべからず、則ち國民の實用を旨として、漸々之れを上進せしむるを以て良策とす。世或は女子大學の設立を唱ふるものあるも、是れ全く我が邦女子教育の現狀を深く究めざるの誤りに坐するのみ。今日の我が女子教育は、其の高きを望まずして其の廣きを望み、學理の研究よりも實益を重ずべき時代に在り、賢母良妻は必ずしも學識の高遠なるを要せず、實務に當て能く辨じ、家庭を治め内助を與ふれば則ち足る。而して、女子が盡すべき以上の任務は、今日の中等教

育に於て不足あらじ。今日の中等教育を普及し得るだけ普及せむ、余輩が希望する所の賢母良婦は、將來何程も之を養成するに難からざるなり。余輩の憂ふる所は今日未た女子教育の中等部不完全なる事にして、之れを教育上より見るも、之れを經濟上より見るも、之れを衛生上より見るも、之れを風俗上より見るも、中等女子教育は、今後最も注目して革新せざる可らざる急務とす。去れば余輩は朝野の有志と共に、相協力して之れが改良と普及と完備とに盡さゞるべからず。

茲に、女子の中等教育と稱するは、一言を以て約すれば、則ち小學校以上の各種女學校を指すものなり。更に精しく之を述ぶれば、各府縣に在る尋常師範學校の女子部、公私立高等女學校、專門、及技藝學校、及び各種の女學校の中等教育を施すものを總稱するものなり。余輩は國家の文明の爲め女子教育の爲め、以上諸種の女子中等教育機關を擴張し、改革する道を說くべしと雖も、言頗る浩瀚に渉るを以て、茲に先づ全國の師範學校女子部に就きて一言せんとす。そも諸府縣に於ける師範學校女子部の現況果して如何、我が邦の尋常師範學校は幾許あるか、女子部を設くる師範學校は幾何あるか、全國に於て幾許の女教員を有し、幾許の生徒を有するか、而して某縣は最も多數の生徒を養成するか、抑も亦其の女子部を設けざる師範學校は、如何なる理由に

依て之れを設けざるか、諸子試みに左表を一見せよ。是れ明治二十七年末の調査に係ると雖も、今日も大同小異にして非常の變動なく、我が邦に於ける中等女子教育の現情は、之を以て略ぼ推測し得らるべし。

全國師範學校女子部一覽表

府縣	女教員	生徒
新潟	三	七〇
大阪	三	五九
秋田	三	五三
富山	三	四九
福岡	三	四九
京都	四	四五
長野	二	四四
鹿兒島	二	四〇
宮城	二	三七
福島	二	三六
石川	二	三三
長崎	二	三〇
佐賀	二	二九
千葉	一	二九
島根	二	二七
徳島	一	二三
和歌山	一	二〇
高知	二	二〇
山梨	三	一九
栃木	一	一六
山形	一	一五
香川	一	一四

岡山	一	七
總計	四七	七六四

右の統計に據り、女生徒の多寡を以て女子教育の盛衰を計らむ、新潟縣首位を占め、岡山縣最下たり。又以上の女教員總數四十七人、女生徒總數七百六十四人を以て、之を前記の二十三府縣に割るときは、一縣平均女教員二人餘、女生徒三十三人餘となるが故に、新潟、大阪、秋田、富山、福岡、京都、長野、鹿兒島、宮城、福島、石川の十一府縣は、其の平均數に達すと雖も、長崎以下の十二縣は、未だ其の平均線に達せざるを以て勢ひ落第點を附せざるを得ず。長崎、佐賀、島根、高知、山梨の五縣は、女教員の數に於て平均線に達せり。然れども主眼たる女生徒に到ては、未だ平均數を得ず、故に師範學校の女子部なき他縣に比すれば、尚は面目ありと雖も、既に之を設置する以上は、猶て之を奬勵し、以て全國と相並行する程度に達せしめざれば不可なり。試驗するも、及第せざる試驗は無効のみ、苟くも受驗するからは、必ず及第するの決心なかるべからず。女子教育を思ひ、國家の文明に志す長崎、佐賀、千葉、島根、德島、和歌山、高知、山梨、栃木、山形、香川、岡山の各縣教育家、有志者たる者、豈更に百尺竿頭一歩を進めざるべけんや。

然れども、長崎以下岡山に到る十二縣は、女子敎育の必要を認めて、何は女子部を其師範學校に設けり、其の進步未だ遲々たりとするも、全く女子部を設置せざる他府縣に比すれば、女子敎育上に於て霄壌の差異あるものと云はざるべからず。若し、夫、神奈川、埼玉、茨木、群馬、靜岡、愛知、三重、岐阜、滋賀、福井、岩手、青森、奈良、兵庫、廣島、鳥取、愛媛、熊本、大分、宮崎、沖繩及び北海道の諸縣に至りては、師範學校を有すれども女子部を欠げり、余輩其の理由の何處に存するかを認むるに苦む。全く女子敎育の普及を忘るゝか、女子の中等敎育を不必要となすか、又別に之を設け難き事情あるか、以上諸縣中、素より高等女學校、專門、及技藝學校、及び各種女學校を設置せるものありと雖も、直接に小學校の女生徒を敎授すべき女敎員は、之を養成するの必要なしとするか、之を他府縣より傭用せんとするか、其の高等女學校の卒業生を以て一時利用せんとするか。斯かる彌縫手段は、以て一時の効用あらん、然れども是れ決して女子敎育進步の長計にあらざるなり。完美なる文明を大成する所以の道にあらざるなり。故に余輩は、女子部未設の諸府縣師範學校に於て、切に之を新設せん事を望む。

女子本然の責務

藤塚熊太郎寄稿

武藏野に草は品々多かれど摘み菜にすれどさても少なしとかや。世に婦女といふ婦女は、いと多かれども、眞正の徳を備へたる婦女は、甚だ稀れなるに似たり。斯く極端に言はゞ女鑑の愛讀者中には、必らずや然らずとて首肯せざるものあらん。こは、予の豫じめ覺悟せる所にして、苟くも女鑑を購讀せらるゝもの、相互ひに論議を戰はし。智識を交換して、始めて得る所ある可きを信ず。こゝを以て自から揣るに遑あらず、玆に拙文を草して、世の賢婦淑女の敎へを乞はんと欲する所以なり。

近時、漸く、女子敎育旺盛に赴むき、都は言ふも更なり。あまさがる鄙の邊際まで女子敎育の忽かせにす可からざるを知り、高等女學校、何々女學校等、新たに設立せらるゝもの、其の數大に增加し來りたるは、聊か女子敎育の爲めに、双手を擧げて、謳賀せずんばあらざるなり。而して、父兄も亦喜んで子女を入學せしむ。その入學せしむる資力なきものに在りても、相應に良き師を撰びて、學問せしむるに至りたるは、單り女子の幸福たるのみならず、實に國家の幸福なりと謂はざる可からず。然るに、世の婦女子中には往々僻みたる心あるもありて。學問するは、自巳の智識を増し、品

性を陶冶し。婦徳を培養し、以て、所謂婦女子たる眞正の責任を盡さんには、毫も思はずして、みだりに、自已の學識にほこり、徒に氣風のみ高尚に過ぎて、慢心を起し。甚しきに至りては、親を親とも思はず、却りてあるまじき汚名を流し、父兄をして、寧學問させしを悔やましめ、且、喫驚を放たしむるに至るもの、我等の耳にせし所なり。蓋、斯の如き婦女子は、十中一二に過ぎざる可しと雖、亦婦女社會の爲めにいと惜しむべき事どもなりかし。之れ或は、女子教育の方法、其の宜しきを得ざりしが爲めにはあらざるか。今日の女子教育は、果して女子固有の特性に相應しからざるものにあらざるか。余は思ふ、是れ男子にはとこすべき教育方法を、直ちに採りて以て、之を女子教育に適用したる弊にはあらざるかと。然り而して、今日女子を教育するに、最も重んず可き箇條、二三にして足らずと雖も、先づ宜しく精神的の教育を施し。我が姉妹をして、人生の眞面目を知らしめ、其の眞價を知らしめ、自已の盡す可き職分を知らしめ、且、其の目的を知らしめ、婦女とは果して如何なるものなるか、如何なる責任を有するか、如何にせぞ、此の重大なる婦女の責任を盡すを得可きかを、自得せしむるは、實に今日に當りて、緊急なる事項たるを信ず。島田丸髷の束髪と變じたりとて、女子の能事終れるにあらず。白襟紋附の小袖を捨てゝ、蜂腰の洋服を着したり

とて、眞正の婦女にはあらざるぞかし。小笠原流の禮式を抛うちて、西洋流の交際法を學ぶのみ女子の職分にあらず。手踊り舞踏と變じ、駒下駄、洋履と變ずるのみ女子の能事にあらざる可し。故に、女子の學術を研究して、智識を博め、婦徳を培養するは、所謂婦女の婦女たる最終の目的を完うして、自己天賦の責任を盡すにあるのみ。語を換へて、之を言へば、父母に對する孝道より、一家を整理する任務より、夫に對する貞實、及び、社會公衆に對して盡す可き本然の責務を知るにあるのみ。蓋、婦女畢生の事業は、決して鮮少にあらず。而して能く此等の責務を完うするもの是れ之を眞正の徳を備へたる婦女子と謂ふのみ。徒らに邊幅を飾り、華奢俗風の末にのみ拘泥して、其の本然の婦徳を欠くもの滔々として少からざるは、實に痛歎切齒に堪へざる所なり。若夫れ、婦女子たるもの、宜しく今日に於て覺悟する所なくんば、將來の良妻賢母は、何れの處にか求むるを得可き。予の希望は、今日に於て、宜しく外觀の虚飾を避け、實力を養ひ、大に婦徳を涵成し、以て眞正の婦徳ある女子たれと言ふにあるのみ。尙、後日閑を得て、諸子と共に、論究する所あらんとす。乞ふ大方の賢婦淑女幸ひに高教を垂れよ。



史談

奈良縣、宇智郡、五條町に住める山本正周といへる人は、名族なり。南朝の忠臣といへる童子もよく知れる、楠公の後裔なり。百輯女鑑といへるをものせりとて、本誌に寄せらる。とりて見れど、實によくあつめられたり。本號よりつぎ／＼かゝげんとす。されど、はやく本誌にかゝげて、重復せるもあり。これはみな省きつ。凡例の一節に、「昔橘諸兄公は萬葉集を物せりといひ、楠正成公軍旅多事の内にも、猶、家訓數十章ありとかや。余が家、亦楠氏の後裔を辱くす。聊遠祖に續がんとる意なり」とあれど、本書編纂の主意も見ゆべし。なほそのはしがきをも、あはせてのせつ。

編者識

百輯女鑑はしがき

凡そ、世の中に、悲きこと多き、そが中にも、年老いて、我子を先だてゐるばかり、心細きものはなかるべし。余は、三人の女子をもてる中に、末の子なる晴江といへるは、十九歳の年の夏に、兒山司直の許にかしづかせてより、夫婦のまじらひもいと睦まじく、間もなく、一男一女をさへ設けしが、ふと肺の病にかゝり、醫藥に手を盡しゝ甲斐もなく、明治二十六年といへる年の、九月三十日に、二十六歳を一期として、あはれはかなくなりにける。その家人の悲はいふまでもなく、頭に霜置く親の身のなけきは得もいはれ

す。まして、眼前にいはけなき孫等が、亡き母を慕ふありさま、見るにつけては、唯胸のつぶるゝ事のみ多かりける。かくて月日に關守なく、今ははや五回の忌辰となりたれど、風の朝、雨の夕に、思ひ出づるは、彼のおもかげにて、とかく心に忘れがたきは、老の身の習なれ。しかるに、此の頃、篋底をさくりしに、ふと彼がいまだ幼かりける頃、夜話の料にとて、余が物したる、皇朝の賢女烈婦傳を見出しぬ。思へは、かれが余の膝元近く坐りて、しとやかに、余の物語を聞きたりしことも、今は早や昔しの夢となりぬ。かれもし今なほ世にあらは、孫等にむかひて、此の話をなして、聞かせもやすべき身なるにと思ふにつけて、一には彼の亡き魂を招き、一には余が老後の情を慰めばやと思ひたちて、此の書を脩寫して、百輯女鑑と題し、之を親戚の婦女たちに分ち贈ることゝなしぬ。あはれ此の書を見む人は、余の心を察したまへかし。

明治三十年といへる年の九月三十日　　(丞)しるす

中宮彰子

山本正周記

一條天皇の中宮、藤原彰子は、攝政藤原道長の女なり。世に之を上東門院ともいひ、後一條天皇、及び　後朱雀天皇の御生母なり。彰子天性美哲豐艶にして、その髮は身より長きこと二尺許りもありしとかや。幼より敏慧にて、文學の道にも通じ、其の草子は、巨勢弘高の畫、藤原行成の書と共に、當時の三尤物なりとて、御叡感に預りしことあり。或る時、一條天皇、後宮にましまして、笛を奏でさせたまひけるを、宮女ども、皆、御座近く寄りつどひ、見侍べりしに、ひとり彰子のみは、其の傍に來らでありしかば、天皇は、何故に此處に來りて見ざるにやと問ひたまへば、彰子は、笛は唯音をこそ聞け、之を見る要もなしと覺ゆ侍る。と答へ申しゝかば、

天皇は、げにもとうなづき給ひけり。此の時、彰子は、わづかに十二歳なりしとかや。かくて、長德二年に、女御より昇りて中宮とぞなりにける。世に名高き、紫式部、和泉式部などは、この中宮の侍女なり。かくて、一條天皇臨御の日、久しく、人才も輩出せしかど、とかくに外戚道長の專權を疾みたまへども、之を制したまふすべもなく、遂には世をはかなみたまひ、御位を三條天皇に讓りて落髮したまひける。せめては、一の宮敦康親王を皇太子とせむやと思したまひしかども、是も道長を憚りて、二の宮なる敦成親王をもて、三條天皇の儲嗣とぞ定めたまひける。御側近くかしづく彰子は、よく其の御心を知るものから、切に道長を諫めて、敦康親王を儲嗣とし奉らんとしけれども、道長之を聽かざりき。かくて、一條天皇は、間もなく崩れさせ給ひければ、彰子は、ことに哀みなげきて、絶ゐむばかりなりしといふ。後また三條天皇かくれさせ給ひて、皇太子御位に即かせ給ふに及び、道長は、後朱雀天皇を皇太弟となしければ、彰子はまた之を諫めて、此度こそは敦康親王を立て奉りて、先の天皇の御志を成すべけれと言ひしかど、道長は、親王には外戚の援なければなどて、遂に其の言を用ゐざりき。親王の御身の上を思ひ案じて、二度までも諫めて用ゐられざりければ、彰子も今は、心盡しの甲斐なきを歎き居りしが、やがて、親王

もまたはかなく、薨したまひければ、彰子悲哀に耐へず、是より後は、もはら閑居して、世事に遠ざかりしといふ。此の頃は、外戚の專横を極めし頃なるに、彰子のみは、身藤原氏より出でながら、私を捨て、公に盡さんとせしは、得がたき賢女と稱すべし。

孝女ぎん

鹽井福子

銀とは名に負へど、黄金も玉もげにしくもののなき孝女、山鹿郡中村と云ふ所のゐやしき家に生れぬ。その生れつきすなほにして、よく父にかしこみ事へ、母にいつくしみかしづき、弟をいたはり導けど、弟新左衞門も、また妹にならひて、心やさしう、二人共〳〵に、親の膝下に非をむつみければ、父母も、またなき子寶とめで、赤貧洗ふか如き世もさのみはうからず、二人が成育をたのしみくらすほどに、稻葉吹く風靜ならず、孝子が養ひをまたずして、父はもろくも秋の木の葉と散り失せにけり。時に姉は十八歲、弟は十四歲、共に〳〵屍にとりつき、生體なく泣く涙に、心なき人も袂をしぼるばかりなり。

元來まづしき小作百姓、主たる男のなくなりては、生計の道もまた絕えて、せん方なきに、姉は人の家に仕へ、僅の身の代をも、已が身にはつゆつけず、家に送りて養を

助け、弟は家に居て、田をつくり、たづきとしたれど、まだ三五に足らはぬ童子のうでの思ふやうならず、貧しうのみなりまさり行くに、天の禍はしげく、母なる人もまた病にかゝりて、手足も叶はずなりにたり。二人はいたくおどろき憂ひ、心も心ならず、姉は仕をやめて家に歸り、かはりはてたる母の膝下にかしづきて、弟と共に業をとり、或は山に柴をこり、野に薪をとりて人にうり、或は苧をうみ、綿をつむぎ、晝夜たゆまず勞力をつくせど、弟も朝とく田に下り、畠に出で、事をとり、夕にをそく人の家の事をなして、僅の賃金を得て歸り、母が好むものをとゝのへ、あらがねもとくる夏の日も、わらしも氷る冬の夜も、つゆ怠らず、二人とも、孫草の心ゆらゝに、うちとくるひまもなきつゆのまを惜しみては、弟は左に母が背を撫で、姉は右に腰をさすり、山鳥の尾のなが〳〵しよもゆめまどろまで、介抱すれど、生計はなはたゝんともせず、朝夕のけぶりも心細きを、二人は母に知らせじとすれど、母も心なくてやは、早く知りて、常にうれひ、二人を悲しみ、云ひ甲斐なき手足をかこつに、孝子は如何にもして母を安んぜんものとて、或る年の冬、姉弟うち語らひて、そつとあきたる俵ども求めあつめて、それに籾の糠を入れ充て、母に示して云ふやう、是なん今年の設けなり、されど、今よりの後は、糧には乏しからしとて、二人重げに俵をになひつみ

て見せけれど、母之を見て、誠とやしけん、うちよろこびて、甫めて心を安んじける
となん。
草木も、なべて錦を着かざる春時、姉弟は、たゞつゞれをまとひ、身を労し、思ひをこがして母にかしづき、己等は冬のさむきも全き衣もなく、はぎもあらはに働けど、母をばつゆさむからしめず、衣もあつくし、ふすまも重ね、いろりにくすぶる薪炭もあらざれど、常に芥をあつめ、草の根をとりて、たきて、母をあたゝめ、母が好む木の實を拾ひ來りては、やきて供し、ゆでゝすゝめ、姉は山の事を語れど、弟は田のさまを告げて、二人なぐさむる心づくしの母が心には悲しきまであまりて、露も風も身にはしまざりけり。
此の子、母に孝なるのみならず、また上をもよく敬し、萬づかくの如く貧しき中にも、年貢やうのものは、少しもかくる事なく、必ず人に先き立ちて納めけり。人となり孝悌にして、上を犯すを好むものなしと云ひし有子の言、また以て證すべきなり。かくする事七年、たゞ一日の如くなりけるに、人々感じあひ、語りあひて、稱せざるはなく、遂に時の郡代某聞きて、深く二人が志を感じ、寶暦四年十二月、ぎん姉弟に、しろがね許多をとらせけるに、二人は思ひがけぬ賜とて、大によろこび、まづ新らしき衣

をとゝのへて母に着せ、またよき畑をも求め、母を背負ひ見せ、其の心を安んじさせ、いよ／＼家業をつとめ、介抱怠らざりけるに、其の明年二月、官また二人を賞して、年年米五俵を賜はりたるは、全く孝の賜物なりけり。

家政

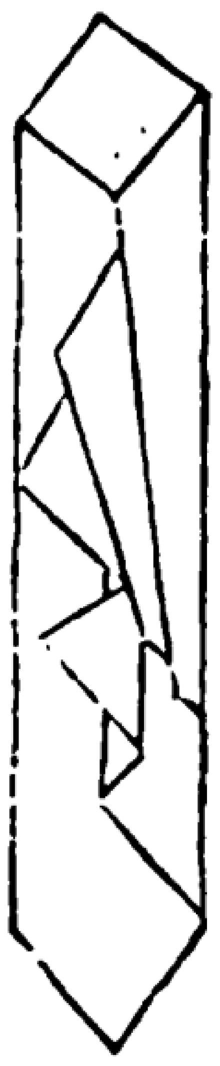


折形

有住齊

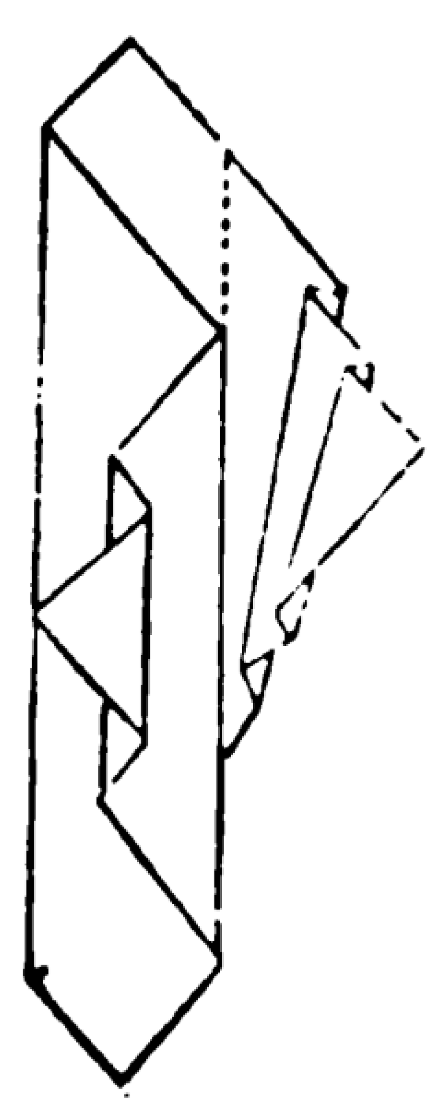
押掛包

押掛とは、れもかひ、胸かひ、尻かひ、是を三掛といふ。又押掛とも云ふなり。



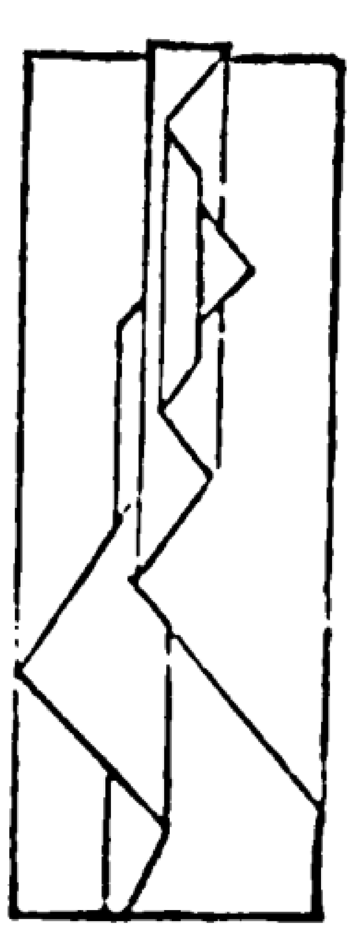
昔は鞦ともかりいふ。又押掛ともかりいふなり。

れなじく右を開きたる形

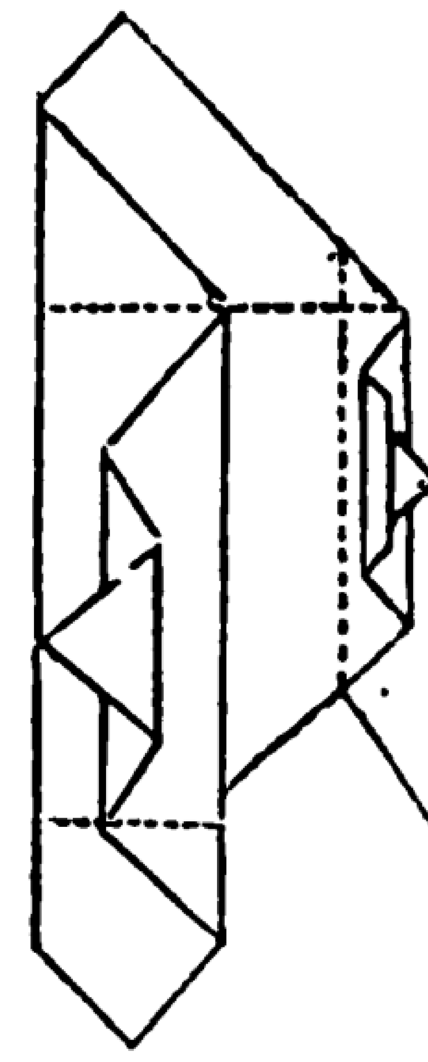


靶包

靶、是を手筋ともいふ鞢をれもかひに付く所へ取り合す物なり。上包み、靶共たすき共書くなり。



れなじく右と、上下とを開きたる形

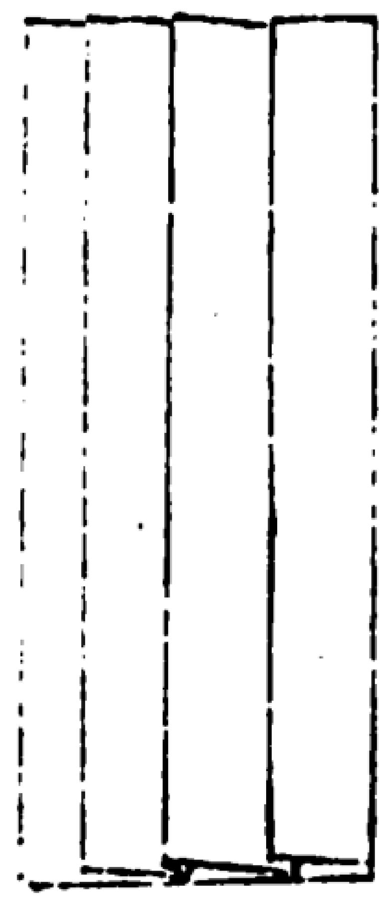


此の點線の處右に折るなり。

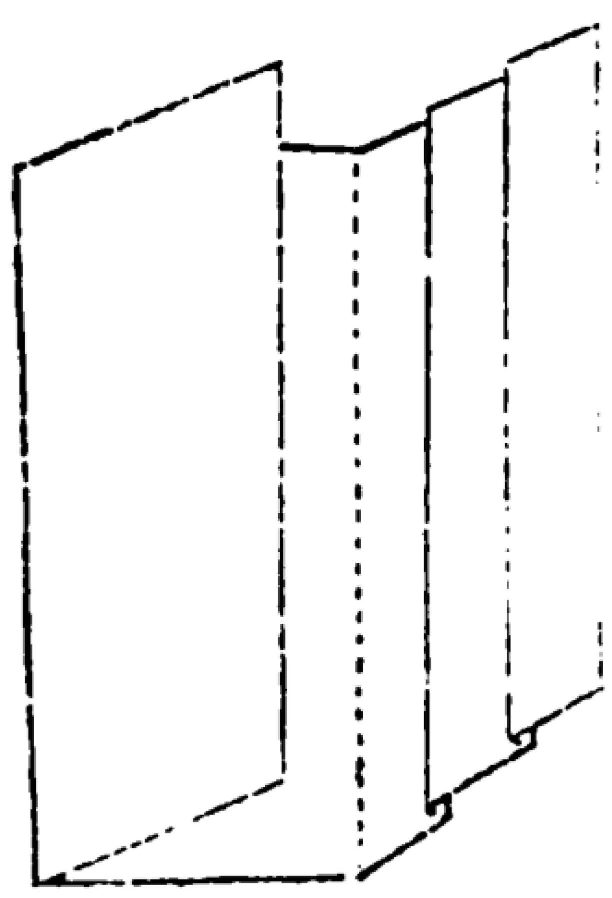
腹帯三尺紐包

何れも端を上に入るなり。

書付、腹帯何筋之内と書也。



此の筋は右がはの端を示したるにて、此の右の二筋は、全じく右がはのひだなり。左の方は右よりも先に折るなり。



おなじく開きたる形

茶の湯

爐濃茶手前（續）

孤峯庵不羨
關葦雄

次に、柄杓を右手にて取、左手に換へ、右手にて釜の蓋を明け、湯を汲、茶碗に入べし。(但極めて少分入事を要す) 殘湯は釜へ戻し、直に柄杓を釜へ掛、右手にて茶筌を持、左手にて茶碗を持、茶を點べし。(但茶筌の穂先に力を入、茶に玉のなき樣にすべし) 大概練たらむ、茶筌を左の縁へ掛置、又湯を汲茶碗に入べし。(此時茶筌邪魔になるならは左手にて引上ぐへし) 分量を注意し、不ㇾ薄樣にして、殘湯は釜へ戻し、柄杓を釜へ掛、直に茶筌を持、能茶を點て、茶筌を引揚げ元の處に置付、

右手にて茶碗を持、左手を添、茶の點たるや否やを調査して、左手を茶碗の向へ廻し持、前の方へ廻し、呑口、或は繪様わらは客方へ向け、鍵疊の釜の鐶付を押へて、爐縁より茶碗丈け明けて出すべし。次に、左手にて腰の帛紗を取、疊て向を直し、(但、我方を向へする)茶碗の右の方へ並べて出すべし。客方是を取て、茶を一口喫したらぞ、服加減は如何に哉、定めて點損したらん抔言て後、釜に掛たる柄杓を取、搆へて釜の蓋を締、蓋置を右にて建水の跡へ遣し、搆たる柄杓の元を右手にて捻り、左手にて柄杓を建水へかけ、(但、此の時は、合を俯て柄を掛べし)次に、客方へ眞直に向ひ、服加減の挨拶わらは、召上り憎からん抔と答ふべし、客方は、結構に戴きたる抔と云べし。客茶銘を問たらぞ、亭主は、後昔とか初昔とか答ふべし。客方は、又茶師の詰主は誰と云事を聞べし。其の時、上林春松。竹田紹淸。山上善太夫。抔と答ふべし。暫し愼控へ居て、末客の茶を喫し終るを見て、亭主は、點前の座に戻り、柄杓を左手にて取、右手を添、左の膝頭に搆へ、右手にて翻の跡に置たる蓋置を取、直に爐の脇、始め置たる處(但、縁より三つ目)へ置、直に釜の蓋を取。蓋置へ置、柄杓を持直し、釜へ掛べし、次に、水指の蓋の上に有茶巾を、右手にて釜の蓋へ置直し、(但、居前の形に、僅少ひずめ置べし)次に、右手にて水指の蓋を取(但、摘みを持)膝の前に持來り、左の方はじきの横の方を左手にて持、水指の左の方へ建掛べし(但、はじきにて留る樣にすべし)客方にては、末座茶碗を上客の前へ持往、(但、上客の正面に座し、左手にて帛紗を下に置、茶碗の呑口を調査して、上客の前に置べし)次に帛紗を右手にて取、

左手へ載、右手も添て持、起立して釜の脇鍵疊に座し、帛紗を返すべし。(但、返し方は、主の出したる向を反對にしてよし)直に立て末座に付、亭主は、此の帛紗を右にて取、打返し、上の角を取、引立、二つに折、左手に持、腰に狹むべし。客は、次禮して茶碗を拜見すべし、此の拜見に習有り、先、次客へ御先へと挨拶して、第一に雙手を疊に付、茶碗の形容を見而后、兩肘を膝上に付、手に取、茶溜、口作、香臺の恰好、目の有無、切廻、高下、泑藥の濃淡、高麗物歟、和物歟、樂燒歟、手造歟、國燒歟、善惡、良非、賞翫、不賞翫を、各鑑識に任せ分別し、茶人の技倆を顯はす處也。此の中、亭主は、釜へ水を指歟、或は、茶巾を絞り、疊直す歟、兩事中の一つを成べし。末客茶碗を見終らば、持て立、上客へ戻す歟、或は、上客へ斷り、直に返す歟、辨宜に任すべし、返す處は、亭主の出したる處呑口を、亭主の右手の方にすべし。亭主は、此の茶碗を右手にて取、左手を添、呑口を改め、右手を向へ送り、下に置べし。此の時客方より茶の禮儀あるべし、是を受て直に柄杓を取、湯を汲み、茶碗へ入べし。直に柄杓を釜へ掛、右手にて茶碗を持、左手を添、茶碗を静に廻し、内に付たる茶を落すべし。(但、餘り數廻に亘り、時間かゝれば、客方退屈を生する故、四五廻に止むべし)而后、茶碗を左手に持、溜湯を翻へ捨べし、次に、其の茶碗を右手に持替、前に置、此の時、客方より、一旦御仕舞可レ被レ下と、拶すべし。亭主は、輕く手を疊に付、左様なれば、一旦取入べしと申述べし。

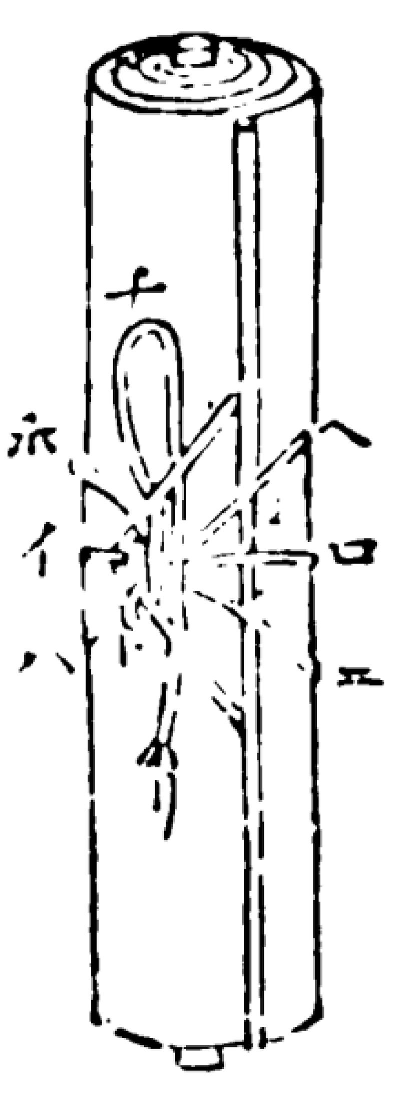
(以下次號)

女の禮

掛物かくる様

有住常子

かけものゝ紐、結びなん様は、近き世の定めの如く



かく結びなしてぞよかめれ。

右手に、掛物に、鶯さを（頭を尖窄形になしたるかけさをいいふ、又是を文夾さもいふ）を持添へて、右の腰のあたりに、竿の先を、すこしさぐるほどに持ちいでゝ、床より三尺あまり前にて左足を右足より半足、あとにひきて、左膝をつき、右膝をつき、右膝をすこしひきて、踵をすゑ、左膝に左手をそへてすこしひき合せて、踵をすゑてすわり、さて掛物を右手に取り、竿のみを右脇におきて、左手に掛物を持直し、横になして、右手にて巻緒を解き、右の方によせて、下におき（二副三副の時主居の掛物の緒は左によせておくなり）少し披き、上が頭の風帯より展むして、右脇の竿を右手にとりて、左手にて掛緒を取りて、筈に挟み、しかして掛物の中程を左手にて下の方より持て、能ほどに開きて、左の手を眞中より、左によせ、右手にて竿と軸元とを（軸元とは右の方をいひ軸先とは左の方をいふ）もちそへて、たちて、

床前にすゝみて、右足を左足のつまさきに、冠らせて、左にむきて、左足より跪き、右足も跪きて、右足より床に上り、右膝をうかして、右に體をひねりてむきなほり、たちあがりて、進みて折釘に掛けて、竿の先を掛物持たる左手の拇指に挾み、竿の中程

持ちて、右の方に立掛けおき、兩手を軸にかけて、披くに隨ひて、左膝より跪き、開き畢りて、右手に竿を取り、左膝をうかめて左にむき直り、左膝より床をおりて、右膝をうかめて、右にむき直り、たちて右足左足右足と三足、又左を半足、三足半にかくひきて、横疊を隔て、左足より跪きて居り、竿を脇におきて、兩手を膝脇につきて、掛物のゆがみをうかゞひ、ゆがみあらば、幾度も直して、さてたちてしりぞくべし。

○二幅對、三幅對の時は、箱の蓋にのせて、竿もおきそへて、持出るなり、又掛かふる時も、新にかくるを、物にのせて出て、右脇におき、まづ前かたの掛物より扱ふなり。

○二幅對かくる時は、先に客居（床の左の方、我方より右をいふ）次に主居（床の右の方我方より左をいふ）を掛くるなり。

○三幅對かくる時は、先に中尊（床の眞中に在るをいふ）次に客居、次に主居と掛くるなり。

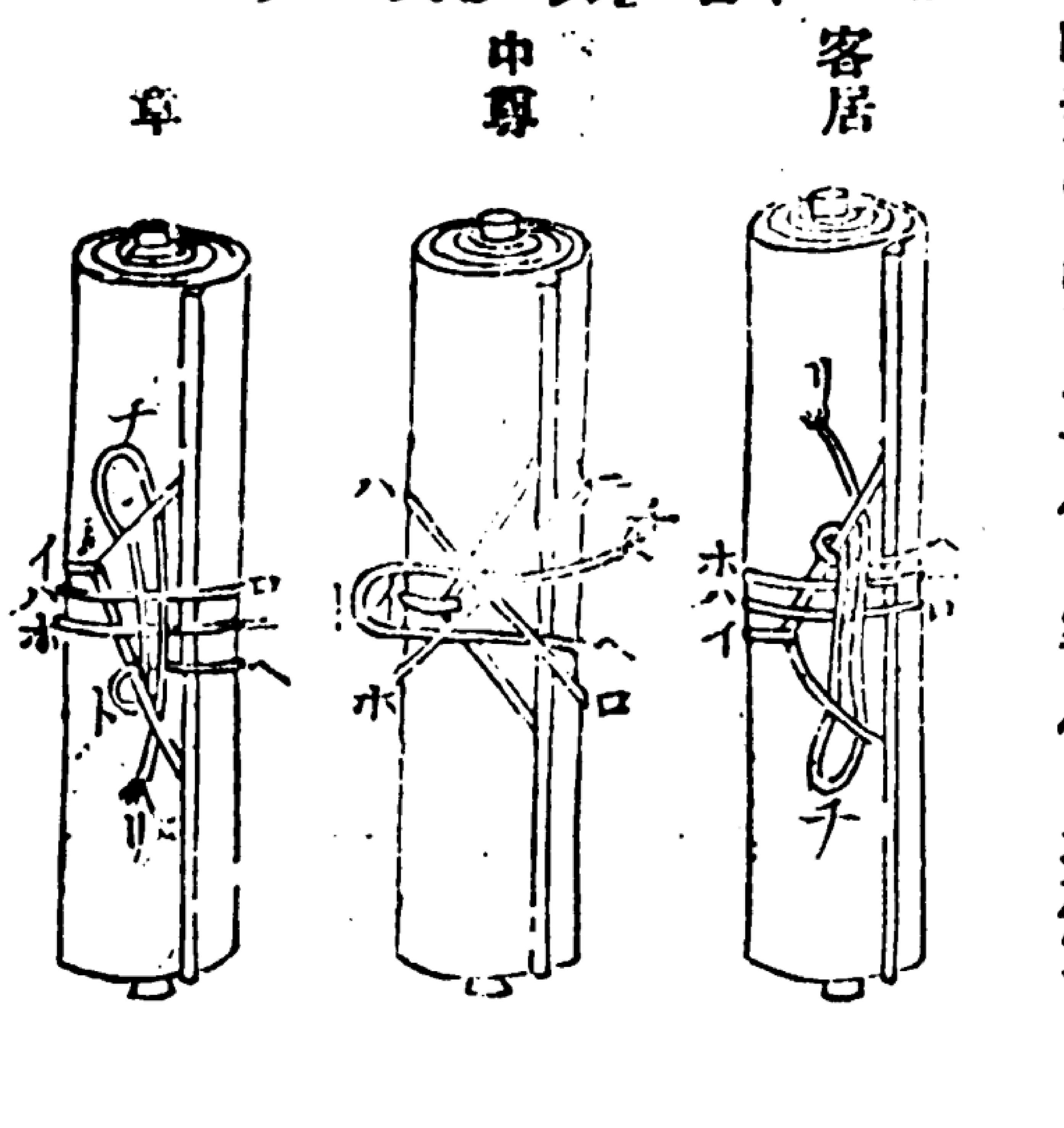
もし中尊、神影、あるは尊き人の畫像ならば、中尊を後にかくる事習なり。

同をさめ樣

竿を持出て、直ちに、床前に進みよりて、左足に右足をかふらせて、左に向きて、左足より跪きて、右足より横ながら床に上り、右膝をうかめて、右にひねり、むきなほりて、一すゝみ進みて（膝にて進むなり）竿を掛物の右の方に立かけおき、まづ兩手にて、軸をもちて、そろ〳〵と卷きながら、たちあがり、中程まで卷たる時、左手にて軸の眞中をもち、右手にて竿をとり、左手の拇指にさきを挾み、右手にて竿の本をもち直し、折釘よりはづし、おとしさりして、左をむき、跪きて、左膝より床をおり、右膝頭をうかめ

て、右にひねりますぐにむきて、たちあがり、右足左足右足と三足、又左足半足とひきて、左膝より跪き、掛物を下におき、
竿を緒に掛たるまゝ、掛物をひきよせ、竿を筋違にし掛物を引よせて、すこしまき、竿の所にいたる時、又竿を掛緒よりはなれぬ様おしながら掛物を引よせ竿をすぢかひに先によせて、すこし卷、竿の所にいたる時、又竿をおしながら、掛物をひきよせて、竿をすぢかひによせて、緒よりはづして、右脇におき、左の方の風帶を上に重ねて帖み、卷き收め、右の手にてとり、左手にたてにもち直して、紐を圖の如く結び、さて竿をとりそへて、腰の邊にもちてたちてしりぞくべし。
三幅對の時は、中尊、客居は右の方の風帶を上に重ねて帖み、

又をさむるに、二幅對の時は主居、客居と次第にをさめ、三幅對の時は、主居客居中尊と卷き收むべし。三幅對の紐の結びやうは下如圖



たちぬひ

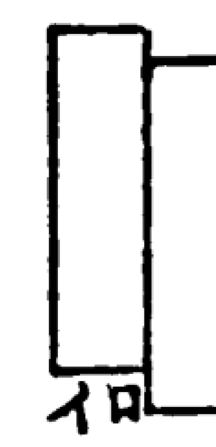
西山たい子

（八十二）四合せ袋

四合せ袋は、桔梗袋に裁ちし、四角形の切れを、三つ合せたる程の長さに裁ちたるもの四片にて作り、

四つ合せて作れど、四合せと云ひ、四合せは幸福に詞通ふ故に、幸福袋と云ひてめでたき袋となすなり。

まづ桔梗袋の如く、紙



を切れにぬひつけ、上圖のロじるしの所を、イの長さだけ違へ出して、ぬひ、イとロとを合せてまたぬひ、四片ともさやうにたがへぬひ合せて袋となし、桔梗袋の如く、裏を作りて、はめこみ、口切をつけかへして絎けるなり。

造花

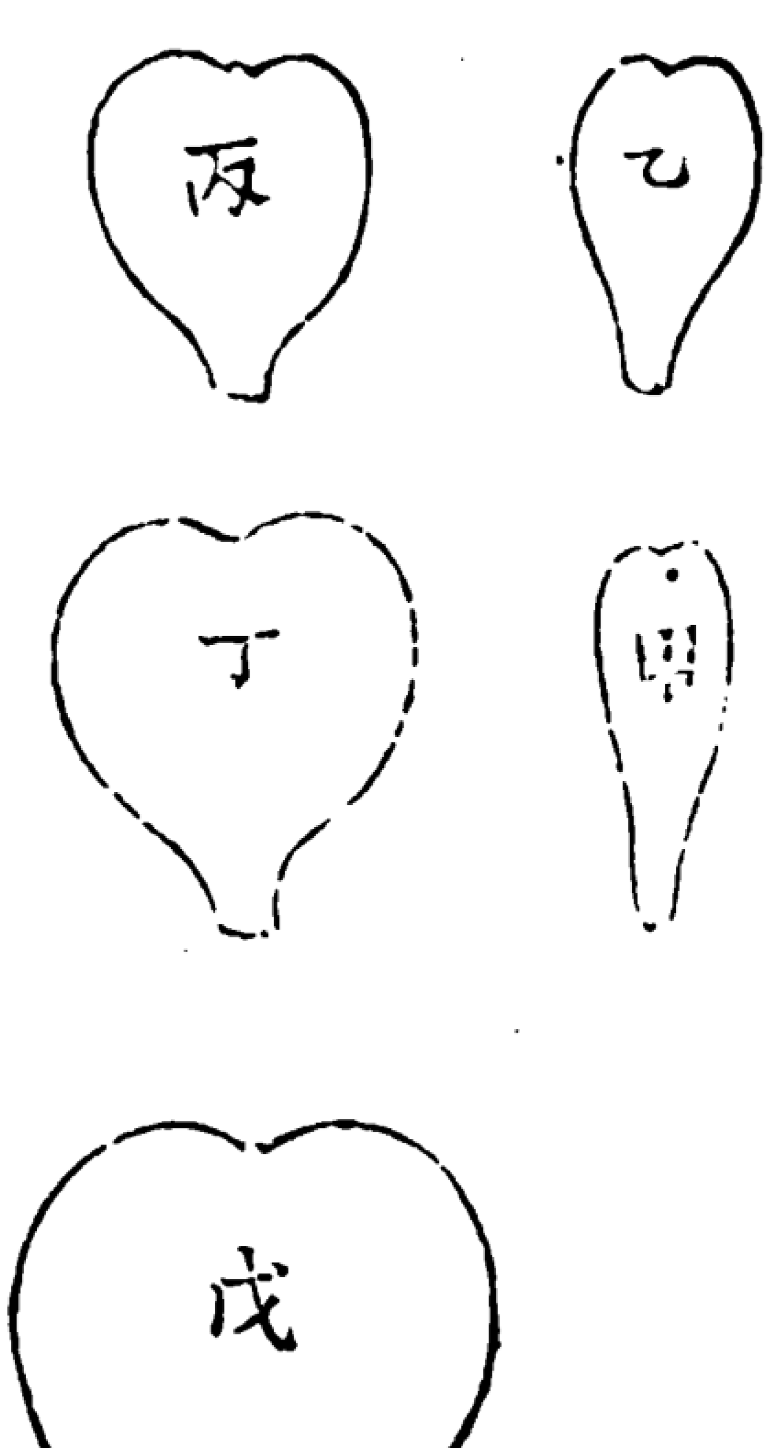
伏見藤三郎

薔薇 天紅

ばらは極めて其種類多し、爰に示せるは天紅と稱ふるなり。又俗に舶來薔薇ともいふ。

滿開花の造り方　花瓣は、絖、羽二重、又は寒冷紗にて造る。絹なれど、姫糊を引き、寒冷紗なれど、薄糊を引き、乾して、第百十七圖の如く、五種の形に斷ち、(滿開の花一つを造るには、圖に示せる、甲、乙、の花瓣各九枚、丙丁の花瓣各十枚、戊の花瓣十二枚を要す) 之を色染するには、「フロクシン」を薄く、(櫻色の少し濃き位) に溶きて、花辨の中程を濃く、縁次第に薄く模糊しに染め、乾して又「オウラミ」を薄く溶きて、花瓣全躰を染め、后、鏝をあつべし、(鏝をあつるには、花瓣は、常に布片を疊みたる上に載せ、鏝は總て燒きて用ゆ) 先づ、甲、乙、

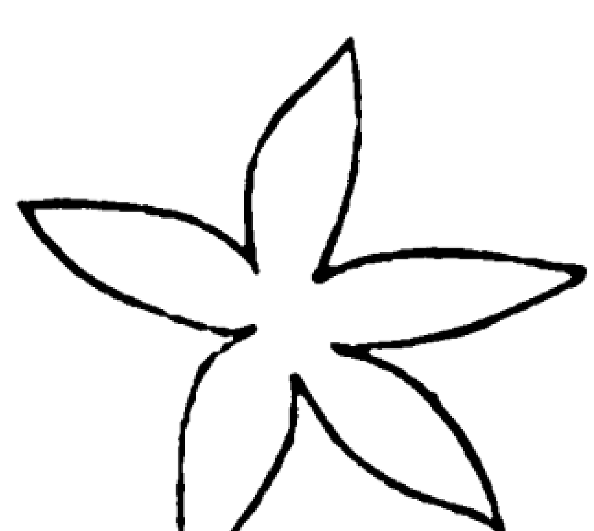
第百十七圖



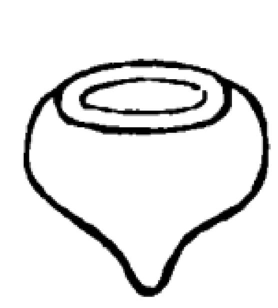
丙、の花瓣は、表の中眞に、筋鏝を深くあて、左右をも適宜にあてゝ兩端を縮らし、丁、戊、の花瓣は、元をピンセットにて縱に挾みて、一捻捻ちて折り目を付け、內部を凹まし置き、之を布片の疊みたる上に載せて、掌の凹みたる所に持ち、上より丸鏝にて強く壓ゆべし、后又筋鏝にて、花瓣の裏より、兩端を、縱に  此の筋の如くにあてゝ、縮れ反る樣に造る。斯く鏝をあて終れば、甲乙各九枚、丙丁各十枚、戊十二枚を取りて、先づ、丙の花瓣を採り其の元に少しく糊を付けて、二枚重ね、其の內部に、乙の花瓣一枚を付け、又其の內部に、甲の花瓣一枚を付く、斯の如きもの五つを造り置き、甲、乙、の花瓣の殘り八枚を一束にして、元を針金の稍長きものにて堅く絞り、(絞り餘りの針金は斷たず、其儘縱に伸して莖の眞となす、)此の回りに、前に重ね置きたる花瓣五個を配り付け、后、丁十枚、戊十二枚を、其の外部に配り、何れも糊にて元を留むべし。之に萼を付く、萼は、寒冷紗を、通常の葉の色に染めて、濃く糊を引きたるものを、第百十八圖の甲の如き形に斷ち、中央に細き空

第百十八圖

甲



乙



を明けて、花の元に差し通し、次に、乙の玉護謨を通し、紐護謨を通して莖となす、(玉護謨、紐護謨は、造花材料店にて販賣するものなれども、不便の地には、玉護謨は、米の粉をねりて、其の形に造り、紐護謨の代りに、竹を眞となして、上に青紙を卷くも宜し)

半開花の造り方　半開は、丁の花瓣九枚にて造る。先づ、針金の先に、綿少許を挾みて丸く着け、之を、

丁の花瓣一枚を以て能く包み、端に糊を付けて貼り着け、又其の兩片に、全じ花瓣二枚を着け、後六枚を回りに配り着くべし。萼の着け方、滿開と全し。

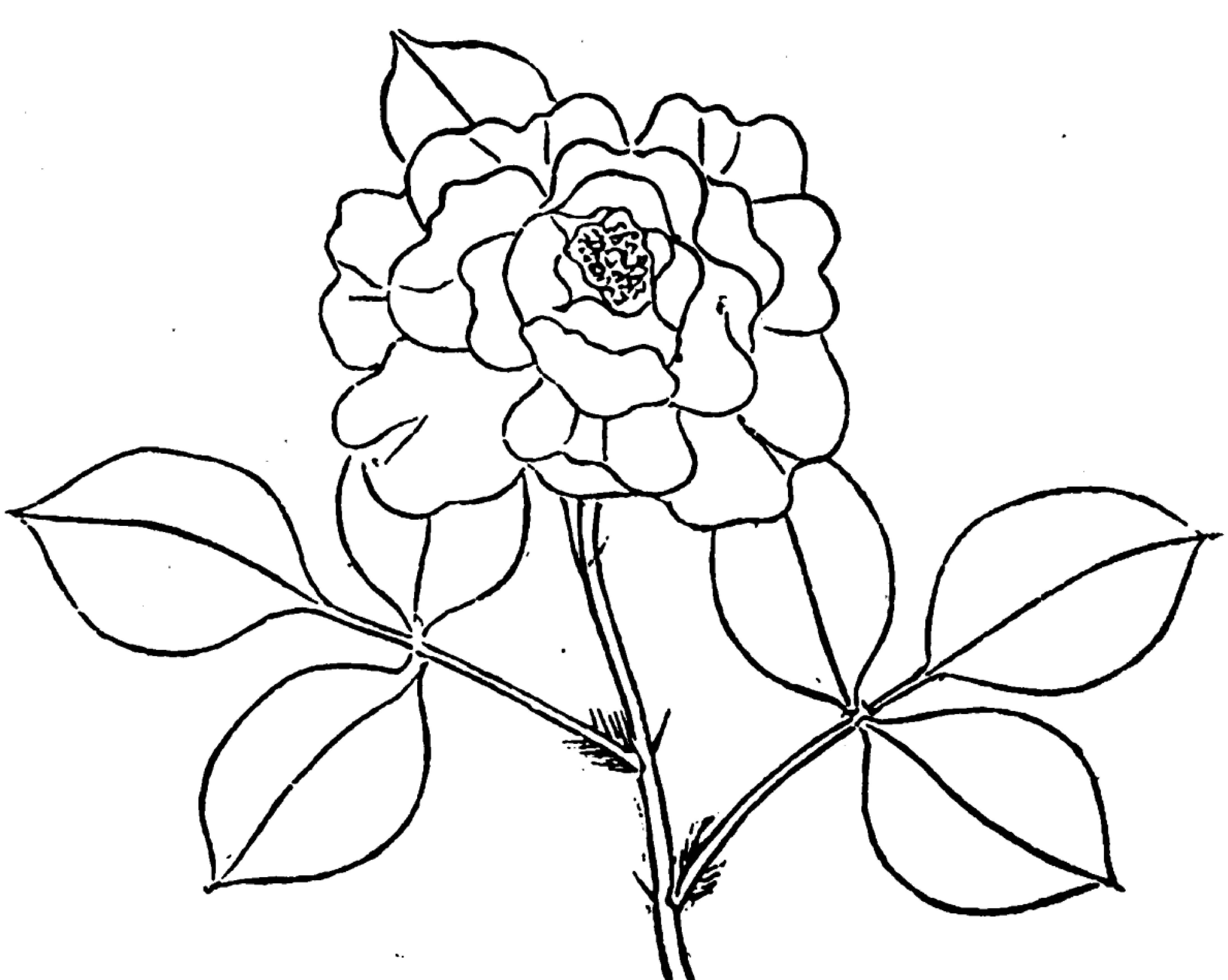
蕾の造り方　雁皮紙を、滿開の花瓣と同じ樣に色染し、綿少許を取りて、此の紙にて、蕾の形に成る樣に包み、元を針金にて絞り、萼を着く。萼は、滿開と全じ事なれども、第百十八圖の甲は此の圖



の形の如くに五つ連ねて造るをよしとす、而して、此の萼は、蕾を包みて、上に向けて貼り着くるなり。後玉護謨紐護謨を通すべし。猶、詳くは、本誌第百十七、八號所載、庚申薔薇の造り方を參照すべし。

葉の造り方　葉は、寒冷紗を、普通の葉色に「ヲウラミ」七分、「グリン」二分、「マセンダ」一分の割に溶きて混ぜ合せ、褪色せざる爲、明礬五十分を入れたる液にて染め、實物に照合して、適宜の大さの形

第百十九圖



に斷ち、裏より針金に青紙を卷きたるものを着け、

葉の筋を施す等、他の葉に變ることとなし。猶、實物を見て恰好宜く造るべし。造り上り圖の如。

だいどころ

ショルドプレッツケーキ

米利堅粉、二百四十目、干葡萄三十目、砂糖を能程に加へ、杏仁四匁を刻みて投れ、牛酪百匁を溶解し、其さめたるとき、前の粉の中へ入れ、手にてよくかき交せ、米利堅粉をとり粉にして厚さ八分程にのむし、これを四ッに切り、其切り口の四方に花の形をつけ、粉をふりたる紙のうへにのせて燒べし。

ショルドケーキ

牛酪五十匁に、米利堅粉百匁を混和し、鷄卵一個と、砂糖二十匁を加へ、能くこねませ、糊の如くなるまで牛乳を少しづゝ投れて、かきまはし、鉄葉の板の上にのせ、能程の盃にてきりぬき、又鉄葉の板にのせ、其上に砂糖をふりて、十分間程燒べし。

ボイルカスタケーキ

鷄卵二個、牛乳一合とに、砂糖を能程に投れ、レモン汁二三滴を加へて能くかきまはし、沸騰せてれろ、し其さめたる後、コップに入れて用ふべし。

ベーカーカスタケーキ

前同様の品を、能く混和し、鉢に入れ、ストーブの中に入れて燒べし。

スポンジビスキット

鷄卵十二個の黄蛋を三十分間程かきまはし、砂糖二百匁を加へ、泡たつまでかきまはし、鷄卵の白蛋も泡たゝせ、前の黄蛋を混和し、米利堅粉百匁を投れ、牛酪をひきたる摸型の中に入れ、一時間程烈火の燒

竈にかけて燒き、其燒あがる少し前、砂糖ふりかけるも宜し。



學園

秀歌集（十五）

鹽井正男

○

思ひやる心にたぐふ身なりせむ
一日に千度君は見てまし

○これは、後撰集十の卷なる戀歌の部にありて、大江千古のよめるなり。○思ひやる心。君を思ひ慕ふ我が心なり。○たぐふ。つきて行くといふ事にて即ち、わが身が、君を思ふ我が心につきて行く事の出來ることならむといふなり。○見てまし。見てむと仝じにて、やゝ希望の意をふくめり。
○一首の意は、私は常に君を思ひ慕ひて居りますが、若、我が身が我が心につきて行くべきものならむには、私は一日に千度も行きて、君を見ヨウモノヨ。それほどに私は君を思ひ慕うて居りますワイといふ意にて、情切にして且面白くもいはれたり。

○

我がかどの一むら薄かりかはむ
君が手なれの駒も來ぬかな

○これも、仝集の仝卷にありて。小町が姉のよめるなり。○我がかど。或本には、此の句、我がやど、あり。我が家の門べといふことなり。○一む

ら薄。むら〳〵と生ひ茂れる薄といふことなり。○かりかはむ。刈りて駒に飼はせむといふことなり○手なれの駒。常に手馴れたる駒のことなり。○一首の意は、我が宿の門べに、むら〳〵生ひ茂れる薄を刈りて、ま草に飼ふべき貴方樣の手馴れの駒も來ぬヨナアー。かほどに待ち焦れて居るものを、さても〳〵つれなき人やといふことにて、ものさびしき秋の宿に、つく〴〵と人を慕ひながめて、たへぬあまりにうたひ出でたる歌にて、誠に淋しき宿のけしきも、限りなき情も見えて、あはれさいふばかりなし

○

わびわたる我が身は露をおなじくは
　君が垣根の草にきえなむ

○これも、全集の全卷にありて、貫之が、心ざせる人の家のあたりにまかりていひ入れ侍りける歌なり。○わびわたる。思ひわびて日を送ることなり。即ち、人を慕ひて、逢ひがたきに、思ひわづらひて、日をすぐすことなり。○我が身は露を。我が身は露よといふことなり。露をのをぞ、感動の意をあらはす詞にて、よと仝じ。即ち、「我が身は露の如くはかなき身なるヨナアー」といふ感歎せる詞なり。○おなじくは。「おなじく消ゆることならば」といふことなり。○君が垣ねの草に消えなむ。とてもはかなく消ゆる命ならば、君があたりにて失せなむといふ意を、上に「我が身は露よ」といへるにより「露」は「草」におく物なれば、「君があたり」といふことを、「君が垣根の草に」といへるにて、また「命を終らむ」といふを「消えなむ」といへるなり。詞つかひ方のあやあるを、よく〳〵

味ふべし。これ、文章の上に面白き手振りなり。

○一首の意は、君を慕ひて、逢ひ難きに、思ひわびてのみ、日を暮らす我が身は、もとより露の如くはかなき身なるヨナァー。とてもはかなく消ゆる命ならむ、君が住みたまふ宿の垣根の草のべ、即ち、君が住みたまふあたりにて、はかなくならむものをとて、かやうに君が住居に近く通ひまゐれるものなりといふことにて、心も詞も巧みに面白し。

高砂の峯の白雲かゝりける
　　人の心をたのみけるかな

これも、全集の全巻にありて、讀人は知れず。○高砂の峯の白雲。この二句は、「かゝりける」といひ出でむ爲めに置ける詞にて即ち、序といふものなり。白雲が「かゝる」といふ縁によりて、いひかけて「かゝりける」の序としたるなり。されど、此の序の用ひざまは誠に面白し。彼の柿本人丸が「なが〳〵し夜」といひ出でん序に「足曳の山鳥の尾のしたり尾の」と置きたるが如き無意の序にあらずして、これは雲の如く、かやうに定めなき浮きたる人心といふやうに有意の序なり。

○一首の意は、高砂の峯にかゝれる雲の如く、かやうに定めなく浮きたる人の心を、さる浮きたる變はりやすきこゝろとも知らずして、いつまでもと頼母しき人に思うたワイ。くやしき事をしたよナアーと恨みたるなり。「高砂の峯の白雲」といへる序の用ひざま誠に面白く、且、一首の調もやさしく、限りなき感情をこめて、身にしむものなり。

○

思ひきや逢ひ見ぬ事をいつよりと

數ふむかりになさんものとは

○これも、全集の全卷にありて、源のさねあきらが、久しう逢はざりける人の許にいひやりたる歌なり。○思ひきや。思うた事かい、思うた事だなかつたといふことにて、やは所謂反語なり。此の句は、末の句なる「なさん物とは」の下にきて見るべし。

○一首の意は、君と馴れ初めたる時には、いつまでも絶えず、久しく親しみむつびんと思うた事であつた。かやうに絶え〳〵になりて、何時より逢はぬと、逢ひ見ぬ事を數へんむかりになさむとは思うた事かい、思うた事ではなかつたワイと絶え〳〵に成りたるを恨みやりたるものなり。

○

なき名ぞと人にはいひてありぬべし

心のとはゞいかゞ答へむ

○これは、全集の十一の卷にありて、よみ人は知れず。互みに深くちぎたる、中を、しむしは世に知られぬやうにと、一人のいひけれど、またの一人がよめるなり。○なき名。跡方なき評判、即ち、虚聞といふことなり。○心のとはゞ。我が自身の心が問はむ時はといふことなり。

○一首の意は、かく私と貴方との契りを、他人が心づきて、あやしみとはゞ、決してさる事はあらじそれは、跡方もなき評判なりと、他人には詐り答へてもあるべし。若し我が心の問はむには、何と答へむ、我か心は、我れを知りたれど、欺くことは能はじ。他人を欺くとも、我が心は、決して欺く能はじ、他人を欺きをへるとも、我が心に對して恥かしいといふことなり。誠に朝夕の敎へとも、

坐右の銘ともして傳ぶべき歌にこそ。

ふゞくろ入れ添

下田義天類評論

原文縣居翁の作

龍公美へ與へし書の續き

天照大御神は女神にれはせと、素盞烏命の惡きに對ふには、男體と成りて弓箭を帶び給へり。それより後の天皇、皇太子、其の外臣をや。かゝれど、其の意より出づる歌即雄々しきなり。一意なり。仍りて、後世より泝りて知らむに所記書面にて大様は知らるれと、所傳は、或は傳の誤り、或は筆者の潤色にて疑しきに、古哥は一言一句一辭をも唱へ誤る時は、其の哥調はぬ故に、必其の句辭を吟定して見れは、古人と即對坐親見するが如し。よりて、古歌はかり、古意を語り古意を學ぶ友はこれなきなり。今京以後の哥は、巧に作れる故に、必其の人の心ともなし。且、山城國は女國にて、男尚女のごとし。故に、少しも雄々しきをは嫌ひて、面うるはしく心かたなし。さて、武を忘れたまへる故に、かく衰へさせ給へり。此の意をよく御考へ候へかし。

此の書は、與へられたる人男子なりしからに、女子のことはれのづから客とせられたり。されど、わが國は、建國のはじめより、武を以ちてたてたる國なることは、前號の本文にも云へるがごとし。所謂、尙武の國なり。くわし矛千足の國なり。女子たりとも、たをやぎたるのみを傳ぶは、わが國風にあらざるなり。雄壯活潑なる國民の母たらむものは、またれのづから、雄壯活潑の國民を養育するに足るべき氣性なからさる可らず、天祖大御

神が、素盞烏尊をうたせ賜ひし時の御有さまとは、古事記に、

こゝに、天照大御神聞きおとろかして、我が汝背の命の登り來坐す故は、必うるはしき心ならじ。我が國をうばゝむと思ほすにこそ。と宣りたまひて、則、御髮を解きてみゝつらにまかして、左右のみゝづらにも、御鬘にも、左右の御手にも、皆八尺の勾璁の五百つのみすまるの珠を纏き持たして、背びらには千入の靫を負び、五百入の靫をつけ、又いづの竹鞆を取佩はして、弓腹振りたてゝ、堅庭は向股に蹈なづみ、沫雪なすくゑはらゝかして、いづの雄建び蹈建ひて待ちとひたまはく、などのぼりきませると問ひ賜ひき。といへるもの是なり。今この言葉を讀み見てだに、其の當時の御出立は、如何に雄壯活潑なりけむと、凛烈たる威風の犯し難かりけむさま、察するにあまりあり。

この外、神皇巧后の御諒闇に籠らせ賜ひながら、しかも御身重の折なるに、それをも顧みさせ賜はず、軍兵をさしまねき、軍船をあやつらせて、遠く三韓にわたし渡り賜ひて、絶代の御偉業を立てさせ給へる、また、臣下にては、調伊企難の妻大葉子が、夫の忠死を見ていきどほりに堪へず、……忿恚のあまりに絶食して敵地にをはれる。田久津の妻か國恥を海外にのこさむことをなげきて、その夫をさし殺して國難をすくひたる。また、くだりては、鄭成功の母田川氏か、そのをはりをいさぎよくして、日本人は婦女すら尚かゝりと、支那人どもの視聽をおどろかしたるなど、皆この尚武國の女子たるにそむかぬものなるべし。この心より歌ひいでむ、歌は、必その大和魂を表揚するに

足るべきものなかるべからず。大伴坂上の郎女、額田姫王等の詠歌は、即その好模範なるべし。

さて、こゝに、最注意を要すべきは、男子の詠歌と女子の詠歌とは、必かはりの有るべしといふ一事なり。男子は氣骨を尊び、女子は愛嬌を重しとす。女子の淑德は貞操にあり。いはゆる貞操とは、愛嬌を專一にする手段に外ならず。女子と生れて愛嬌に缺ぐる所あらむか、女子の本分にかなへるものとはいひ難かるべし。武骨、不遜、大言、放縱等、すべて、圭角あるもののいひは、愛嬌と伴なふことかなひがたし。雄壯、强健、佶伉、勇猛等の擧動も、時にあるひは愛嬌を傷つくることあり。

紫式部は、源氏はゝき木の卷に、左のごとく論じわかれたり。

すべて、男も女も、わろものは、僅にしれる方のことを、殘りなく見せ盡さむと思へるこそいとをしけれ、三史五經の道々しきかたをあきらかにさとりあかさむこそ愛嬌なからめ。などかは女といはむからに、世にあることを、公私につけて、無下に知らず到らずしもあらむ。わざと、習ひ學ずとも、少しもかど有らむ、人の耳にも目にもとまる事じねむ多かるべし。さるまゝに、眞名を走り書きしてさるましきどちの女ぶみに半過ぎてかきすくめたる「あなうだて」「此の人のたをやかならましかは」と見ゆかし。心地にさしも思はさらめど、おのずからこはゞしき聲に讀み做されなどしつゝ殊更びたり。云云、

といへり。かきたる文字、ことばづかひなどにてだに然り。ましていはむや、其の精神をいひあらはしたる咏み歌のあらびたるをや。

つよかれといふとも、其の強きにもさま〴〵あるべし。いかに尚武國人民の母たるべき身なればとて、短衣輕裝して、大道を活歩したらむがごとき粗麁なる歌を好まむは、女子たるものゝ美風にもあらざるべし。紫式部は、彼の源氏空蟬の卷に、伊豫介の妻の貞烈を形容して、人がらのたをやぎたるに、しひてつよきけを添へたれば、なよ竹の心地して折る可くもあらず。といへり。これ女子の勇猛を示せる所なるべし。これらのことは、一朝一夕にはいひ盡し難く。翁が、女子の歌につきての論も、別にかきしるされたるものあり。回を重ねて、追々にいふべし。さて、山城國に、女國なりといふことは、翁が一生いひつのられたる所なり。

彼の新學の中に、此の論ありしを、例の景樹が見驚きて、人ごとしの奇言なりと、かれが著の新學異見に説破したるは、中々に自己の識見の及ばざる所をあらはしたるものとやいふべき。鄭聲の雅樂をみだるも、その國風なり。衛聲の婬逸なるも、その國風なり。國に男性女性あることは、國史に通じ、また、音律に通じたるものに非らざれば知り難し。景樹が自己の耳に其の別を聽き分き難きを思はで、猥に此の翁の卓識を誹謗したるは、笑止千萬といふべし。

筆に任せたれば、文言前後あり。猶かくのみにては盡し難し。そは、御賢察成さるべく候ふ。且最前御詠を論し進すべきよし仰せらるゝにつきて、委しく論じ候へ共、御承引これ無しと見ゑて候へど、今更申入るべき事もこれなく候へども、再往御丁寧に仰せ聞られ候ふ故に、此のごとくに御座候ふ。文章は

た同事なり。多々後音を期し候ふ。謹言。

正月廿日　　岡部衛士眞淵

龍元次郎様

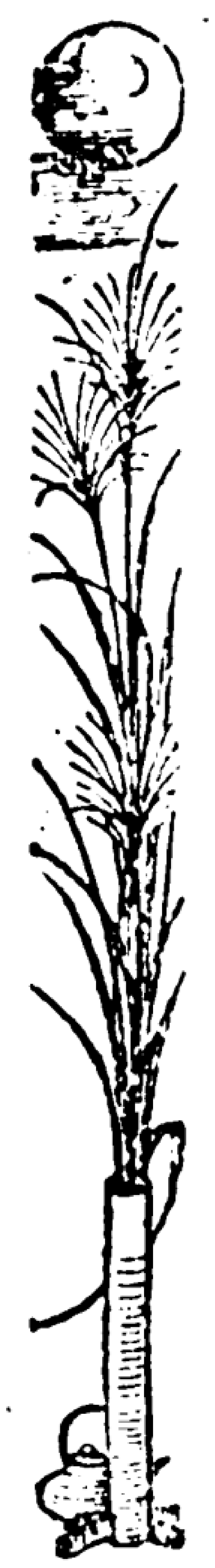
前號正誤

廿七ページ上段一行　姿なるは姿ゐるの誤

廿八ページ下段十二行　ふす猪の床などの床を脱す

廿五ページ上段四行メ　翁のは翁がの誤　同上十二行　多事にとは多事にての誤　同下段五行メ　調は調の誤　同八行メ上　よりしてのしは衍字

同上十一行メ　根據となるは根據とするの誤　廿六ページ上段二行メ　人にもは人々ものの誤　同下段十二行上　友信は信友の誤　廿七ページ上段九行メ　己がはわがの誤　同下段九行上　侍れは侍れどの誤　同上十一行　知らぬは知らねの誤　廿八下段二　人には人々の誤なり



うめくさ

語のおこり一つ二つ

天長地久　老子ニ天長地久。天地所三以能長且久一者。以三其不二自生一故能長生。

鼻高　世説ニ康僧淵目深而鼻高。王丞相毎調レ之。僧淵曰。鼻者面之山。目者面之淵。山不レ高則不レ靈。淵不レ深則不レ清。

口禍之門　孔子家語ニ口是何傷。禍之門也。

渡得船　法華經ニ如三子得レ母。渡得レ船。喜ノ甚キヲ云フ

丁寧　本ハ鉦ノコトナリ宣公四年ノ左傳ニ楚伯棼射レ王。汰レ輈及二鼓跗一。著二於丁寧一。國語ニモ戰以二錞于丁寧一。儆二其民一也。トアリテ軍士ヲ儆戒スル義ナリ因テ殷勤ノ意トナル詩ノ探微ノ箋ニ見ユ漢書谷永傳ニ日食地震。以丁二寧陛下一。此尙警戒ノ意ヲ含メリ後漢書郎顗傳ニ丁寧再三。留二神於此一。至ク相囑スル辭トナレリ俗遂ニ口ヲ加ヘテ叮嚀ニ作ル



漫錄

主從心得草

諏訪忠元寄贈

西國戰記にいわく、惡人に恩を厚く與ふる時は、必その家を滅ぶの失あり。又、恨み重る時は。必敵となる。是、主人の厚恩を忘れて、己か立身を思ふ故なり。又、忠義の者は、厚恩に預る事ありがたく思ひて、主人の用に立んことをおもふ、天地の相違なり。其人柄を見立て、知行高祿をも宛行べき事肝要なり。又、惡人不忠の人は、祿を減じ、或は、役目を取上、古參の者を新參の次に立てあるかなきかにする時は、此の事を怨り含り、終には、敵となりて、大ひに仇をむすぶ事あり。又、至て忠節の人は、其の家を去もあり、或は、死て泉下に報ずるもあり。大事の事なり。戰々兢々。

身を思ふ人をあたりに近づけな　主も親をもころすものなり

主に忠親に孝行なすものと　しらでなすこそ誠なりけり

論語三の註にいわく、小過を赦さゞれば下に全き人なし、賢才を擧ざれば百職癈す。といへり。此の心は、少しの過ちを赦し置ねば、下も全き無事なる人なし。是は大目に見る事なり。寛仁大度を用ひる場所なり。又、賢才を擧用ひて事を取斗らはせずんは、色々樣々の差つかへありて、用事調ひがたし、百職を癈して損失多し。依て、國空虛して諸用自由を失ふ、困窮の本也。堯帝といへども、舜を得さるを以

て憂とす。舜も、又、禹、皐陶を得ざるを以て憂とす。と孟子に見へたり。是に相違なし。君子是を察せよ。愚者の知る所にあらず。たとへしるとも、行ふ事あたはず、行ふ事あたはざれど、君子たりとも、愚人の仲間うちなり。見聞集にいはく、御明君は、關東の御政事は、本多佐渡守に御任せあそばされ候此の人は、儉約質素にして、よき人なり。鎌倉町々割渡しも、此の人の差圖なり。また、京都は、板倉伊賀守に御任せなり。其の時分の大役、此の人にもあらんかと思はる。何分御明君の人を用ひ玉ふ樣を見るべし。

書經に曰、人を知に在、民を安するに在。といへり。此心は、人をして賢人を擧用ひ、國家を豊にして民百姓を安んじ、飢へ寒へなきやうにするを國家を保つといふ。千變萬化說といへども、人をしりて賢才を擧用ひ、民を安んするにあり。是、書經の要文にして、主君たる者の職分、急度心得あるべき事也。智を以て是を明らかにし、仁を以て是を守り、勇を以て是を行ふ。智仁勇の三德を以て國家を治むべし。(是は多くは政事に入用なれども、町人も是になぞらへて、家來の使ひやふ、又妻子を安んずる工夫有べし。

爰に、一ツの心得あり。是も考へ置べき事なり。了簡詞書にいわく、至て正路なる者はむか腹を立者なり。わだかまりなき故なり。智惠ある人は、むかはらもたゝず、佞もせぬなり。むか腹たつ者は正直なれども、量のせまき所あるゆゑなり。佞者は人の氣をすかしとりて、其人の氣に入やうに取扱ふゆへ、先は佞者はよく思はれ、善者は遠ざかるの甚ひなり然れども、佞人にはなけれども、今日輕き町人百

姓風情の者は、又、人の氣を兼ずしては、今日送られぬ事もありぬべし。一様に佞言と斗もいはれざる也。大むね、其の人の行跡とはすれど、多くは其の人の心に叶ふものなり。佞ならずして、世渡りの爲に方便あらんは、佛もゆるし玉ふ事なり。凡佞を用ひてよき事もあり、遠ざけてよき事もあり。佞としりて、心の内に油斷せずして、佞者を使もあり。何れ了簡有べし。梶原か讒言に依て、多くの人を損じぬるやういへど、北條の所爲なり。されど、北條の惡心は、其の様にあらはれず、梶原のみ末世にいひ傳へられけるは、北條の能々前世の陰徳の果報なるべし。又、頼朝公も、梶原が讒言を信用し給ふにはあらず、梶原に讒言させて、夫を用ひ給ふ様に見せて、罪を梶原になすり給ふなり。既に、小身者の内に爭論ありける時、景時一方に荷擔しける事あり。

是を不埒に思し召れ、過怠として、鎌倉中の道普請をさせられける事あり。其の加擔故過怠まで仰付られける程の景時が申條信用し給ふべき頼朝卿にてはなし、景時が讒言せずとも、義經など其の分になし置給ふべからず。幸ひに、梶原か讒しけるを取得にかたの如くなし給ひ、後日には後悔ありときく、是世上への云譯なり。梶原を讒言の役人に使ひ置給ふ御心と覺ゆ。漢治つて、謀臣達罪を蒙る如く、義仲、義經など、頼朝公の爲に皆罪を受給ひし也。又、此の二方など、其通りになし置ても、頼朝公の旨を守り給ふべき人々にあらず、自立の心あらわれたる事數度有、是に依て、頼朝公害し給ふとあり。これは、是、止事を得ざるに用ゆる事なり。常に決して好む事にはあらず。上下ともに、人の害となる事はせぬ者なり。皆手前の不仕合となる因果の道理必然なり。

急度つゝしむしべし。

○和歌教訓十五ケ條

清水眞三郎

こは、二條家(御子左)の流を汲める烏丸内大臣光榮公の歌道教訓にして、德川氏の末つ方まで、正しく傳書として秘藏せられたるものなり。さて、中には、流儀を固守したる箇條なきにあらねど、もと斯流は、平坦着實を旨となせるものなれば、初學の人にはこよなき座右と、かくは掲げぬ。

教訓十五ケ條(二條家流)

一歌道以レ實爲二專要一儀常々忘却あるべからざる事。

一京極黄門三部抄あふぎて信じ深くをもふべし。

一制詞、先達加難詞等能々覺悟すべし。

一稽古の最初、風体やすらかによく聞ゆるやうに心をひきくして習練第一の事。

一初心間早吟尤よろしからず紙燭一寸、一夜百首等已達のうへの事也。日數を經るとも、沈吟辛苦して心のをよふかきりよみつらぬべし、此レ如時は早く道にすゝむ也。一首も麁相に詠むべからず。

一初心間歌數に心をかけず、次第をまもるべし、三首五首十首二十首などより漸々習練百首をよむに至る、最初より百首などよむ事不レ可レ然義也。

一事むづかしき趣向、誹諧めきたる趣向、たはむれ過たる趣向、に堅く愼て不レ可レ詠事。

一異樣なる詞、つまりたる詞、つゞき俗なる詞、手つくりなる言葉、心まかせなる字、あまりの詞、詮なき枕詞、等かたく愼て不可詠事。

一常々ありふれたる題のよみやすきにて詞つゝき優

美に詠習肝要なり。

一常に不レ用題、むつかしき題、堅無用也。初心時むづかしき題は、優美によみがたく、心もはたらく事を得ず、何とぞ題に叶へむとするばかり故、異様になりて風体を損じ、心をさはがして邪路に入る端となる、習練つもりて常常の題の歌、優に心も一門ある様に讀なすほどにいたれば、むつかしき題は何時にてもよまるゝ事なり、依レ之習練に次第あり、次第をまもらざれば歌あがりゆく事なし。

一歌の習練は、古歌を熟覧せざれば不レ叶儀なり。三代集勿論、新勅撰、不斷熟覧怠るべからず。家集にては、爲家卿集、草庵集等尤優美なり。聴雪集雪玉、近代堪能無二比類一此の類を以て二條家の眼目とす。

一作例事右の集ども、勿論可二引用一也。十代集の外は用捨あり、強必と難レ用儀あり。尤數多の家集雜々の書等作例に引用ざる義也。

一詩文章をとる事、最初の習練には宜からず。常々人口にある義は各別也。古事來歷等、尤其事によるべし。

一初心の間、連歌、狂歌、誹諧等に心かくる事努々あるべからず。巳達のうへは何事も難なきなり。

一當時他人の歌批判、先達勝劣堅く論ずべからず。穿鑿は我歌に益なくして、事に害あり。能々つゝしむるべし。

右烏丸故前内府光榮公御教訓也愼可守此旨也

慈

櫻花を送るとてよめる　烏丸内府

この花は愛宕の山の遅櫻
われに見せしを贈る一枝(翁草)

肥後の皇典學の系統

肥後　佐々豊水

肥後、熊本の屋形なりし、細川侯爵の家は、幽齋玄旨公より、古今相傳の家といふことは、世人の能くしるところなり。今の長岡護美子（細川越中守齊護侯の末子にて維新後に家を分て長岡子爵と稱す）其の傳統をうけてゐる也。しかるに、　孝格天皇の天明寛政のころより、細川齊茲侯（越中守）ふかく本居宣長大人の學風をしたひ、藩士長瀬眞幸（熊本藩物頭役）といふ人を、藩費を以て、鈴屋大人の教をうけしめられしかど、長瀬翁（田廬と號す）の教をうけて、藩士に皇典を學ふ者若干名に及びぬ。翁の事は、古事記傳、且又鈴屋歌集には、肥後國長瀬眞幸が此の里に去むしものしける、六月のついたちに、江戸にものするによみてたくりける、

　ほとゝぎすまたこん年のはつ聲を
　　わがまつさかの里をわすれそ
結びわげてつゝみてれくれ隅田川
　すずしき水のつきをみん夜は

とあり。世に去られたる人なり。田廬翁の門より、中島廣足翁（後弘足と改め樫園と號す）出て、藩の皇學師範となる。樫園翁、身まかられぬれど、田廬門の安田貞方翁（蓑素堂と號す）樫園　長男中島廣定翁（後樫園と號す）兩翁出て、藩立時習館の皇典訓導師となる。維新廢藩後に、蓑素堂翁は身まかられ、後樫園翁は、別格官幣社菊池神社の官司職を拜命せられて身まかられぬれど、田廬門の小山多平理翁（栗園と號）其の跡をふみて、敎へられつれど、學者ますますれはかりき。栗園翁も身まかられぬれど、樫

園門の羽田眞足翁につきて、教をうくるもの、熊本市はさらなり、熊本縣の十郡に及びて、男女の門生數多ありといふ。以て、各位の參考に供ふるのみ。

明治三十一年一月十二日。五桂動芳枝樓にしるす。

井蛙小録

井上頼文

昔々物語に、七十年己前（享保十七年にかくいふは寛文年中のこと、聞ゆ）大神宮御祓大神樂とて、毎日江戸中徘徊せける有さま、儀式正敷、先へ鼻高き面をかぶりたる者直衣に白袴を着、御幣を持て立ち、其の次に、十四歳ばかりなる男子を美敷造り瓔珞を冠り、長絹を着せ、白袴を着、中啓の扇を持ち、右の手に鈴を持ち歩む、三番に麻上下着たる男箱を持ち、四番に布衣の裝束着たる男其の次に四つ足附たる大長持の蓋を取て仰向にして置き、其の上に獅子の頭をなほし、中に太鼓を置き、一萬度の御祓を眞中に立て御幣を立て、此の長持四人か六人にて、舁く者もみな、淨衣烏帽子、白きくゝり袴を着て囃子方左右に附き、笛小鼓太鼓拍子打合たる時、右の瓔珞冠りたる舞子神樂を舞ひ、次第に拍子急に詰る、誠



にこんとして慰にたゆる計なり。其の内の興にどうけ人の笑のため、太鼓打烏帽子左右へ筋違てかぶり、時々撥を空に投げ上げなどして、之を大なるどうけとして、見物の者興に入るなり。扨、近年（享保）大神樂といふは、人柄至極浮氣に見ゑ、大白衣、大廣袖、木綿布子、巾廣の帶をして、大白墮落に大脇差をさし、尤大太鼓小太鼓笛は吹けども、唱歌小歌の節に合せて吹き、獅子頭は持て之をかぶりて、さ



ま〴〵好色の興に小歌狂言のみにて、獅子を馬にして、惡所通ひの狂言などに移し、若き男女の氣をそゝり立つる樣にどうけ、下女下男に面白がらするのみと見ゆ。

今、古風の獅子舞の圖と、維新以前大神樂とよべる獅子舞のをの子が曲まりをつかぶ圖とをかゝぐ、

千代の家土産（つゞき）

金津常十郎

ある所に上手とよぶるゝ大工ありしが、或、富家の家を建しに、此の家よくも建しと、來往ふ人のほめ賞じけるに、此の大工大きに心慢じて、世に我がごとき名人の大工あらじと、ほこりながらに眠りし、其の夢の中に深山木あらはれいでゝ、大工にむかひ、汝れろかにも、我上手なりと思ふこそにくけれ。汝

いかに手練ありとも、此の枝木なくて家の建つべきや、此の度よくも家の建ちしと、人にほめらるゝは皆我が功のなすところなり。汝が功は、皆々以てわが功なり。と、大きにほこりてのゝじる處に、鋸ぬつとあらはれ出で深山木、汝ほこる事なかれ。其の方に功をたてさせしは、此の鋸がなせしなり。我なくぞ、生涯山に朽ちはてんに、我是を引き切りて爰につれ來りしが故なり、是皆わが功なりとほこる所に、手斧あらはれ出で、我是をかしこ此所とけづらざれど、全き材木と成るべきや、家を建てし功は我にあり。とのゝじる、所に鉋はしり來りて、汝自慢することなかれ。汝がよしけづるとも、われなくして、清き玉とならんや。家をなせる第一番はわれにあり。といふ所に、鑿すゝみ出で、大きに汝過言なるぞや。いかに木をこそげなすとも、我なくて、之を彫らで、家の建つべきや、わが功殊にすぐれたり。といふ所に、錐身をもみてかけ來り、汝鑿ほこるなよ。汝がいかに彫るとても、某なくて、家のしまりのよかるべきや。作事普請の肝要は我にありとほこる所に、釘ぬつくと來りて、錐汝をよしとする事なかれ、汝ありとも、われそはされど、穴のみにして、世の無益なり、我こそ第一の功あれ。と大きにほこりいゝしる所に、金槌ぐわたぐかたとはしり來り、行きがけに、釘のあたまをたゝきこみ、先刻より、汝等大にほこれども、我にまさるものあらんやと、一同にたゝき廻る。其の勇猛一騎當千なる所に、したらく〳〵汝金槌、ほこる事なかれ。と、悠々せんとあゆみ出でしは、墨壺、曲尺、規、水もり道具、打ちそろひ　、高聲に申しけるは、汝等皆々ほこる事なかれ。汝等は、皆一事の小輩軍卒なり。

我は規矩準繩といひて、大將なり。我さしづ軍配にて、汝等に功をとらせんも取らせじも、我方寸の一にあり。我に上ゆくものあらんや。何と一句あるまじ。と大きにはこりのゝしる所に、小判ピカピカとあらはれ出て、あゝ汝はこる事をやめよ。汝等いかに、智略ありとても、此の金銀か申しつけねど埒あかず、又何國の家居普請にても、能く出來たりと人にほめさするは、皆々わかよく働き手傳遣すゆゑなり。何にかぎらず、吾等か手傳のすくなきは皆あしく、吾等かよけいに手傳へど、いつにてもよし。大工道具も、材木も、大工人も、ともにつかひうでかすは、皆々以てわがちからなり、我が功なり。すべて世の中に、我に上こすものはなし、我より尊きものはなし、我よりまさるものはなし、汝等皆々爰に來り、頭をさげ、手をつきて、九拜百拜せよと大はこりにはこりける。其の折ふし、日月皎々と光りをはなち、天つ御空に聲ありて、

黄金をば口なしいろとまをせども
　　れはくはこれがものいひとなる

此の道歌の如くにて、汝金銀、自ら己を貴しとはこれとも、其の金銀故に、災人の身に及び、家に及び、又世の非義不義理も、盜人も、皆これのれより出來るなり、其罪あるけがらはしき身をしらで、己をはこる大馬鹿もの、いでいで罰し刑せんと、日月大きにいかりたまへど、金銀それぞれて平伏し、ゆるさせ給へ、ゆるさせ給へ、全く我々人の命を危くし、人の非義、盜人などを出すのみにても候はず、人の命もたすけ、家をも建てさせ、身をも立てさせ、忠孝仁義をも助け、子孫長久、神社佛閣、慈悲、陰德をもなさせ申し候ふも、私どもがなす處なり。と

申しければ、日月ます〳〵いからせ賜ひ、人の命も子孫長久も、忠孝仁義も、慈悲陰德をなす功も。これ全く、汝等が功にはあらで、是は世界に此の上なき誠といふもの丶功なり。此の誠は日月星辰も、神も、佛も、聖人も出る所にして、世に此の誠より尊きものも、有難きものも、かしこきものもなし。此の誠のさしづをうけて、汝等働き通用するときには、いかにも、人をも助け、陰德慈悲も、子孫長久も、義理も、全く、世の助けとなりて、己が身も清く後世までも、金色の名を上ぐるものなるに、其の尊き誠實にはしたがはず、不義、非道、不實にくみして、人の害、世の難義をなし、不忠、不孝、不義、不實の腰をれし、己等もともどもに、死銀となる事を知らぬ身を以て、我にれでるぞおろかなる。世界に誠と實義より尊きもの丶あるべきや、仁心以て寶とすといふも、皆この誠のことなるぞや。世の人、皆々、其のまことの貴きを知らずして、金銀のみが貴しとおもへるぞ愚なる。誠なるより明かなるはなしとて、誠あるものは明にして、謙遜無欲に心安し、誠なきものは、知惠くらく、慾のみにして我にほこり、安心ならず、大工ほこるとも、木なくんば功をなさんや、材木ありとも、道具なくば何ぞ功をなさん。頭貴しとても、足なくば立たゝず、手は自由なりとて、耳、口等のかはりも出來ず。眼千里を照せども、鳥渡、臍の名代も出來ず、萬物皆、一德あれば、一失あり。其の中に、頭は頭の誠を守り、手は手のまことを守り、足は足の位に素して、誠あれば、五體和合し治りてめでたし、主は主人の誠に素し、親は親の誠に素し、家來は家來の誠に素し、子は子の誠に素し、夫は夫の誠、妻は妻のまこ

と、兄弟朋友れの〳〵其の誠の位に素して、誠あれば、いのらずとても、神も、佛も、聖賢も、深くめぐみ賜ふべし。汝金銀、此の後は、かりにも、不義、非道、私欲、身勝手にしたがはず、寢てもさめても、立ちても居ても、只誠にしたがへよ。是にそむかば、天罰忽ちまのあたりなりと大音にて、日月あきらかにのたまふかとおもへば、大工夢さめて、あなありがたやといふまゝに、心の眼をひらきける、とかや。さる物がたりも、皆々是を會得すれば、出世するに至るなり。先刻よりの永物語り出世鯉の意味御得心ならば、此の鯉の掛物求めたまへとまをされけるに。予頓首作禮して、扨も〳〵翁の敎訓、世に有がたく出世鯉の意味得と承知仕りぬ。世々に傳へて、永く子孫の御守りと、偏に秘藏いたし申すべし。此後は何によらず、唯うつむきて、へりくだり申すべし。

翁の曰く、うつむくも、あふむくも、頭をさぐるも、上ぐるも、また爰に心得あり。忠信、孝悌、仁義の道には、舜何人ぞ、我何人ぞ。と、勇氣まん〳〵として、隨分あふむき、まけじおとらじとすゝむが出世の道なり。又、衣、食、住ゐゐう、奢はせぬやうにと、質素、儉約にうつむきて、隨分堪忍し、まけて〳〵頭をさげ、下をみてくらすが、出世の道なり。

忠孝の道には誰もおとらじと
　上みてすゝめひとの心に

衣食住ゐゝうは誰もうつむきて
　下みてくらせひとの心に

人は、只々上を尊び、身をへりくだり、神をあがめ信じ、ありがたき御代の御恩を尊び、主親を大切に

し、夫婦、兄弟、朋友むつまじく、己々が職分家業を大切につとめて、怠たらず、人に無理せず、無理いはず、子孫長久のためには、陰徳をなし、慈悲心あつく、下たるものをあはれみ愛し申すこそ是にまされる出世の道はあらざるなれ。翁が此の永物語直にかいつけ賜ひて、年々の東下り、都のぼりの家土産になし賜へと大笑ひしてさとされける。此の翁のねもごろなる教訓を、人にもかたり、身にも守り、永く子孫に傳へむやと、まはらぬ筆にしるし殘して、誠に、こたびの家土産は、之にまされるたまものあらじと、心ひとしき原在明子の筆を勞し、畫を和て、兒女の目ざましながらも、此の出世鯉にのぼり賜へと、千代の家土産と題し侍る。見たまふ諸君子、拙文のわかちがたきをゆるし賜ひて、かの翁の深切をのみ守り賜ふて、代々目出度出世し給はんことを希ふのみ。

（をはり）

日本女禮式と普通禮式

有住常子

龍頭鷁首を唐のよそひに、事々ししつらひて、梶取さをさす童部、皆みづら結ひて、もろこしだゝせて、さる大なる池の中にさし出たれど、まことのしらぬ國にきたらん心持してあはれに面白く、見馴はぬ女房などに思はせたるは、下田歌子の君が著せる普通禮式にして、

ほかには盛過たる櫻も、今さかりにほゝゑみ、廊をめぐれる藤の色も、こまやかにひらけゆきけり、まして池の水に影をうつしたる山吹峯よりこぼれていみじきさかりなり、水鳥どものつがひを離れず遊ひつ

ゝ、細き枝共をくひてとびちがふ鶯鷲の、波のあやに紋を交へたるなど、ものゝ畫樣にもかきとらまほしく見せたるは、「國分操子君が著せる日本女禮式なるべし。

日本女禮式の凡例のことに、

○包結法は伊勢流に從ひ云云

○諸禮數献は小笠原數献の内より云云

○本書載する所は、單に小笠原伊勢等の古法のみによらず、諸流を折衷して時には己の意見を加へたることもあり。

といはれたる樣は、ほかは盛過たる櫻も、今さかりにほゝゑみたるが如く、

○方今女禮式に關する著書甚多しと雖ども、多くは、作法技藝の外形のみに止まり、其精神を教へたる者あらず、本書は中等社會を標準として、專ら精神上に關する事を說き、技藝の如きは之を他の書に讓れり。

とかゝれたる樣は、廊をめぐれる藤の色も、こまやかにひらけゆきたるが如く、

○本書名つけて、日本女禮式といふと雖ども、現今中等以上の婦人にありては、外國人と交際する人すくなからず、西洋女禮式の一般なる心得置くも必要なるべし。故に、末章に於て、英國にて宮時行はるゝ所の言語動作擧措動間に關する禮式を述べたり。

としるされたる樣は、池の水の影をうつしたる山吹、岸よりこぼれて、いみじきさかりをとゞめたるが如く、

○女小學云々

○女百人一首は云々

○烈女傳に云云

などのせられたる樣は、水鳥とものつかひを離れず遊びつゝ、細き枝共をくひて飛ちがふをしの、波のあやに紋を交へたるが如く、げに〳〵うるはしくものされたるげなり。

又、普通禮式の緒言をよむに、

○禮は世の物事の移り變るに從ひて、其面目を改めざる可らざる者なるが故に、或は公家によりたる式、武家は基せる法、又は泰西諸洲の儀など、事に臨み時に從ひて、甲を取るべきか、乙を取らざるべきかと、これに關する各種の疑問を、なしゝ予輩の持ち出でゝは、ちが答へを促さるゝ儘に、身は武門の家庭に生ひ出でゝ、やんごと無き御あたりにも仕候し、かつ〳〵歐米各國の交際場裡にも立ち交らひつるなれば、拙なしと知らむと云ひたりとて、人の容易

く許すべきにもあらず云云

といはれたるは、龍頭の龍の水を得たるが如く、

○封建時代に行はれたりし禮式作法の、執りて以て今日に行ふことの難きは云ふも更にて、（中畧）其頃女禮を練習實践せしに、將軍及び諸侯の奥向にして、諸侯の奥は、恰かも、女子が禮法練習所の如く云々

物の本に記したるは、たゞ僅かに、節用稗珍示の如き、或は百人一首の鼇頭に掲げたるなどに止まりて、他に禮法の書として世に行はれたるは、大抵男子が學ぶべきものなりしに似たり。然るに、其禮法練習所は、廢せられぬ。節用本は、大方しみの住居と成りぬ。世の文明に進むに從ひて、一旦、世界革新の風潮に打ち破られたりし本邦固有の禮の必要は、世海の潮の秩序的進行とゝもに益々高まりもて行きつゝ、加ふるに、四海僉、兄弟として、外國の交際頻繁なるからに、又泰西の禮をして知らざる可らずと云に至れり、爰に於てか、女子の學校塾舍に在りても、爲に、禮式作法を授け教ふる者、やうやく其數を増すに至りぬ云云

といはれたるは、鷁首の鷁の風に向ひたるが如く、いきほひ最も猛なりと見ゆる氣なり。

またことに、

○佛の、ルーイス、ダルク女史、嘗て、禮法書を著すに當り、記して曰く、「禮とは社會の習慣儀式を知るの義なり、即ち、世の習慣の規則を登載するにも、禮なる文字を用ゐるは是故なり。」と云へりき。然り、禮はもと其社會の習慣上立つる所の規則をさして、さる名稱は附したるにこそ。又、韓詩外傳に「首ニ天地之禮ニ因ニ人情ニ爲ニ之節文ニ者也」と説けり。こも亦、自然をもとゝし、人情に因りて、宜く節文を爲したりとの意にしあれば、禮は孰れの道よりいふも、社會の習慣、交際上、其秩序を立て、其法則を定めたるにこそあれ云云

とはじめにかゝれたるは、梶取をさす童部皆みづからゆひてもろこしだゝせたるが如く、まことにあらぬ國にきたらんこゝちして、あはれに見うけらるゝなり。

かくうるはしく、あはれにものされたる二の書につきて、思ふよしをいさゝかつらなべて、著者のをしへを仰かんとほりするなり。

まづ、日本女禮式にかゝれたる、父母に事ふる心得、夫に事ふる心得、舅姑に事ふる心得等、すべて十一種の心得なはあれど殊に十一種の心得を扱ていふ）は、言の葉にかきつめていは

すとも、たはかた人の知りたる事と思はるゝなれど、うるさきかたにや、ことさらに書つめでもあらまほしと、ひたふるに思はるゝなり。

また、包結法は、こと足らぬ様なり。いますこし、異様なるをもそへて、かつむすぶべきさまを委しう述られたらんにはと思はるゝよ。

なほくはしうあらまほしきは、第四章起居動作の第一節なる、日常座作進退の様なり。第三節物扱扱ひ様も、第四節取次仕様、並に物進め様も、第五節物受様、並に見様も、第六節飲食に關する心得も、また、殊に、此の章なからましかばと、あきらかに思ひくださるゝは、

第十章饗應の條なり。第一節給仕の心得の條はれはかたよろしかれど、二汁九菜、二汁五菜、一汁三菜などものされたる、膳部の圖にてなむ。

第三節四季の献立に、正徳年間の著なる、高島流の料理法を摘あげられたるは、此の書のうちのいたき疵にて、いと〳〵くちをしきかぎりなり。又十一章千家の茶事は、たゞにそへたるものとよそによみなして、心とゞめざれど、いはまほしき事もあらずかし。されど、是もと思ひなさるゝはひが心にやきかまほし。

されど、かくは思ひたるふし〳〵をかきなせるものから、此書のあしきを、いふにはあらぬかし。

○頭書にあげられたる女百人一首、列女傳をよみても、編者の此の書に心をこめられたるをしれど、女禮の事かきたる書、いにしへはさて、近く著せる、

（女のしつけ）　石川縣

明治十二年七月九日著　石川縣女子師範學校

（男女諸禮簡易式）　京都市

明治廿四年二月花の園生掲載

（日本の裁縫と女禮）　大坂市

明治廿五年十月廿一日出版

（百人一首詳解頭書諸禮式）　大坂市

明治廿六年十一月十一日發行

（寶正小謡語祝言頭書諸禮式）　金澤市

明治廿六年十二月廿日發行

（小笠原御家流禮式圖解）　大坂市

明治廿七年二月

（和洋禮式）　東京市

明治廿八年五月十五日發行

（男女諸禮式大全）　東京市

明治廿九年九月六日發行

（新撰挿畫日本諸禮式）　大坂市

明治三十年二月二十日發行

（日本女禮式大全）　東京市

明治三十年八月八日發行

これらの書の、はるかに上に位せることゝ、たれ人も、まさやかにしることを得たらむ。されども、

（小學女禮式）　東京市

明治十四年五月

（禮節要抄）　東京市

明治十七年十月

（女禮式）　京市

明治廿五年八月

この三つの書の正しきにあはせて、其のけぢめを付たらんには、櫻のけだかきも、藤の濃紫なるも、山吹のこがね

の色も、うちけたれて、みな、造りたる花とやならまし。

かくはいへど、なか〳〵に、此の三の書にも勝りて、今の世にもちゐらるべき所々また多かるなり。

そは、第一章總論に、

(前畧)抑も 皇國の國體たる、風俗極めて純良優美にして、内は一家睦しく、外は上下相親み、其禮讓の美風、敬愛の良俗は、遂に、萬國に冠絶して云々

高尚優美なる、皇國固有の禮式ありて、二千年來、長く風教を維持し來れり、然かるを何ぞ妄りに、風俗習慣を異にせる、外國の禮に心醉して、之を遵奉すべき理あらんや。さりとて、又何事も進歩開化せる、明治の今日は、皇國固有の禮式とても、昔の優長なる云云一々墨守すべき時代にあらざるなり

されば明治の御代の女子たるものは、皇國固有の教を基として、西洋の長を取て、其短を補ひ、弊に流れず、粗に陷らず、時勢に適したる、高尚優美なる禮式に從ひて云云

といはれたるにてしられたり。

とまれかくまれ女の禮の書のうちのすぐれものなることは、うごきなく思はるゝなり。

つぎに、普通禮式についていはん、

まづうちかたぶかるゝは、膳部の圖のあたりなり。

熨斗鮑包の圖のあたりなり。

すべて〳〵までゆきまでに、つくりなされたる龍頭鷁首のよそひ、そがよしあしはふみでにかくことをゑず、世にぬけいでたる繪たくみなりともとれもはるゝよ。

さはあれ、しらぬ國の人は、よくかきとらんかし。

めでたきほどは、日本女禮式にも、いといたくまさりたるやう、世人はれもふならめど、しからざらんか。

あはれ〳〵、日本女禮式は、このくにの花の如く、普通禮式は、しらぬ國の船なるべし。

反古しらべ

川島白鷗

○縫箔の小袖

むかしは縫箔など、なみ〳〵の者の、着ること能はざるものなりしが、寛文の頃より、之を禮服に用ふるやうになりたり、寛永の頃には、京の六條の遊女、地なし縫箔の小袖、又は縁箔の小袖を着たる由なれども、そも島原に遷りてよりは禁止せられぬ。其頃の縫箔は、絹地に繁畧なる縫をして、ところ〳〵摺箔したるものなりし由。昔の質素おもひ見るべし。

○六尺袖

たんだふれ〳〵六尺袖を

と謡ひしは、延寶天和の頃にて、一尺五寸を大振袖と云ひしが（一尺五寸四ツ合て六尺袖也）、貞享の頃より一尺七八寸となり、漸く長くなりて、二尺より二尺四五寸にもなりたる由、即ち一蝶が四季繪跋に、

髪のつとねりをこねず、ふり袖大路をすらず、

とあるも、延寶天和の頃より、享保の頃に至る、其風俗の變りたるをいひしならんか。

○吉彌結

吉彌結とて、帯を丸結にして、兩端をだらりと下ぐるは、延寶の頃、女形歌舞伎の上村吉彌といふものゝ、結び初めしものなるが、當時大に流行て、帯屋はこが爲めに、尺長さを別に調達へける程なり。また其頃急に鉛の直段の高くなりしは、その結びし帯の端に入れしゆゑなりとか、今は入れず。

○お高祖頭巾

寛永の頃、江戸にて婦女の外に出づるに、黒き絹あるは綿などにて、頭面を裹み、目ばかりを露出しける、之を氣儘頭巾と云ふ。其角の句に、

日ごかりを氣儘頭巾の浮世哉

ど、現今のお高祖頭巾は、これが遺製なるべし。

○序に一つ

天和貞享の頃は、風俗甚だ質素にして、有福の婦女などの花見小袖とて「成ほど手をこめ、結搆にだてなる物ずき」に、新調たりといへども、絹紬を無上とせし由。現時の婦女の贅澤なるに比して、空恐しき心地す。

才くらべ（十六）

蓬生屋女史

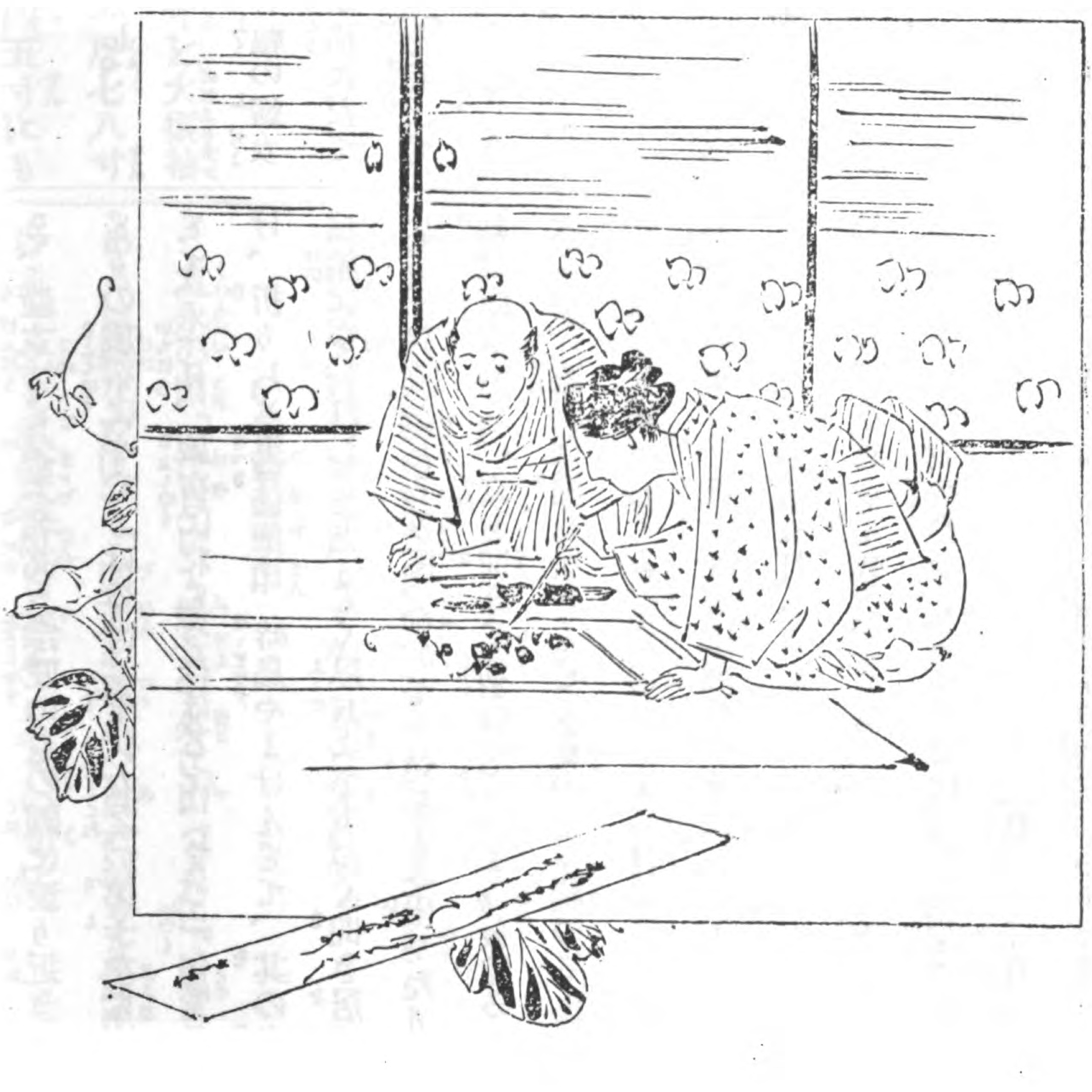
加賀の千代

げに千古も朽ちせぬ名をど流したる加賀の千代、まだ幼かりしより世に俳諧の道をいたく好みて、よき師を求めけれど、とかく其師を得ざりしに、あるとき、盧玄坊と云ふ名高き宗匠のその國に至り近きほとりの旅宿にやどりけるに、千代女之が弟子たらんとて、一日、旅宿におとづれけるに、まづ一句をはけ、折りしも五月なり、時鳥やよけんとて、其の身は旅につかれしとて、とく臥戸にありつゝ聞き居るに、千代女かしこみて、やがて一句をよみ出でたり。坊は臥ながら、之を聞きて初心の者のよみ出たる句ならず、誰かに聞しならんとてそのまゝ捨つるに、千代女はなほかしこみ、また一つよみけるに、坊は答へもせず、千代女はなほ屈せずまた一つよみけるに、こはそも、坊は打ちふしていびきの聲のみ高く答へけり。されど千代は、なほ、坊が枕の下にかしこみたるまゝ、吟意をこらすほどに、日は高う、ろげんが枕にさしたりしに、おどろき見れど、千代なほかしこまりをるに、御身はなほ其處にありけるか、

夜はあけにけるやなどとて、なほ起きもあがらぬに、

時鳥〳〵とてあけにけり

と答へけるに、坊もいたく感じ、枕を叩きて沈吟し、此子非凡なりとて、遂に師弟のちぎりを結びけるとぞ。かばかり熱心なる千代女、あるとき「なは七度の別れなるらん」と云ふに、上の句をつくる事ありけるに、流石の千代女も、七度、八度、考ふれどよき句も出でざるに、いと口惜しく、あけくれ思ひめぐらし、思ひ疲れて、ふとまどろみけるに、八重櫻の花の一片、ひら〳〵と風に吹ききたるに、千代思はず一重づゝ風の吹きしく八重櫻といふ句



を得てうれしく、飛び上れど、ふと夢はさめにけたりとぞ。物熱心なれど、思ひかけぬ才をも得るものなりかし

あるとき俳諧の名人つどひし席に、千代女も交はりしを、ある人、その女子なるを侮りて、

　名木の中にまじはる行々子

と云ひたりしに、千代女たちどころに

　ふるつたあとで匂ふ茶むしろ

とつけ、また「どうしても」といふ題に、

　どうしてもれ月の笠に紐がない

と云ひて侮りける人をはぢしめ、大に面目を施したりと云ふ。畫をまた越後の呉俊明といふに學べり。或時、或る人來りて、畫を上に書き、下に讃をかきくれよと云ひけるに、千代女、直ちに筆を取りて、朝良の花の蔓のたれたるさまをあはれに畫き、その

　朝貌や地に咲く事をあぶながり

また永平寺の長老が、一念三千の意を句に作るべしと需めけるとき、

　千なりも蔓一筋の心から

これは、老子がいはゆる天一を得れど、淸く、地一をうれど安し、孔子がいはゆる、一以て貫ぬけりなどの意にて、其の才またいみじからずや。

笑話

か、み、

　雀は飲啄有餘

　啄木は常に餓

雀と啄木とは、前の世にて親しき姉妹にてありけるが、家貧しき爲め、二人共に他家の婢となりぬ。日を

經て、父、重き病に罹り、既に危く見えけれど、二人の許に人を遣して、其の由を知らせけり、雀は聞きて打ち驚き、あはてふためきて、褐色の衫を着けたる儘走りて父の許に歸りしに、未だ息絶えでありしかど、父も、いたく、とく來れるを喜び、後の事どもをいひ遺して失せき。さて、啄木は報を得て驚かざりしにあらざれども、まづ衣を更へ、脂粉をもつけて、美しく着飾りて出で立ち、來りて見れど、既に事切れたるのちなりき。かくて今の世に、共に鳥に生れ變りしが、雀は褐色にして、啄木は五色の彩美はしく、また、雀は食物に餘りありて常に食ひあけども、啄木はひねもす木を啄き、僅に虫三つを得るのみなり。此も亦、前世の報なりといふ。

犬尿擧足

僧空海なるもの、曾て唐土に行きける折、路の傍に麥を曝せるを見て、思ふやう、我か國には未だ此の麥の種なし、これを持ち歸りて殖ゑんには大に國を益すべしとて、一掬すくひ取りて袖に入れて行き過ぎんとせり。こゝに唐土の犬は、物を嗅ぐこと殊に妙にして、少し許りのものを偸みても悟らざることなし。されど、近邊の犬ども群りて、頻りに空海に吠え付きければ、邑人賊ありとて、出で來て空海を捕へけり。空海、神通を以て麥を日本に擲げしかど、邑人詮索すれども怪しきことなし。さて、邑人ども、犬の謬り吠えたるを怒り、集りて、其の後足を折らんとしけるに、空海犬の寃なるを知れゝど、ねしのびずて、乞ひて之を放ちやれり。此より後は、犬尿するごとに必、一足を擧ぐ、此は空海の賜を汚さいらんとするなりといふ。

まつの庵（三）

白魚女史

君まつ虫は此處にこそ。なむづかり給ひぞとたはぶれながら高藤の起き上り給ふに、さては、先きよりの言の葉聞こしめしてかと思へど、少女はいとゞはづかしく、扇をいよ〳〵深くさしかざし、御膳もまろどんどかりに置きて、いざり去るうしろでに、みどりの髪ふさやかなるが、紫こき袴の下までこぼれたるいとめでたし。

松虫の音を立つるに、さや、さやうにれどろきかくるゝものをなど御子はなほたはぶれさせ給ひながら持てこしたかつきの前にさしよりて見給へど、たかつきに折敷をすゑ、かはらけにはしを置きてありけり。

又何事か母に強ひられ、是非なく持ち來るを見れど今しもたきけんとればしき飯にそへて、小大根、あはび、やきとりなどを折敷にすゑて持ち出で、はづかしさにかしこくもすゑず、遠どみれきて、居ざりのきて歸り入らんとし、あなまちねと留むる聲に思はずもわなゝきたり。

何をさやうにわなゝき給ふ。さつ矢はたどさめど、聲はむくつけけれど、情にはれくれぬ武士今少しこちへより給へとあるに、少女は、はづかしさもわりなく、歸り入らんも流石にて、去りもえせず、よりもえせず、たゞれづ〳〵疊のちりひねり、やがてはそのまゝ去らんとするに、そは誰れに與へ給ふ飯にや、我にとならど、さは、天雲のよそにするで、此處へとあるに、少女も忍びていざり出でたるを見れど、頭つき細やかに、額づき髪のかゝり、かやうの



者の子と見ゑずいとうつくし。流石高藤卿もまだ十六夜の月はづかしき年浪、まぢかくては中〳〵に見るもまばゆく、顔さへ赤くし給ひて、言もゑ云はず默し給ふ。少女はなほさら悲しきまで耻かしうやう〳〵御膳すゑて、すべり去らんとすれど、にくや、袴の裾のからみてまろびかゝりしに、また一入の夕日をそへて、顔も心も火の如き思ひ、やう〳〵はひ出て、遣戸立つれど、さのみ力入れしとも思はぬにはたと音して一二寸かへる、重ね〴〵のわりなさに不甲斐なくさへなりて、涙さしぐむを、又もや母の呼ぶ聲、答へん言の葉も出でずせんすべしらにたゝずむに、何をかなしをる、母の呼ぶ音は聞ゑざりしやいざとく之れをも持ち行きねとて、母なる人の銚子とらせんとて、あな、何を涙ぐみてぞ、をかしき子やとかごとしながら、自ら遣戸近う歩みより、此の子は何事ぞ、御膳すゑたるまゝ、おとをも絶ちぬるおろかさよ、如何に山深くて、問ふ人もなき住居日來ならはしなきことて、かゝかりは心すべきを、幼きにも程こそあれとつぶやき〳〵、御前に持ち出で幼きすゑやうやとつぶやきつゝ、御膳などすゑつくろひあまりに、粗らかなる御もてなし、御はしつけ給はんものもなう思召めされんが、山家住居、參ゐらさんものも侍らず、たゞ一時の糧ぞかりに召し給ひてよなどとて、かはらけとりそへ、酒さし、肴すゝむるに、卿も日ねもす狩りくらして、空腹の折りからなれど、下衆の家ながら、すゝむるまゝに酒ものみ肴も食べ、飯さへ聞こしぬ。

重武にも同じもののまゐらせ、主人さへ出でゝ、さま〴〵もてなし、はては臥戸かまへて、いねさするに卿も厚き情を謝しつゝ、かまへられし臥戸に入れど

なれぬ山里の秋の夕べ、木の葉のそよぎおそろしういもねられぬに、とく見し少女が面影そゞろ心にうつりてなつかしきものから、ありつる女此處へ、物や語らましとあるに、少女も、その事、かの事、心にもえつゝ、消えつして、いも休まぬ折りから、君が召し給ふ、とく行けと母なる人の言の葉に、またもはづかしう、からくれなゐに貌をはそめなして中々に答へもせぬに、いつまで幼きぞ、はや十四にはあらずやとく〳〵行きて、君が御心を慰めまれつと父さへ聞ゆるに、少女は是非なく立ちたれど、なほおづ〳〵と足もすゝまぬを、いつまでたゆたふ、とく行きね必ずな君の仰せに背きそ、くれ〳〵もうやまひかしづきまつれと母はとかく心もとなげに、えりなとつくろひつゝ、さま〴〵云ひ聞かすれど、少女は中々にゆゝしう、如何なれば母様かくもはづかしきめにあはす事ぞと、心にかこちつゝも、やう〳〵君が臥戸に至り、おぢ〳〵と遣戸ひきあくれど、こちへとて君は早くも引き入れ給ひ、近う見たる貌つき、けはひ、いともまさりてらうたく、霞の眉おぼろに、月の目元すゞしきに、うらはづかしき色を注ぎ、ふくらかなる頬にあどなき香さへこもりてえも云はぬ愛敬げになつかしう、衣はたゞうす紫一重のみにて、あやも、にしきもかざらねど、つくらぬかほりは、中々に、玉しきの都にも、九重の御垣の中にも絶えてあらぬに、息の根も絶えんばかり、はづかしうするけはひ、君はいよ〳〵らうたく、あはれに身にしみて井筒にかけしまろがたけはあらずやと問ひ給ふに、少女は答へんすべもしらず、さしうつむきのみするに、如何にぞや、答へなきはありてにかなど再度三度とひすがられ、やう〳〵、誰か

はゞぐべきと息の下に答へたるに、君は返す〲なつかしう、さらぞな、我ならぬ人に必ずなあげさせそと、黒髪をかひなで給ひ、幼き心にも、行末の事まめやかに、くりかへし、〲ちぎり聞ゑて、長月の長き夜をつゆまどろまず語りあかし給ひぬ。

文林



社頭春風　　東久世通禧

いはひ杉みどりとそひて神かきの
　ゆふしてなひき春かぜそふく

春雪散風　　佐々木高行

さゝの葉に積りもあへずそよと吹
　風にちりゆくはるのあわゆき

氷始解　　久我建通

うす氷はやとけそめて立かへり
　春をよせくるいけのさゝなみ

庭春雨　　鍋島直大

春雨にはのしば生もうるほひて
　わか葉もけさは見ゑわたる哉

山春曙　　長谷信成

山のはの松のむらたち見ゑそめて
　かすみわたれる春のあけほの

明治三十一年のとしの始に　　福羽美靜

老の身もまたわかかへる心ちして
　祝ふはとしのはしめなりけり

早梅　　諏訪忠元

こん春をひとへへだてゝ中かきに

はやくも咲ける梅のはつはな

早春柳　宮地嚴夫

雪はふり水はこほれとおしかきの
やなきに春のいろはみえけり

深夜春雨　北郷久政

靜けさにねさ出て見れはぬは玉の
よふかきそらにはる雨そふる

江春曙　植松有經

三島江のたま江の柳はのほのと
あけゆくなみの上にみえつゝ

湖上歸厂　鎌田正夫

ひらのねの霞かくれになりにけり
堅田はなれしかりのひとつら

見梅　岩崎勝從

鶯もなかぬあしたそなかりける
うめさきにほふかやの軒はに

都雪　下田義天類

立ちつゞく軒もいらかも埋もれて
ゆきにはてなき武藏のゝはら

倭姫命　佐々豐水

しらま弓いそのいつきの宮はしら
たかく仰がなひめのみいさを

伊勢御息所　仝

ふる里の花みてかへることのはの
にほひゆかしき人にもあるかな

池邊鶴　三輪義方

あしたつの聲さへうつる心ちして
のとかにすめる庭のいけみつ

早春望山　足立正枝

あなかちに打霞まねと春といへは

きのふにも似ぬ四方の山〱

竹雪　三浦千春
杖にまだ切らぬさきより呉たけの
つちにつくまてふれる雪かな

女鑑第百四十五號に十一歳なる荒木田閨女がはじめて歌よみけるとあるを見て　菊地眞澄
ちはやふる神代を受けししき島の
道のまことのことのはそこれ

富士　横山碩次郎
千早振かみよなからのみゆきもて
かさるもをかし富士のしは山

窓前梅　鍋島榮子
鉢うゑはさかり過ぬとみしほとに
ひらきそめたる窓のうめか枝

早春柳　前田朗子
霜かれは寒けに見えしやなきはら
のとかになひく春はきにけり

雪中鶯聲　小池道子
世ははるになりにけらしな搔くらし
ゆきはふれともうくひすの鳴

森鶯　松平健子
打かすむあつまの森のみしめなは
ひきはへてなくうくひすの聲

池邊若草　日野西廣子
霜はしらたゝすなりたる池きしの
いはまの小草もおいてにけり

霞添山色　保科節子
さしのぼる日かけかすみて大空に
紅にほふ富士のしらゆき

月前梅　大谷靜子

夕月夜かすみはつらんまとのとに
うつりし梅のかけそきえゆく

四方拜　諏訪晴子

あさひかけのはるやかてに大君の
御代安かれといのりますらん

里鶯　坂田泰子

人遠きさとわのやともはるくれは
まつうくひすの聲そきこゆる

田家鶯　原田蒼生子

小山田のしつかかきねも世の中の
はるにはもれすうくひすの鳴

夜春雨　小川直子

れもふとちかたらふ宿は春さめの
靜なる夜そたのしかりける

早梅　安東菊子

雪ふかき谷間にこもるうくひすに
しらせまほしき梅のはやざき

うれしき物　仝

何をかもわきて嬉しとうたはまし
たのしきことの多きよなれは

修身まり歌　東宮鐵眞呂

一ツトヤ　ひとりを愼しむ修行こそ、修行こそ、
よろづの修行のもとゐなれ、基なれ

二ツトヤ　再たび得がたき玉の身を、玉の身を、
けがさず保てよ、人の道、人の道、

三ツトヤ　見聞につけても思ふべし、思ふべし、
他人の善事も、あく行も、惡行も、

四ツトヤ　よろこび怒りも程にせよ、程にせよ、

適度を過せば、仇となる、仇となる、
五ツトヤ　いつでも心に、忘るなよ、忘るなよ、
君と親との御惠を、御めぐみを、
六ツトヤ　むかしのよき人かゞみとし、鏡とし、
我が身も務めん劣らずに、劣らずに、
七ツトヤ　歎くもかひなきくり言は、くり言は、
止めて益ある事を爲よ、事を爲よ、
八ツトヤ　矢よりも早き月と日を、月と日を、
むだに過すな、時の間も、時の間も、
九ツトヤ　これではならじと省みよ、省みよ、
巳れの日ごとの擧動を、ふるまひを、
十ヲトヤ　年々こゝろを研ぎわけて、研ぎわけて、
天地に耻ぢざる身共なれ、身共なれ、

明治三十一年
一月のはじめ　龜陵道人草す



●大御惠　兩陛下の御仁德にわたらせ給ふは、今更の事にあらず、ことゞゝしう記し奉らんも畏こかれど、さきには、昨三十年十二月二十日、北海道根室市街火災に罹りしを憫然にをぼしめされて、金七百圓を下し賜ひ。又、汽船第一攝州丸乘員五十餘名が、昨三十年九月中兵庫港出帆後行方不明。及、汽船奈良丸が、同年十二月中彭湖列島鳥島附近に於て難破し、乘員五十餘名死亡の趣憫然に思召され、遭難者遺族へ御救恤として、前後何れも金二百圓を下賜ひ、同船に乘組み遭難せし海軍中佐安田八束以下海軍兵員へは、各々祭粢料を下賜ひたり。又、皇

后陛下には、こたび、貴族院議員男爵寺島秋介氏の北堂の病篤きよしを聞こし召され、官女を遣はされ、御菓子一折、並に御肴料を賜はりたりと。大御惠のかずかず、承はることにいやかしこくてなん。

●孝明天皇祭　さる三十日は、畏こくも孝明天皇の崩れまし丶凶日なり。天皇陛下には、かねて定めさせ給へる御式によりて、御祭を行はせ給へり。又、京都後月輪の陵にても、掌典宮地嚴夫氏を勅使として全じ御祭をせさせ給へり。

●英照皇太后御靈代奉遷　豫て仰せ出されし御式により、本月二日　英照皇太后の御靈代を、青山御所御靈殿より　皇靈殿へ遷し奉られたり。

●觀雪の御詠　さる廿四日は、東京にては、新年に入りてはじめての大雪にて、四境皎々一面布を敷きたるが如くなりし、此日　聖上　皇后兩陛下には、南殿に出御ありて、御苑のみ雪を見そなはせられつ丶、本年の歌題なる「新年雪」にて、多くの御製遊ばされしと承る。

●豐公眞筆の和歌　靜岡市の清見寺に藏し居る豐太閤眞筆の和歌なりといふは左の如しと。

東夷征伐の爲天正十八年三月の始めつかた都を立ちゆきゆきて駿河國清見寺にいたりぬ彼地の風景絶にして殊に三保の松原田子の浦の月富士の根の雪眼前眺望まことにその興あさからず庭前の青葉がくれの花の色もめづらかになにくれと禍をとゞむること五六日それより東のゑびすをたいらげみちのくまで行きめぐり心のごとく國民をおさめかへ歸るさになりて八月二十日あまり又彼寺に着侍りけれど當寺の光輝長老禪利の正宗をつぎ凡俗をのがれたる志を感じて書院の交にやがてのたらせ

侍りぬ彌生に對し花の梢などやう〳〵紅葉して彼
能因のかすみと〻もに出しかとの歌などをもひわ
はせ一首を殘し侍り

湖白

清見寺ゆく手にみつる花の色の
いくほどもなくもみぢしにけり

三保の浦の眺望を

名にしれふ田子の浦波立かへり
またもきてみむふじのしらゆき

かの長老のためにかきつけつかはすものなり

●山室山に櫻を獻ぜんとす　山室山は伊勢に在り。彼れ鈴の屋翁本居宣長先生の閑居の地にして奥津城のある所なるか、先生は、殊に櫻をめでられ、かの名高き、敷島の歌をも詠まれしことは、人皆の知れる處なり。しかるに、此所には、櫻の少きを遺憾として、此度、神宮皇學館の教員生徒等相謀りて、先生の奥津城に櫻樹を植ゑん爲め、獻櫻會といふを組織し、去る五日其第一會を擧行したる由。聞く處によれば、同館にては、前教頭下田義天類氏在職の時より、已に此計畫ありしも、未だ着手せざりし次第にて、今度は、更に其旨意を擴張し、廣く會員を天下に募り、寄附金を仰ぎて、一の永遠事業となし、年々數百乃至數千株を植付け、先生の墓邊悉く櫻花を以つて充たさしめ、更に松坂町より同山に至る凡二里程の道路にも、殘らず櫻樹を植ゑんとする計畫なりといふ。さて、其第一回獻櫻會は、最も盛に行はれたる由にて、此の時既に數百株の櫻を殖ゑ付けたりといふ。

●女子高等師範學校規則の改正　女子高等師範學校にては、今般文部省令に基きて規則を改正し、本

年四月入學すべき生徒より之を施行することゝなりたりといふ。今、其改正の要點を聞くに、學科を分ちて文科理の二とし、文科の科目は、倫理、敎育學、國語、漢文、外國語、歷史、地理、家事、躰操とし。外に、隨意科として、習字、圖畫、音樂あり。理科の科目は、倫理、敎育學、國語、外國語、地理、數學、物理、化學、家事、圖畫、躰操とし、隨意科には、習字、音樂ありて、兩科何れも修學年限は是迄通り四ヶ年なれども、各科目とも、從來よりは一層精深なる程度にて敎授することゝなれり。

さて、又、同校卒業生と同等の學力を有し、師範學校女子部及、高等女學校の敎員たらんとするの目的を以て、敎育學及び敎授法等を專修せんとするものゝ爲には、新に研究科を設けられ、目下已に家事專修科及び保姆練習科の設置、並に撰科の規定などもありて、追々諸般の擴張改良を圖ると云ふ。

●同じく生徒募集、の規則は左の如し。

本年四月當校に於て（文科、理科）撰科生各徒五人入學を許す、志願者は同三月十五日までに當校に願出づべし。

但入學試驗は同月三十一日より施行す、其科目は左の如し、尙詳細は當校に就き承合すべし。

一入學試驗科目　體格　國語解釋 作文　文法　漢文解釋　歷史本邦 外國　地理本邦 外國　數學算術、幾何初步　理科博物 物理　化學　家事衣食住 裁縫

一志願者資格　尋常師範學校女子部、修業年限六箇年の官公立高等女學校卒業生及之と同等の學力を有する者にして身体健全品行方正年齡十七年以上二十五年以下の者

但學力の試驗を須ひざる者の年齡は此の限にあらず

一左記第一より第四に至る四項の一に該當する者には學力試驗を須ひず第五項に該當する者には撰修せんとする學科の外學力試驗を須ひず

一元東京女子師範學校及元東京師範學校女子部卒業生

二本校本科、專修科、撰科、元小學師範學科及高等師範學校元女子部卒業生

三本校本科二個年以上の課科を履修せるものにして其履修せる學科の一部を修めんとする者

四本校附屬高等女學校補修科修等卒業生にして其補修したる學科を修めんとする者

五年常師範學校女子部、修業年限六個年若くは同程度以上官公高等女學校卒業生にして當該學校長より品行方正學力優等の保証ある者

明治三十一年一月　　女子高等師範學校

●禁止と奬勵と　小學生徒に禁止及び奬勵すべき條項を岡山縣敎育會にて調査したるものなりといふは、

一小學校生徒に禁止すべき條項

一羽織の紐の長大に過ぐるもの　一服裝の華美に流るゝもの　一賭物に類する遊戯　一火藥類の弄び　一喫烟　一所有品の交換　一漫りに所有品を貸借すること　一買食　一金錢の携帶　一防寒用の襟卷　一演劇に類する興行の見物

一小學生徒に奬勵すべき條項

一冷水の盥嗽　一繩飛ベース遊戯　一早起　一約束時間の嚴守　一軍隊遊戯　一鞦韆　一山野の跋渉　一凧揚　一綱引　一貯金　一緩食の習慣

●節婦　山梨縣西山梨郡清田村に藤卷はつといふあり。天性至孝にして、久しく、姑　夫の疾病を看護し嘗て一日だも懈たることなかりしが、死したる後も、尙生けるに事ふるが如くし。且、農事に精勵し、幼兒を就學せしむる等、奇特の廉を以て、其筋よりも賞金を賜ひたりといふ。

●龜鑑　世の漸く下るに從ひては、いよ〳〵人情薄らぎて、淺ましくればゆる中に、かゝることを聞くは心づよし、廣島縣高田郡丹比村福石初吉なるもの火災に遭ふて家事に窮困し、長男里市の就學も繼續覺束なきを、同校生徒等相謀り、醵金して通學せしむといふ。さても〳〵、末頼母しき小供等よ。

●こも亦　前のに劣らざるめでたき事なり。佐賀縣東松浦郡小川島小學校燒失せし際、敎科書も多く

燒け失せたりしを氣の毒に思ひ、呼子村小學の高等科生は、敎師の勸告に依り、歸校後日々同書を謄寫して、罹災生徒に寄贈せんとすと。此の師ありてこそ此の兒あれ。

●憐なる孝子　東京市淺草區元鳥越町三番地根岸助三郎といふは、倉吉とて二十歳になれると、善吉とて十五歳になれる二人の子をもてるが、家いと貧しく、僅かの日傭を取りて細き烟りをたてけるものなるが、助三郎は、今年は既に六十一の高齡に達せるものから、この春より老病にかゝりて起居も自由をうしなへり、かてゝ加へて、長男倉吉も、長病にかゝりてねたゝずなりしかば、收入の道とてはすこしも無きに、次第に衣類其他をもあらんかぎりを賣り盡して、今は父子が餓にたふるゝばかりになりしを、善吉も小兒ながらかなしさにね堪へず、近所の走り使に傭はれて、日々幾何かの錢を得ては、醫藥をもとめ、又は粥など調へてすゝめ、まめ／＼しく父兄の病を看護するさまいと殊勝なり。されば、近隣のものども憐みて、金品を與へ、善吉の孝行も遠近に聞えしかば、淺草警察署も、天晴の孝子と、篤と善吉の性行を取調べて、其筋警視廳へ上申したりと云ふ。

●理化學の話　こは、熊本に在る（浦樂天）といふ人のものせしなり。

光線及び蝸牛の速力

光の速力は、一秒時間凡そ七萬八千九十里にして、蝸牛の速力は凡そ〇、〇〇五尺なり。其遲速の相違實に驚くべきにあらずや。而して、斯の如く光線は、莫大の速力を以て進行すれども、太陽より我地球に達するには八分三十秒の時間を要し、假りに一分時間に一英里を走る滊車ありて、明治一年に太陽を出發し、一直線に我地球に向つて進行することせば、明治百八十年目に地球に來着すべし。其他、光線が近き星より地球に達するには、三年より少なからず、遠き星よりは一百年以上の時日を要すべしと云ふ。

空氣と食物

大人の一晝夜に要する空氣の量は、凡そ一萬二千リートルにして、

一日中の食物の量は固體と液體とを合して凡そ三リートルなり。即ち、空氣の量は、食物の量に比して四千倍多し、斯く須要なる空氣を重んずるの觀念なき所以は、空氣は無盡にして取るに難からず、且つ眼に見えざればなり。(一リートルは我が五合五勺餘に當る)

深海中の魚類

光線は、水面下三十メートル以上の深さに至れば、　して入ること能はず、全く暗黑となるべし、故に、深底に棲息する魚類は、眼の感覺頗る鈍く、或は少しも物を視る事能はざるものなり。尚ほ甚だしきものは、眼を具へざるさへありと。(一メートルは我が三尺三寸に當る)

動植物成分元素

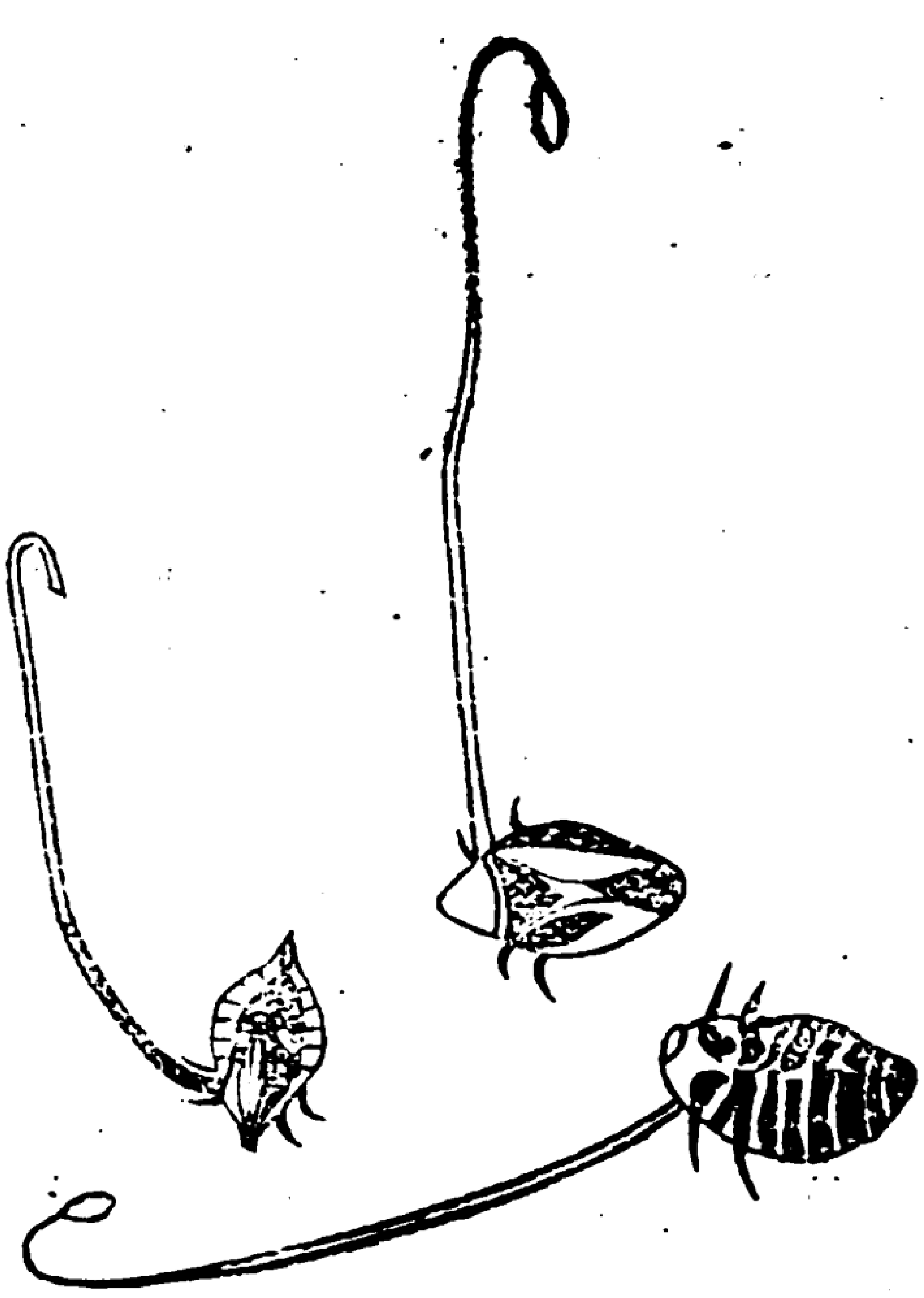
現時まで發見せられたる七十内外の元素中、動植物を組成する元素は、僅々二十内外にして、人體の如きは凡そ十六元素より成る。而して、原子量は、動植物と或る關係を有するが如し、即ち概言すれば、原子量少なるは頗る緊要にして、大なるは漸次不要に推移するが如し。

氣素	一、〇	燐素	三一、〇
利刃謨	七、〇	硫黃	三二、〇
炭素	一二、〇	盬素	三五、五
窒素	一四、〇	加僧謨	三九、〇
酸素	一六、〇	加爾叟謨	四〇、〇
弗素	一九、〇	鐵	五六、〇
那篤僧謨	二三、〇	銅	六三、〇
麻偶涅叟謨	二四、〇	亞鉛	六五、五
亞爾密紐謨	二七、〇	臭素	八〇、〇
珪素	二八、〇	沃度	一二七、〇

之に依て之を觀れば、動植物成分元素は、其原子量凡そ一より六十に達し、是より以上のものは僅々にして、只其少量を存するのみなり。

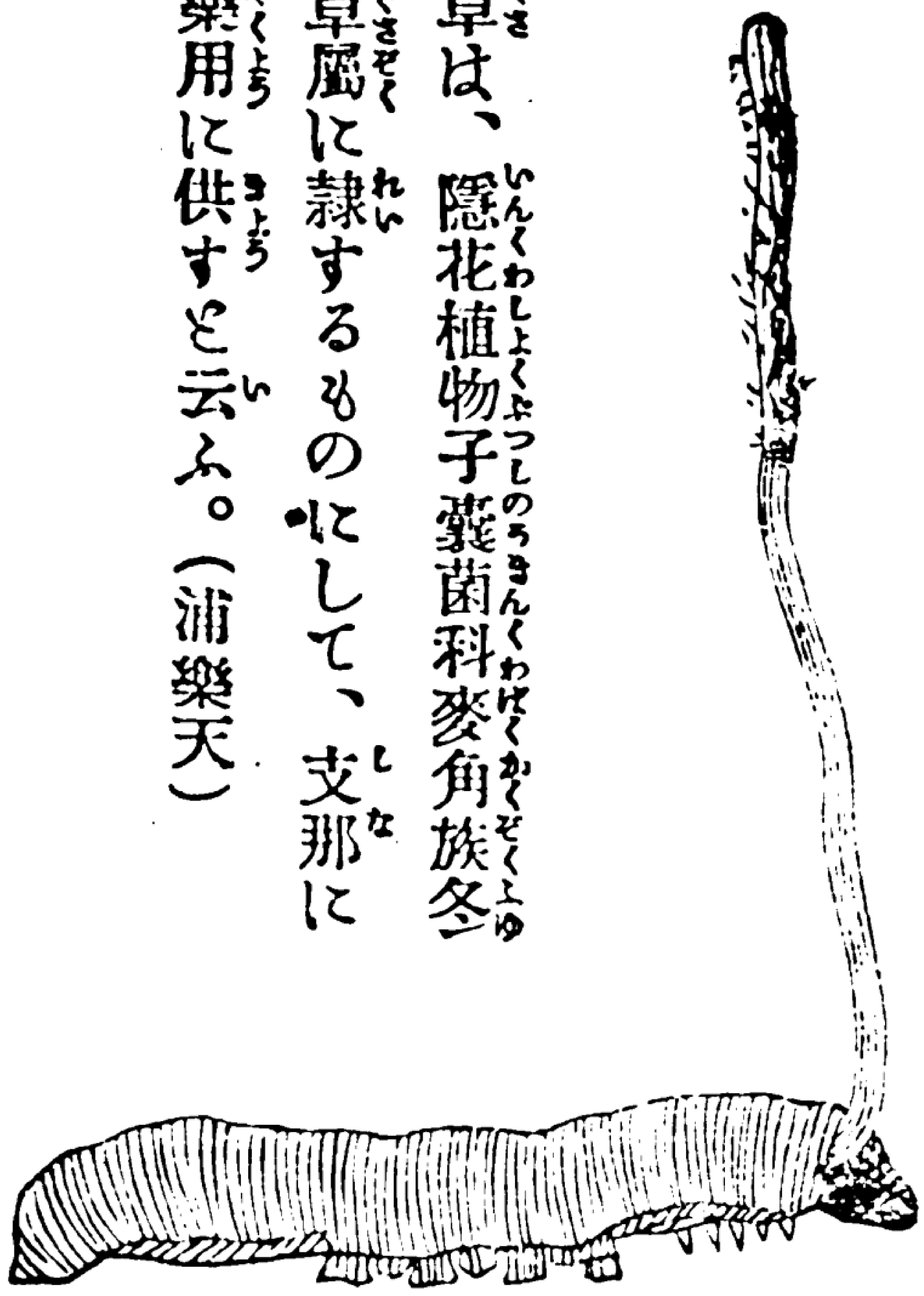
●夏蟲冬草　冬蟲夏草　といふものあり。こは植物變じて動物となり、或は動物の化して植物となるものにあらず。單に植物の動物に寄生したるものなり。その圖を示せる。

夏虫冬草



筑後地誌畧に云、上妻郡矢野村宮尾名の山中に生ずる所たり。初夏の頃より小蟲となりて蠕動飛揚し、晩秋より土中に蟄し、化して草根となり、紫色の芽

を生ず、故に土人夏蟲冬草と稱す。西域見聞錄に、夏草冬蟲あり、雪山中に生ず、夏は葉を生じ、冬は化して蟲となると云へり。略これに類似して、其時氣の感を同じうせざるものならんか。



冬虫夏草

此の草は、隱花植物子囊菌科麥角族冬蟲夏草屬に隸するものにして、支那にては藥用に供すと云ふ。（浦樂天）

●容貌と才智と　は多くともなはれすと英人某はいふ。我か國にてらせど、必といふまじきも、さるかたぶさはあるべし。まついへらく、美女美男は愚かなるものに多く、智者才人は醜きものに多し。スコットランドの女王メリーは才色兼備と稱せらるれども、なほ其の才は女王エリサベスに及ばず。エリサベスは容貌メリーに若かず。史家リッポン、詩人ホープ、又ゴールドスミス。オリバー。クロンウエル等、皆名家にして、何れも醜男子なり。これのみならず、歷史をひもときて、見なば、英雄才智は美貌のものに少きを知るをえん。これ美貌のものは、勞せずして、人に稱せられ、醜きものは、勞せされば、之と倂行し得ざるにもよるべし。生理學者は、額鼻等の大なるをもて、智者才人の徵證とすれども、かゝる容貌は美男美女とはすへからされば、これにても容貌才智一致せさるを知るへしといへり。西洋にてはまつさもあるべし。我か國むかしより、鼻低く、額狹きを好ますこゝを以て思へば、すこし鼻うごめ

くをおぼゆるなり。

●痘痕の名稱　難波のあしは伊勢の濱荻、處かはれば、とは俗にいひならへる諺なり。げにさることにて、處かはれば品のかはるがあり。又品はかはらずして、名のかはれるもあり。今この痘痕の名の國處により異なれるを、廣田星橋、文屋貞蘆といへる人ども、廣くさぐりもとめて、かくあつめたるを見れば、まことにおもしろし。かくとりあつめて記しおかば、痘の顔に痕をのこすが如く、このことどもも、千載の後までこの紙上にあとをとゞむべし。痘痕も靨と見なさば、さばかり見にくかるまじく、こゝも語學の一端と見ばをかしかるべし。などがめ給ひぞ。呵々。

○「いも」全國一般に通ず ○「もあと」信州佐久 ○「いもくしや」尾張三河 ○「いもくし」近江、丹波、加賀越中、越後、飛彈 ○「いもぐしみつちや」丹後 ○「いもちや」越前 ○「ぐし」新潟
○「じやんか」上總、下總常陸、越後 ○「じやんこ」東京及武藏上野、下野 ○「じやつかい」仙臺 ○「じやか」米澤山形 ○「じやき」備前、安藝、周防、長門、出雲、伊豫、因幡 ○「じやげ」備後、幅山、出雲 ○「じやご」秋田、越後、佐渡 ○「じやひ」會津南部
○「みつちや」京都、大阪及近畿地方 ○「どみつちや」大阪近在 ○「みつちやくそ」德島 ○「みつちやくちや」攝津三田 ○「めつちや」東京土佐 ○「めつた」伊勢尾張
○「ぐちやつぺい」熊本 ○「せんさう」長崎島原 ○「しくわつら」鹿兒島 ○「ぐわんしん」佐賀 ○「はくそ」遠江伊勢 ○「もぢやくれ」仙臺 ○「ぼろ」弘前津輕 ○「へんど」畿內及伊賀、伊勢 ○「あむし」播磨淡路 ○「むし」但馬 ○「かしつぼ」二本松須賀川 ○「かぶつら」信州上田、松代、善光寺邊 ○「しぶつら」松本 ○「蚊死なず」「毛剃れず」「汗樂」此三語は洒落なり

(以上廣田氏調査)

○「いもかす」水戸 ○「かんど」飛彈高山 ○「じやも」豐前小倉 ○「ほろくそ」弘前 ○「がんど」岡崎 ○「じやんこつ」駿河
○「はつくそ」甲斐 ○「だめ」陸中 ○「しぶ」下野 ○「へ

「ーばさま」土佐長岡〇「ぐちやつら」越後〇「しぶかす」常陸〇「べゐこ」庄内〇「くつちや」加賀金澤〇「もしや」秩父〇「をぐし」越後〇やかもしゃ」駿河富士〇「もしやかす」駿河吉原〇「かむくた」四日市〇「やじ」但馬〇「もんしよう」伊豆〇「かぶつ」伊豆加茂〇「さび」陸奥〇「もんぞう」佐渡〇「かもつら」淡路中島

醫家に於ける痘瘡の異稱は稻目瘡、疱瘡、痘疹、痘風、豌豆瘡、豆瘡、痲子、天瘡、天花、赤班瘡、膚寄瘡、登瘡、聖瘡等なり

（以上文屋氏調査）

滑稽創業家列傳

●權助阿三　夙に男女同權の說を唱へ各々獨立して世上饗炊一切の事を掌どる、其得る所の給金も亦甚だ增損有らざるなり、而して權的不幸近頃其業漸く衰へ三女獨り其收益を專にするに至る、阿三誓て曰く權公生得健啖納れ三升米を要す、其今日に用ゐられざる夫れ之が爲めならんと

●番太郎　往時江戸市街の木戸番たり、職に一定の給料有り而して傍ら雜品粗菓の小賣を營むことを得、頗る有益の業とす、明治初年市政改革遂に其職を[illegible]はる、番太矢衆往く所を知らず

●竹本義太夫　一流の淨瑠璃師なり、近世其業益々盛大を致す他派の一起一仆常無きが如きにあらざるなり

●角兵衛　越後の人獅子舞伎を售るを以て世の兒童の愛する所と爲り、頗る利益を占む但今は其の業大に衰へたり

●才藏　每年改曆の際に當り三河萬歲なる者に隨ひ戸戸祝舞を售るを業とす蓋し古例なり

●圓太郎　乘合馬車の御者兼馬丁たり、近頃倍々其業に熟達し大に世の好評を博すと云ふ

●枯井三太夫　華族の家宰なり、性朴直唯々君意を奉ずるに妙を得、故を以て在職殊に久し、但近頃老朽事に堪へず僅かに世子の傅たるに過ぎずと云ふ

●長松　商家の小猻なり、使事有り外に出づる途中石を拋ち或ひは犬を鬪はす等惡戲時を徒費するを常とす伴當の教嚴ならざるを以てなりと云ふ

●吉野久助　葛粉製造の本舖なり、世人其製出物を指て直ちに久助と呼ぶ於是主人自ら久助製造人の久助と稱すと云ふ

●阿品　實は信濃の大食男子なり、曾て都下に來り傭春に從事す、其伴りて女子の名を冒すは一釜一升の譏を避けんと欲してなり

●喜助　壯少妓樓の僕と爲り其職に在る久し、今五十有餘術匠若い者と稱して衆妓の頤使に服す鐵面耻を知らざる蓋し其性なり

●才六　履歷傳はらず或は云ふ大阪の人なり

●土佐衞門　其名其人と爲り共に傳らず、貧困口を糊するを得ざ

るの故を以て一夜水に投じて死す 死後人其名無きを不便とし假に今の名を命すと云ふ、而して其女某亦不遇を嘆じ幾もなく溺れ死す、人亦呼んで阿土左とす蓋し父の名を取りてなり

●三助 浴場の水火夫を兼ぬるを公職とし傍ら客人の背部を洗ふを其私職とす、已に名譽あり且利益多きの業と謂ふて可なり

●雲助 年壯にして無賴父母の敎を守らず、逐はれて驛路の脚力と爲り亦劇勞役に從事すること久し而して藩制卒かに廢せられ鐵道亦漸やく開け復た雲的を要するの用無きに至り遂に其終る所を知らず、或は云ふ當時餓死し道性松樹の肥料と爲り了せりと

●折助 は武門隆盛の頃の下僕たり、根生卑劣常に人の眼を偷んで其勞役を怠る、而して主威を假り猥りに無錢酒食を需索するを是れ事とす、當時市人の疫鬼と同一視する亦故有るなり、幸に死し今之を嗣ぐ者無し

●八兵衞 實は女性なり舟橋驛舍に在つて春を賣る

●右部金吉 固陋愚直事苟も金錢に係る最も小心容易に收支受授を行はず、曾て外出す途石橋あり、鐵鞭試に之を敲くこと再三、果して其堅固なるを視而して初て通過せりと云ふ

●助兵衞、甚助 友とし善し共に名あり

●甚六、源右衞門、作左衞門 素と同一族、甚的故戶主の長男を以て家を嗣ぎ稱して總領の甚六と謂ふ、性智鈍家事に堪へず、源右、作左其叔父たり故を以て共に後見の任に當る而して二人亦愚直一朝違例の事有る叔姪騈坐呆然遂に村長の意を受けて僅かに之を處理すと云ふ但源右は和唐津屋と呼び別戶與當を業とす、作左は夢中と號し俳諧に似たる事を爲し日夜逆樂する耳

●澤庵 金山寺覺也上人の徒弟なり頗る禪學に達し夙に道德を以て聞ゆ、曾て蘿菔鹽醃の新法を創め大に世俗の嗜好珍重する所と爲る、而して人遂に澤庵を以て鹽醃蘿菔固有の名と爲し其禪師號たるを知らざるに至る、其功德衆生を濟度するに讓らざるなり

●權兵衞 年少うして頗ぶる播種の術に熟す、東鄰老翁有り太郎兵衞と呼ぶ喩して曰く、汝種を下だす慇く勞すと雖も鴉を逐はざれば其功無しと權兵衞顧みず果して鴉群來襲し亂喙狼藉復た前日の觀なし、時人是より勞して功無きを謂つて權兵衞太郎兵衞とすと云ふ

●河太郎 水鄕に生る故を以て年甫めて七八能く泳術に達す、而して面貌漆黑唯眼と齒と白色を存するのみ人因て呼んで河童小僧と謂ふ

●三太郎 年幼にして父母の命を守らず、往々遠く遊ぶ一日路を失し歸り來らず、父母悲泣急に人を雇て鉦鼓其所在を索む一晝夜にして初めて伴ひ還るを得たり人因て渾名し呼で迷子の三太郎と謂ふ、是より三太讀僞筆算を修め又父の業を助く一夜夢に神の指敎を得一種の五倍子末を創製し之を發賣して大に家聲を擧げたり、但近世婦人皓齒を貴ふの風と爲り其業舊の如く振はずと云ふ

●八五郎、熊次郎 共に匠人の徒弟なり二人性急常に氣を使ふ呼んで米亂迷々々と呼ぶ、人其舌を踊らし拳を掉るの虛勢を恐れ陽に尊んで八公と熊公と謂ふ

●五右衛門　創意一種の浴桶を作る其法節約を旨とし敗履故幣と雖も採て薪材に充つるを得、世人之れを利とす、但構造地積を要するの故を以て人家稠密の所に用ふ可らず、傳へ云ふ其祖五右衛門石川氏罪有り鑊刑に處せらるゝと浴桶は蓋し其遺法なり

●大八　府下の運貨車戸なり、一車四人前後呼應して輓くを家法とす、近世一派我利なる者起り一車一人頗る行はる大八爲めに其業を奪はる

●阿傳　實は老爺なり夜間田樂を行賈す案ずるに傳田音通ず其名蓋し賈聲より得たる者なり

●豆藏　素と良家の子なり放蕩産を治めず遂に落魄戯技を路頭に鬻ぎて僅に口を糊すと云ふ

●圓助　小才子なり大事を托するの技量無しと雖ども日常細事を辨ずるの神速なるを以て頗る世人の重寳視する所と爲る但圓助性外出を悦び其一度去る之を呼び還すに往々人をして意外の勞を取らしむることありと云ふ（又江老漁遺稿、男爺然坊校）

●八十九歳と八十歳との新夫婦　紐育ヘラルドといふ新聞に載せたる處によるに、合衆國コンネクチカット州のブリッヂポートに於て、昨年十月二十日、八十九歳の老翁と八十歳の老媼と結婚したる由なるが、此新夫婦は、壯年の頃曾て相思ふの間なりしに、故ありて夫婦たる能はざりしが、此程三四十年振りにて邂逅し、遂に結婚したるものなる由。尤も兩人の前連合は、皆疾にて死亡し、兩人とも鰥寡の身なりしと云ふ。

●各國人の食法　英國のある新聞、各國人の料理の食ひ方を記して曰く。露國人は刀子、肉叉を用ふるよりは、天與の五本棒を使ふ方便利なりとする塲合には、何時も之を用ふるに躊躇せず、其の不作法驚き入るの外なし。佛國人は都雅を以て稱せらるゝに拘はらず、彼等は我々が刀子を用ふべき都ての塲合に於て、麵包の片を代用するを例とす。獨逸人は刀子を口中に持ちこむ癖あり、中々危險千萬なり。瑞典人は豫じめ食品を細かに切刻みたる後、刀子を棄てゝ專ら肉叉のみを用ふ、伊國人は匙を用ふることを宛がら肉叉に異ならず、野菜類は勿論、時として

は魚肉を食するにすら匙を用ふるの奇習を有せり。日本人は二本の小さき棒を以て、我が刀子、肉叉に代用す、熟練を經るにあらざれば此棒を用ふること中々困難なり。希臘人は刀子を以て肉を四五個に分ちたる後、頬がへしも附かぬまで續けさまに之を口に抛りこむ癖あり、彼等は半封度のビーフステーキを食するに恐らく半分間をも要せざるべし、同國人中に消化機病に罹るもの多きは固より異しむに足らず、と。斯くて記者は最後に自國人の事を記して曰く、公平なる外國人の評する所に據れば、我英國人は、世界中最も進歩せる食法を有せるものなりと謂ふべし。最も優美なる料理の食ひ方を知らんと欲せば、修養ある上流英國人の食法を觀るに如かず。我英國人が食法に於て諸外國に勝ることは、猶他の更に重要なる事件に於けるが如し。と、鼻うごめかして記きたりや。

◎女鑑月並兼題歌文投稿書式

歌書式

題　住所 姓名

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若くは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其他は悉く假名若しくは一音の漢字にて認むべし。

文書式

題　住所 姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は詳記に記し、句讀點を施すべし。

總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて、個々に離して認むべし。

書式に違ひたるはすべて沒書とす。



二月五日兼題　池氷

天　備前國和氣郡伊里村閑谷　西艶子

風ふけと波さへたゝすいつのまに
にはのいけみつ氷りそめけん

地　山形縣山形市旅籠町三九六高橋方　武田粂子

はる風はふきそめぬれと池の面に
またとけやらぬあつこほり哉

人　山形縣山形市新　岡田陽子

こその冬むすひし池のあつこほり
春はくれともとけんともせす

秀逸（十五首）

枯はてしみきはの葦をたよりにて　酒井小谷子
池のうすら氷むすひそめけり

水鳥のやすらふかたもなきまてに
庭のいけみつこほりゐにけり　仁保しま子

ふくかせにかたよせられし浮草を
むすひそめたる池のうすらひ　土岐いく子

れはそらのつきの光にみかかれて
さえまさりけり池のこほりは　山手てい子

春たてとなほ風さむみいけみつの
こほりは更に解けむともせす　下元もと子

日かけさすかたへはとけて池水の
こほりのひまに見ゆるさゝ波　近藤よし子

さをさしゝ池もこほれる冬の日は
このはの船もうかはさりけり　上原能夫子

冬かれのみきはの葦もをれふして
こほりにとづるひろさはの池　徳永萬壽子

春あさみこちふく風のさむけれは
いけのこほりはまた結ひけり　山根久子

影うつすやなきの糸によるなみを
むすひとめたる池のうすらひ　野口さん子

里の子か投しつふてのあと見えて　廣田とめ子

池のこほりもいまやとくらん

さゆる夜はつきのひかりも池水に
　やとれるまゝに氷りはてけり　穗積　稔子

薄氷もけさとけそめてかたへのみ
　ふゆをのこせる春のいけみつ　酒井ぎん子

さらぬたにさゆる霜夜の月かけを
　すこく見せてもこほるいけ水　田代　艶子

今朝みれは池の面しろく氷りけり
　浮ふ木の葉もそのまゝにして　田代　綾子

（以下原稿到着順）

冬の夜のいけのこほりのさやけきは
　つきのひかりのみがくなりけり　輕部壽子

おもひのみます田の池のあつこほり
　とけむともなくむすほゝれつゝ　西川順子

いけみつにうかびてこほる楢の葉は
　さながらいなのおもかけのしつ　堀内敏子

なし島のさけてぬる夜もなかるらん
　こほりつめたるこやのいけみつ　永井さい子

さゝなみにうつる柳のかげもなく
　けさはこほりのとぢにけるかな　田部里子

みつさりの玉藻のそこやいかならん
　こほりにとつるにはのいけみつ　春永喜志子

山かけのきよきながれのいけみつも
　もみぢまぢりにこほりぬにけり　池田なほ子

わがすがたいざ立よりてうつしみん
　いけのこほりのきよきかゞみに　佐々小夢子

みづたまる池のこころのそこみねて
　こほりはてたるあさほらけかな　佐々有鄰子

夜さふみこほりやしけむ不忍の
　いけのおもわにみつさりのなく　綿野りき子

木の葉さへともにむすびしいけ水の
　こほりもけさはさけそめにけり　名取よし子

はる來れさなほうちさけぬ池みつの
　こほれるかたやさねかへるらむ　名取千代子

はる立てさなほふくかせの寒けれは
　いけのこほりそふゆのまゝなる　坂田きみ子

きさらきのそらさねかへる此あさけ
　ふたゝひむすふにはのいけみつ　名取正代子

夜あらしのさそひし塵もそのまゝに
　こほりむすへりにはのいけみつ　松尾登子

はるのきて池のこゝろのゆるへるな
　むすひさめたるひもかゝみかな　長松かれ子

はるかせに池のうすらひうちさけて
　よするさゝなみしつけかりけり　臨原菫子

ひゝみかさおもふはかりに池の面に
　むすひつめたるけさのうすらひ　土岐米子

きのふけふふく風かろくなりぬれば
　いけのこほりもゆるみそめけり　下田歌子

いはてやま峯よりおろすよあらしに
　にはのいけみつこほりゐにけり　佐々木店子

朝かせにうこかぬあしのかけみれば
　こほりにけらしいけのみなつら　渡邊まさ子

底ふかきいけを閉ちたるこほりさへ
　やかてはるたつかせにとくらん　沼澤みね子

わかやどの庭のいけみつけさみれに
　おちはなからにこほりゐにけり　小澤ゑん子

みつとりのうきねの床のあつこほり
　いつかはとけんいけのさゝなみ　木村きく子

うなゐこかうつやつふての沈まぬは
　いけのこほりのむすふなりけり　有馬たね子

はるかせのさえかへりつゝ池の面の
　とけしこほりはまたむすひけり　加藤壽枝子

さむけさに庭のいけみづけさ見れば
　かゞみのごとくこほりゐにけり　奈賀井滿梨子

水とりもけさはこゑせすなりにけり
　こやのいけみつこほりはつらし　金森とし子

春たちてのとけきひかす頃なれと
　またとけやらぬにはのいけ水　中山嘉壽子

池のおもにうかひしいをもいまははや
　むすふこほりのそこにすむらん　井汲春野子

春とのみいひしはかりなしのはすの
　いけのこほりはとけそめにけり　住山茂子

いけのへのときはの松をよすかにて
　みとりにかへるうすこほりかな　住山靜子

夜をさむみ風もふゆにやかへりけん
　あさな〱こほるいけのおもかな　石井英子

ふゆふかみ野への池みつとちはてゝ
　つらゝのとこにをしやわふらん　榊原八千代子

風さむみおち葉なからに今朝みれば
　こほりはてたるにはのいけみづ　酒井美佐子

いけみつの汀寒けくこほれるは
　すきにしふゆのかたみなるらん　成廣あさ子

水かゝみうつしゝいけも今朝見れば
　よはのあらしにこほりゐにけり　高橋かね子

みつとりのうきねの床やさむからむ
　今朝むすひたるいけのうすらひ　諏訪晴子

おりたちて遊ひし鴛鴦も來すなりぬ
　いけのこほりのとちそめしより　小松好子

池みつのこほりにきよきつきかけは
　ふゆのすかたのかゝみとそ見る　竹原完子

花のかをこめてふきくるはるかせに
　いけのこほりもとけやそむらん　西方貞子

はるかぜもまだふきあへぬ池の面は
　むすひしこほりさけむともせず　高島壽子

みつとりのうきれの床やいかならん
　こほりむすへるにはのいけみつ　東　あり子

夜もすがらふきしあらしの烈しさに
　にはのいけみつこほりそめけり　尼子千代子

こがらしの吹きすさびたる池の面は
　見る眼さむけくこほりはてけり　安齋なか子

あさゆふに向ふかゝみのいけの面は
　見るかけさむくこほりけるかな　安齋たつ子

とぢはてしみ池のおもはこよひより
　をしのうきれのとこやなからむ　佐久間八重子

池みつはこほりゐにけりこよひより
　おち葉のおとやすみまさるらむ　三幣みさを子

いけのおもをふきわたりたる朝風に
　なみもいつしかこほりはてたり　磯野こと子

吹くかぜにさゝ波たゝぬいけのおもは
　ひまなくとぢしこほりなりけり　久本はな子

我が庭のうめはさかりになりぬれど
　いけのこほりはとけんともせず　磯部しう子

よひのまに冬はきぬらむいけみつの
　おちはをとぢてけさそこほれる　青木たま子

ちりうきし木の葉のそこに沈めるや
　いけのこほれるしるしなるらむ　白石梅子

かげうつるみぎはの木々もわかぬ哉
　むすひつめたるいけのこほりに　浦井豊子

みつ鳥のはかぜの音もまれ〳〵て
　こほりはてたるいけのおもかな　小野あき子

よひまではつきをうつしゝ池の面に
　けさしもむすふはつこほりかな　赤羽わかね子

あさひかけさせる方のみとけそめぬ
　こほりつめたるいけのおもてに　小野しやう子

みつ鳥のかけみるみつもとぢはてゝ
　かゝみににたるいけのおもかな　中桐李子

ゐはみずとあやふけもなく小雀の
　いけのこほりをわたりけるかな　吾妻ちか子

をしかもの忍ふかいけもこのころは
　こほりてつらき寢ぐらなるらん　戸塚餞子

おほぞらの月もやどりてかゝみなす
　いけのこほりそさむけかりける　諸井くら子

つるぎ羽も氷にとぢてをしかもの
　いけの寢ぐらやわびしかるらん　舘脇ます子

いけのみつの結ひてかたきあつこほり
　とけ初めぬへきはるかぜもがな　池谷とみ子

春まだきさゆるあらしにいけみつの
　おち葉ながらにこほりけるかな　平松晉子

なぎさなる木々のかゝみの池みつも
　こほれるけさのあさましきかな　塙　いさむ子

風さふみいけのさゝなみふきたちて
明くれはこほるみつのおもかな　吉田三千代子

うなゐ子かつふてうちたる邊のみ
いけのこほりはとけそめにけり　久間春子

ひろさはのいけはにしより氷りけり
あたこおろしのなこりなるらん　畠山ゆき子

蘆のはにかくれて見えしこやの池の
みつもあらはにこほるふゆかな　畠山清子

ふく風になひきしいけのうきくさも
ねさしかためてこほるころかな　畠山千代子

水とりのあそふこころはのこしおきて
こほるやいけのこゝろなるらん　畠山百合子

さえかへるあらしに亦も閉ちられて
ふたゝひこほるはるのいけみつ　上田たつ子

をし鳥のうき音身にしむいけの面は
よはのあらしにこほりそめけむ　高橋照子

こやの池のみきはの蘆のすたれはを
むすひとめたるあつこほりかな　金原吉子

たつ波もなきうらやすのかけ見えて
かゝみのいけはこほりゐにけり　河村君子

みつそこの魚さへみえすいけのもは
ふるはましりにこほりはてけり　松尾節子

きのふから大根あらひしためいけの
みつすまぬまにこほりゐにけり　谷口ふさ子

むすふてにかゝらぬ程はしらさりき
あるかなきかのいけのうすらひ　高橋榮子

つらゝゐる池のかゝみはやまかせの
吹くまゝにこそ照りまさりぬれ　湊谷いく子

きのふけふ瀧つ瀬の音もきこゆなり
こゝにもとけよ池のうすらひ　増田丹眞子

こぞの秋ちりてなかれしもみちばを
あかでやむすぶいけのうすらひ　濱野さき子

きさらきの空もふたゝひえさかへり
むすひかへぬるいけのうすらひ　大谷友子

みつとりの羽音のなきにけさみれは
にはのいけみつこほりゐにけり　松本のふ子

散りうかふきゝのもみちもそのまゝに
にはのいけみつこほりゐにけり　森琴子

散りうかふいけのこのはのふくかせに
まかせぬ見れはこほりゐにけり　宇高松子

池みつはこほりにけらし打ちむれて
あそひしかものこゑたにもせす　由井澄子

をし鳥はこゝろとけてもねふらぬを
こほりはてたるにはのいけみつ　野中あさ子

こころせくむれゐしかもの影もなく
こほりてひろきいけのおもかな　由井淑子

さざ波もたえてしつかにいけみつの
そこよりあつくこほりぬるかな　澤田春子

池みつのこほりもいまはとけなくに
　さむさをまそふかぜぞかよへる　佐々値嘉子

あか月のいよゝつれなく思ほゑて
　いけみつこほるあさあらしかな　田邊照子

をし鳥のつかひのとこをよそにして
　へだつるものはこほりなりけり　藤島常子

うろくつも深きふちにやしつむらん
　いけのこほりのとぢそめしより　藤島ふじゑ子

をしどりのつかひ離るゝなげきをも
　しらでやいけのとぢはじむらん　藤島英子

かせまむみいまたこほりて解るはの
　いけのこゝろもとけぬはるかな　山田璋子

清らなるいけのこほりはたをやめの
　すかたをうつすかゝみなるかな　高江貞子

こゝのへのくもゐの池のうすこほり
　あまつをとめのかゝみなるらん　岩倉くに子

小夜ふけてかけひの音もかすかなり
　いけのしみつもこほりそむらん　高橋園子

いけみつのこほりはつればあさな〳〵
　むかふもまむきかゝみとぞ見る　某女子

そこにすむ魚のこゝろやいかならん
　にはのいけみつこほりはてけり。　植田てふ子

わかやどの園生のいけにかげとめし
　まつはこほりにとざゝれにけり　田中ひろ子

いけはけさ氷にけらしあしかけに
　むれゐるかものわひしけにみゆ　矢島みよ子

常ならはみきはにつどひよるいをも
　そこにやひそむいけのこほれは　竹村貞子

いけのもはこほり渡れりこよひより
　つきはいつこにやどをとるらん　楠花雄子

あそふせのなしと小鴨やかこつらむ
　いけをこほりにとざゝれしより　大河内長戸子

うろくすのおとりいつへき方もなく
　にはのいけみつこほりはてけり　宗岡しゆん子

さしのほる朝日のかけにてりあひて
　いけのこほりはとけんともせす　林久子

うくひすのはつね鳴きつる昨日今日
　いけのこほりもとけわたるらし　森岡ことゑ子

青やなきいとものどけきはるかせに
　いけのこほりもとけそめにけり　高田千代子

たちかへる年なみもあるをいけ水の
　いつまでとてかこほりゐるらん　日高かず子

鯉をよひたちより見れは今朝はしも
　にはのいけみつこほりゐにけり　寺田まさ子

常しらぬささの子までもわかいけの
　こほるあしたはなれて來にけり　太田すみ子

さゝ波のよするまに〳〵こほるとも
　とくとも知らぬいけのうすらひ　師岡すへを子

をしかもの啼くこゑ寒み小夜ふけて
はかせにこほるいけのさゝなみ　寺田いさ子

あしの葉のしもふきかへす夕かせの
わたるかたよりこほるいけみつ。　矢口さら子

しもかれし水際のあしの葉すゑより
こほり初めけりにはのいけみつ　鹽崎きみ子

いけの面にむすふ氷のあつければ
あそふかもめのかけなかりけり　柴田よれ子

ふきおろすを我やまあらしかせはやみ
見る／＼こほるにはのいけみつ　矢口ちかを子

若くさにこゝろひかれてさめくれは
ふもさのいけはいまだこほれり　平塚利子

こそちりし古きおちはゝいけのもに
しつみもはてすこほりぬにけり　石川澪子

夜をさむみつきさへさえて池の面に
うつろふみつもこほりしにけり　野澤をのね子

みねすきし旅のたまもはふゆかれて
おちはなからにこほるいけみつ　横山柳子

みつ鳥のあさるかよひ路たえぬらん
こほりこめたりにはのいけみつ　石原庫子

はる風はふきわたれともいけの面に
いつまでむすぶこほりなるらん　長島英子

いさはやもみぎはの梅はさきぬるを
いつまでむすぶいけのうすらひ　畠山香代子

かけうつす月にこほりはうすけれと
また解けやらぬにはのいけみつ　前田いれ子

冬の夜のふけゆくまゝにいけみつは
吹きわたる風にこほりはてけり　吉田はしゑ子

いけみつも風のさむさにこほるらし
あしまにさわくをしさりのこゑ　武山たつゑ子

夜あらしに庭のいけみつこほりけん
をしの羽たゝくおとさむけなり　岸涙子

さえわたる夜はのあらしはいけ水も
こほりて今朝はさゝなみもなし　多田芳子

枯れてふす汀のあしをよすがにて
こほりそめたるにはのいけみつ　若松操子

よあらしはなきさの松にさえ／＼て
こほれるいけはさゝなみもなし　清水須美子

ゑかひせしみわたの魚もみえぬまで
こほりさちたるいけのおもかな　濱田なほ子

うめのはな咲けるこすゑを雪と見て
ふたゝびむすぶいけのうすらひ　岡澤倫子

さざなみによるべさだめぬうき草も
けのこほりにみをはやどしつ　林文子

小夜更てさむさにたへす起き見れは
いけのこほりにつきぞやされる　白土咲子

夜をさむみ波もふゆにやかへるらん
あさなくこほるいけのおもかな　三井しん子

梅が枝のにほひはかりははるなれと
いけのこほりはとけむともせす　逐戸の露子

いけの面のこほりし日より淡ならて
さゝのうなゐが立たぬひはなし　船岡早苗子

池の面にはれるこほりのさま見ても
さかゆくみ代そあらはれにける　所佐以子

今朝みれば池にこほりのはりつめて
水とりさわぐこころだになし　右田藤子

みつ島のつはさなあらふおさもなし
こほりそめけんにはのいけみつ　飯塚みつほ

池の面にうきてたゝよふうすらひや
すきにしふゆのなこりなるらん　糸川はつ子

二荒山やまのおろしのふきしより
いけにこほりははりつめにけり　横田くめ子

いろくつの底にひれふるすがたさへ
みゆすくいけのうすこほりかな　岡田久子

いけ水はきよくもすみてこほれるを
おほつかなしやよはのつきかけ　花山春子

むすひたる池のこほりもこちふけは
とけてみきはにうちよするなり　清水益子

春日さすいけのこほりはとけそめて
うつるもうれし千代のまつかけ　阿保松子

朝日かけうつろふいけのこほりこそ
さきすましたるかゝみなりけれ　辻みゑ子

二月五日兼題　希望

天

但馬國城崎郡
豊岡寺町市山氏方　西川順子

人として、此世に生ひ出でしもの、誰か、希望なきものやはある。實に、希望は、人の命なり。かの、江邊に糸をたるゝ人の、終日獲物なきも、なほ歸るを忘るゝは、彼に希望のあればなり、親を喪ひ、子に別れ、夫に離れ、妻に後れ、己は、人に容れられずして、世の無情を歎ちながらも、死をおそるゝは、彼に尙希望の光りのあればなり。北風さゆる冬の夜も土さへさくる夏の日も、つゆたゆまずいそしみて、身の苦しさもおもほえぬは、胸に希望の滿つればなり。よしや、身は、玉の臺におきふしすとも、心に一の希望なからましかば、樂しきふしやなからまし、さばれ、はてしなき望の爲には、いかに心を苦しむるよ。かしこき大御代に、生れあひしかひには、女なりとて、御國の爲に盡さでやは。いかで、學びの庭におひしげるなでしこを、心のまゝに培ひて、美しき花咲かせてしがなと、おもふこそ、おのれが朝夕絶えせぬ願ひなれ。あはれ、この希望は、實にわが命なるかな。

地　無名

（規定の賞品をまゐらすべければ至急住所姓名を通知せらるべし）

此の世に生れいでゝは、願はしかるべき事こそ、多かめれ。とは、何某の法師が、いひけるにて、げに、人として、誰かは、願ひなかかん。あるは、顔かたちのすぐれたるを願ひ、あるは、財多くもたる、あるは、身のやんごとなきなど、其願ひは、さま〲ならんかし。されど、是等の願ひは、とみに得べき事にもあらず、たとへ、得たりとするも、年ふる間には、盛者必衰の理にもれず、あさましううつりかはる事もありなん。唯かの女德女藝のみは、鹽くむあまの少女も、薪おふ賤の女にも、習はゞ得、學ばゞさとられぬべく、年へては、いよ〱、其のわざは巧みに、心はます〱うるはしき光をはなち、尸は苔の下に朽ちぬとも、名は千載にのこりて、人の鑑と世にめでたゝへられん。されど、此德此藝だに備はらば、身は蓬の宿に住みて、つゞれを、まとふとも、綾錦着たる人に、たちむかひて、少しも耻づる事なからん。さはいへ、何事も、愚なる身には、とても及ぶべき事としもおぼえねど、心は、賢より賢にもうつさむ、うつらざらんや。又心からこそ、身はいやしけれど。いふこともあれど、唯一筋に、誠の道をたどり、かつは、言葉の玉をひらひあつめて、おのがたからとせんは、百千の黄金白金を得たらむにもまさりて、嬉しからましと、思ふになん。

人

三重縣伊勢度會郡宇治中之切　河村君子

希望とし云へど、なにとなう男のするわざの樣に、思はるれど。人と生れたらむには、老いもわかきも、希望のなからでやは。みどり子の泣きいさちるは、乳房を希ひてなるべく、媼の念佛唱ふるは、未來のたのしみを望みてなるべし。まして、女子には、年たちかへるあした、母上の縫ひ玉ひし衣きよそひて父上の旅の土產に賜りし、羽子板もち出で、追羽子の競ひなどなすを、ふる年より待ち居るは、なべて幼心の希望なりけり。漸く敎の園に入りて、學の花を手折るやうなりぬれど、文よみ覺え、字かき習ひつとめはげみて、父母の笑顏を伺ふは、こよなき希望と思ひしが、さて行く末の事ども思ひ、心にくさ〲の世の樣を聞く頃にしなれど、夫に仕へ、子を養ふ道を學び、一生の身の置き處を定むるこそ、いと必要の希望なれ。むかし、袈裟は、衣川の流に消

ねて、夫の命を希ひ、孟母は、三遷して子の行く末を望みきと云へり。さるを、今の女子たちは、教の庭に入るは、夫に仕へ、子を養ふ道を學ぶにあらずして、美術をはげみ、挿花を習ひ、夫にとつがずして、一生を送らむ爲の希望と思へる、あさましききはみとやいはまし。あはれ、教の庭のかず多く設けらるゝは女子たちをして、衣川の流のごとく、孟母の三遷のごとく、夫に仕へ、子を養ふ道を、さつけしめむとの、かしこきわたりの、御希望ならむを。

(以下原稿到着順)

福原益子

春はうるはしき花にあくがれ、秋はさやかなる月の宴を開き、夏は涼しき松の木陰に文などつゞり、冬の夜は燈の下に、むかしのひじりの道をきゝなどしつ、ゆたかなる、年を重ぬるよろこび、何かはこれに及ぶべき。これみな、いや高きいや深き、大君のみ惠みになんある。そもいかにして報い奉つらん、朝夕下し給ひし、かしこき敕語を奉じ、忠に。孝に。友に。信に。ひたふる、女子の本分を貫行して、大和撫子の花てふこと、はた、あきつ島根の女子なることを、拳々服膺して、いやかぎりなき 皇恩の萬分の一つに報い奉つらんことを、ひたふるに、希ひ望むになん。

佐々有鄰子

大内山の木下なれがひ、久かたの雲のかげはしはしたなき心の望はいさゝやさしきものから、筆にも言葉にもかきいだし言ひいづべきわざもつましきに、世にうとき片山かげの賤の女は、木葉かきつめかまどのもとに煙にむせて、世をほけほけしう朝夕を過ぎ行きて、かゝる希望の窻中にきざすも、草の葉末の人なみに、笑の種を蒔きちらしぬることのはづかしさよ、いはんすべせんすべしらにひさかたのくものかけはしおよびなけれど。

山手てい子

およそ人の　にありて、おの〳〵業を取り、其道々に、いそしむはそも何の爲　ぞ。これみな、人の心に、一の希望てふものをもちて、そをとげんと思ふにこそ、あるべけれ。かの農夫等の、みゆきふる冬の日も、こがねをとかす夏の日も、厭ひなく、朝まだきより田の面に出でゝ、ふきすさむ、冬野のあらしに、身をもまれ、夏の日かげに、てりつけられつゝ、一すぢにいそしむはみな、かゝる苦しみにも、かふべからぬ、秋のみのりてふ、うれしきのぞみの、そがこゝろに、みつるにこそよるべけれ。あるは物つくる工人等の、たゆまず、うまず、一つのわざに、つとむるも、そを成就せしめて一つの器物となさんと思ふ心に、追はるゝにこそ。又あき人の、忙はしく、うるさきをも、いとひなく、つとめて、愛想を、よそほひつゝ、物うらんと、つとむるも、そをもて、利益を得んてふ、希望あればならん。その他、世の中のすべての事は、大きなく、小さなく、高きとなく、卑きとなく、みな、この、希望に、追はれでは、心に勇みなくて、成就しがたきものにこそ。わきて、學びの道に、入り立たんには、まづ、正しくして、犯すべからぬ、たしかなる希望を抱き、やがて、その希望にむかひてこそ、すゝむべけれ。され

ど、この望みの、けだかきと、又いやしきとは、身を立つると、亡ぼすとの、わかるゝところなれば、かまへて、よこしまに、いやしき望みをば、抱かで、いづこまでも、潔く正しき、希望をこそ、もつべけれ。

名取正代子

人の此世にうまれて、希望なきもの、いかでかあらむ。されど、望むべくして行ふ能はざるの希望は、しばらくおかん、おのれも榮ゆく大御代に生れあひて、師の君のねもごろなるみをしへ、且はたらちねの厚き恩によりて、やう〳〵一わたりの學の業をしをへたりいかで、猶一きはすゝみてんと思ふ事、せちなりしかど、はや年たけ、且はさり難き事のためまゝならねこそ、いとも口をしけれ。されば、今より後は、かねて學びし、かしこき我大君の大御勅の言の葉を、かしこみ〳〵て、五つの道はいふも更なり、神代ながらの曇りなき鏡を鑑とはして、おのが心をとりつくろひつゝ、やがて世にたゝん折は、家の政をとゝのへ、庭の教に力をつくして、君の爲、國の爲、あはれはづかしからぬ子女をいだし、暇あらば、學を修め、業をならひて、おのがほど〳〵につけて、徳をつみ、財を施し、公の爲には身を拋ちて、女子の力の及ばんかぎり、つくさまほしくこそ。これ、おのれ一人の希望にはとゞまらで、我々遠つ祖のみこゝろにもかなひなん。されば、此ののぞみのかなひたらむあかつきは、いかにうれしき限りならましとおもふにつけても、いとど心のはげまされてなん。

久間春子

清原のおもとの、才學高かりしも、老いての後の、心やりに、駿馬の骨と、打すんじ、小野小町の、花のおもかげも、いつしかあせてさそふ水あらばと、なげきしも。かひなきを如何にせん。げに、大徳寺の翁の、らしうせよと、のたまひしぞ、よき教の栞なりける。かのなつかしき栞の、あらはならず、霞ににほふ、山櫻の、のどやかに、一生を送られし女徳を、我もと、常に心にとめて、女は女らしう、その務を、つとめん事をのみ、願ひ居れど、ともすれば、月花の、あたあたしきに移らひて、琴笛などの、はかなきしらべに、心ひかれ、二の町の、わざにのみ、ふけり、たちぬひの道はさらなり、庖厨の事さへ、しらずして、人のそしりを受けん事の、うたてさよ。おほよそ、希望は、高くのみ、おもひあがりて、よく身に得んこといとかたしや。我が國固有の、道義、徳行、貞節、柔順の女徳を守りて、技藝學識をのみほこりがほなる、あだし國人をも、このおたしく、らしきさまに、うつさけしかばと、思ふも、のばけき空の、蜃氣樓ならんかし。

高橋梅子

山に出での望みとはば、み國の爲め、君に報いん外なしと答ふべし。されど、おのれ如きの、得て望むべきわざならねば、己れはまづ、一家和樂の四もじもて、これに答へん。家亂れて治まらずば、金殿玉樓の巨室もなにかせん。飽食暖衣も願ふ處にあらず。唯、齢めでたき、ちゝ母のもとに、兄弟姉妹打集ひて、中睦ましう、家内に起る風もなく、うらゝかなる春のごとく暮さん事こそ願はしけれ。おのれが、一世の希望はこれなり、一家のとゝのふは、一國治るのもとゐとも、いへば、己れの希望の、余りにつたなしとて、あざけりわらひ玉ふなよ。

宗岡　しゅん子

人の世に生れ、上はかしこきあたりより、下はしづ、山がつにいたるまで、誰か希望なからむや。希望をはたさむ、為にこそ、勵みもしつとめもすなれ、しかはあれど、理正しからず、世に益なき、希望を、企てたらんには、其人の所作も、卑下に、なり行きて、遂には、鳥獸にも、劣りはつべし。古の望の、足るを、知れと、誡められしも、實に、うべなることにこそ。

廣田　さめ子

今は昔とことかはり、男女のへだてなく、おのが望のまゝ、何事かならざらん。いやしき家に、生れし人すら、學ひの道をはけみ、行ひを正しくし、みさをゝ守らば、遂には、位の山にも、登りぬうるべし。かゝるめでたき御代に、あひたる身こそ、こよなき幸ひなれ。われ、早く、さつきければ、思ひなかばにして、やみぬる事こそ、おほけれ。しかはあれど、今より一きは、志をふりおこし、年のあまり、日のあまりもて、文の林にわけいり、言葉の花の一色をたに世ににほはせんこそ、ほいなれ。

穗積　稔子

棒ほど禱りて、針程とは、いやしき社會の通諺とぞ聞く。夙そ神佛祈禱の事たるや、元來過慾の企望に外ならざらん。その其目的や、おのれ充分の德行なくして、未來のさちを希ふにあらざれば、朝な夕なの、稼を務めずして、富裕を望むの類多かるべし。眞心とし見れば覩るべけれど、實は一種僥倖的の我儘なり、されば、一部の人士は之れを目して、俗人の行爲として、冷かに着過する人なきにしもあらず。彼の「こゝろたに」の古歌の道も、恐らくは此あたりより出しならんか。左はいへ、祈禱を移して希望となし、僥倖に換ふるに、實力を以てし、毫も妄想の念を懷かず、たとへは、未來の幸福を、希はゞ、德義善行を積み、富裕を望まば、家業に出精すべし。また、みづから學者たらん事を祈らば、之れが素養に務め、非凡の子女を出さんことを禱らんには、宜敷まづ母としての、家庭敎育に心掛くる等、何事も依賴僥倖の意なく、赤誠上よりの希望を以てしたらんには、神佛もかならず、感納ましまし、社會の嘲りも、受けざるべし。希望と祈禱とは、相似て非なる事、斯くの如し、妄りに欲望を大にし、過分に、其の成就を、希はゞ、原因を形造せずして結果のみを得んとの卑意に外ならず、まことの希望にはあらざるなりこゝろすべき事にこそ。

林　久子

生としいける物、たれか希望なき物あらんや。おのがじゝ、業をはげむ、學ひの庭に螢雪をあつむる、いかなる艱苦にも撓まずをれさる、皆のぞみあればなり。もしのぞみなく、いたつらにすごさば、いかて國恩はむくいまつるべき。されば、いかに、つたなき賤が、身をも、しき島の日本女にはぢざる樣、こゝろがくることそのぞましけれ。

石原　庫子

希望とは、如何なる事をいふか、たのれ學を淺く、見聞きすること、はたせばくして、つばらかに、知るよしもなきこそ、いとくやしけれ。なれど、其の字の淺さ、大かたのいひならはしとによりて見れば、希望とは、かゝらまほし、かくしてましなどやうに心にこひねがひもとむる意ならんかし。さて、これには、人により

身のほどにより、はた職業によりて、もとよりさま〲あるべけれど、なべて、年わかく、氣力盛なる時は、見るもの聞くものにつけて、自ら制しえぬまでに、希望の心潮のごとく、いでくるものなれど、漸く年たけて、學問經驗によりて、智識のすゝむにしたがひ、希望も益々高く、かつ確かなるものとなるものなり。これもとも肝要なる事にて、若し、いつまでも、年わかき時のごとけんか、世のすべての事情は、決してさる多くの希望をみたすものにあらず、從て其の一望をだにえずして、大に落膽することとあらん。はた全く希望てふもののなからんか、此世における たのしみは、全くなくなりて、身をかこち、世を厭ふにいたらん。凡て、何事にまれ、たゞに希望するのみにては、決して得らるゝものにあらず。よく之をなしはてんには、必ず熱心と忍耐とを以て、事に從ひ、もろ〲の、さはりをおしわけ進むの、勇氣なかるべからず。かくして、つとめ〲ておこたらねば、いつか、其のむくいのなからずやは。なべて、人の樂しと思ふこと多かるが中に、おのれの切に望めることの、いくらかづゝ望に城に達するばかり樂しきはなし。さるを、なみ〲の者は、大かた、其の務むべきをつとめずして、徒に其の望のかなはぬを怨み、甚だしきは、世をうきものと、いひかこつさへあり。げになしむきことならずや。いでや、己れ等高く確かなる希望をもちて、けふの苦しみは、他日幸福の基なりと信じ、よく務むべきを務め、よく忍ぶべきをしのびて、一たび志しし大望を、えとげでやはあるべき。はたさでやはあるべき。

澤倫子

人の此世に生れ出でしより、世を終ふるまでに、願はしかるへきことこそ多かめれ。あるはやすらかに明しくらして、古き文など讀み、むかしの人を友どちとも思ひなして、樂みなんことを望み、あるはやんごとなき身となりて、起ち居もらうたく、あまたのはしためにかしづかれなんことを、希ふもあめれど、垂乳根の父母とも、すくやかに、年老い玉ふまで、御心地そこなはせ給はず、已れもふさはしき男君の許にとつきて、むつまじく明しくらし、子まごの榮えなん、數多の願はしかるへき事の中にも、誰かは重きを置かざらんや。

白井さな子

世には、赤貧より起り、奮ひて、天下に偉業をなすものあり。富貴に生れて、ろく〲として、なす事なきものあり。そも、これは父兄の罪ならんか、はた、境遇によれるにや。境遇まことに擇ぶべく、父兄の教またなほざりにすべきかは。されど、これ、多くは、其心に希望を抱き、こゝに向ひて進みたると、しかあらぬとによるもの多かるめり。前者は、黑船のさかまく颶風をものともせず、大わたを横ぎりて、終よ、幾千里の遥きにも達するが如く、後者は、いつこをはかと定めなく、風に動かされ、波にゆられて、空しくまよふ浮舟にひとし。故に、希望なく、たゞなり行きにのみまかせたらんには、いかでか、有爲の人となり得べき。されど力も及ばざる空想を抱きて、終に、横様にまよふものは、己が所謂希望にはあらざるなり。あはれ老いて後、いたづらに悔ゆるが如き事なく、春秋に富める青年の時、いかでと希望を抱き、いかなる事にいであふとも、動かさるゝことなく、まさしくこゝにむかひてすゝまんこそ、願はしけれ。

白井とま子

揚々たる駟馬にむちうち、意氣盛なる人、寒空にたゝずみて、車をおし上ぐるもの、はた、紅閨、翠帳、倚身の飾足らざるをかこつ女、あるは、戸毎に歌ひまはり、あはれみを乞ふ賤女に至るまで、いやしくも世にあるかぎり、誰かは望なきものあるへき。けに、人の、苦しみも、樂しみも、憂もよろこびも、なべて制し行くは、この希望によりてなり。彼の氷山鬼々、積雪身を埋めんばかりの北極に深く入り、饑もいとはず、死も顧みさる人は、これその探險の望みを逐げんためなり。はた、百萬の人血をしぼり、野原に骨をさらさする人も、皆その望むところあるによりてなり。あゝかくも、人はその希望には、己の身心を左右せらるゝものなり。あゝ、希望の力、いかにつよきよ。俗にいふ、賤しき職業なし、只、いやしき人あるのみと、然り、今や、人々皆その望みを高尚にし、よくその行を正すものあるかと云ふに、いとまれなるところ、殊に一部の人に至りては、卑しき、見るに忍びざるものさへあり。あはれ人皆この力ある望みを高尚になさらか、いかにみ國の幸ならん。

舟岡へ子

たれこめてのみ暮らす松の中に、せめてはと頼ひし甲斐ありて、一夜のうちに白銀の世界となりぬ、けさもさなほやむべきけしきも見ねず人となれる身にも、常ならればこの雪のいとうれしうて、何となれ心おちゐず、かうやうの時は、靜かなる物語こそとて、幼き男の子、主人の妹のたけたる、わかきなど、ひざ近うよせて、炭びつうち圍む、

雪はふりにふりて、前栽の梅が枝に、餌をあさる雀の声いと　なり

男の子、片言交りにさへづるか、らうたくおもしろきに、何呉とたはむれつゝ、「坊が一番欲しきもの聞かばや」と尋ぬれば、「鷹は大將畫ける大たここそ願はしけれ」と曰ふを、さるかたにあへしらひおきて、次手に「世に尤希はしきこと如何に、妹などは、珊瑚のれかけや得たき、押畫せる羽子板か」と、年若き方を見やれは、打ゑみて「妾はお芝居をこそ」と言葉少なに曰ふを、「かゝるものか」と、たけたるがあざ笑ふ、折しも、軒近き梅が枝の、怪しき音するに、おどろきて見れば、いつの間にか、男の子のすべりいで　、つもれるゆき散らすなりけり。あたらしと、ばしため呼びて制せさす。さて「妾をわらひ給ひし姉上は」と、妹のいざなふ。「お松もこちよ、汝が望みも一興あるべし」と曰へは、下婢もより來て、男の子とたはふれつゝ火桶かこむ。姫君は、けだかき殿御をもち給はんを願ひ給ふめり、さはしための申すにかほ少しうちあからめて、口惡きことと曰ふものよと。はら立ちて、「女子たるもの、この世に生れて、人の妻となるは勿論に侍り、ことにやむことなき家刀じとなりて、舞蹈などのみちもたどたどしかず、夫妻とも、あはれ一世の交際家と呼ばれむこと、こよなき願ひなりな。されば、みくにも漸々文明に進み、内地雜居も今は近うなりぬ。おしなべての婦人たらむもの、いつまでも、昔の手ふりのままに、ふる雪の、下にのみおしふせられてのみあるべき。今少し學びのみちに心を入れ、ことならば、外國にもあそびて、あたら幾千萬の女子同胞を、男子の壓制のもとにすくひて、など、いとうべ〱しうかしこく曰ふ、

在りし軒端の梅は、ねならぬかをりを送りきて、すびつのほとり、何となう春めけるに、下婢ははなうごめかして、妾などはその同

けむとやらんは心ね侍らず、たゞ人の家に行きて、くふもの、きものたらはぬ身となりなばと、朝夕神佛をねんじ侍ると、大聖に笑ふを、童子は、あやしげに、そのかほを打まもる。おのれは、炭さしつぎつゝ、かたはらいたうもをかしうもきゝ居たるを、妹たちのさらば、わもとはとはれて、妾の願ひは、いましたちとことなり松の日ひし、くふもの、きものをのみむさぼるは、なほ彼の軒の雀のたぐひなり、人と生れて、なさて禽の類たるべき。芝居、寄席ははた好まぬにしも、あられど、若きほどの樂しみとすべきならずかし。坊は、男子にしあれば、其たこの如く、宵くもの上になりのほりてあはれ國家の干城ともてはやされなむは、母なるものゝこよなき希望なり。父も、さこそは思すらめ。人ごとしげき今の大代御ば、女なりとも、學ばすてやは。去れどそはいたづらに、同けむをとなへ、富貴をてらふ爲ならず。男しうとめに仕へ奉らむには、如何にしてよけむ。家主人のみ心は、いかにしてなくさめ參らすべき。子供の養育法は、いかに、のみち、女のつとめ、と日ふことを研はめて、嫁しては、内に、良妻とほめられ、出でゝは、貞女と稱へらむことを思ふは、これ、女子學問の本分なるべし。されど、それもかなはぬ身としては何かせむ。只家主人のみこゝろ一つを悦ばせ、舅姑の滿足をねむにても、輕々しからむやは。これひとつだにたらはぬことなくしとげなば、女の道は叶ひぬべしかし。松もゆめ忘るゝなと、思ふがまゝをいひつくれば、我とへもなま博士めきて、片はらいたし。下婢はしきりにうちうなづけども、心は空なるべし。姉なるは、いらへもなく、いと靜かに火桶の、灰かいさくりて、余念なし。年若き妹は、なでふことの解しかぬらむ、童子ゐて、おばしまにたはふれつゝ、雪はやみぬ、日かげも出でぬと叫ぶ。げに、雨たれの音しづかにきこゆるは、南おもての方よりとけそめぬらん。梅か枝のかげ総の障子にうつりて、ねならすかなりくるにわれも、いつしかすびつはなれて、…………

◎女鑑月並兼題

二月廿日　歌……若草　文……盆梅　二月十日〆切

三月五日　歌……雛祭　文……深山櫻　二月廿五日〆切

三月廿日　歌……蛙　文……海人　三月十日〆切

四月五日　歌……机　文……古戰場　三月廿五日〆切

四月廿日　歌……蝶戲花　文……試驗及第を祝す　四月十日〆切

歌文原稿〆切期日迄に本社に到着せざるものは、すべて沒書とす。

大日本女學會

會員募集廣告

總裁 小松宮妃殿下　副總裁 鍋島侯爵夫人

○本會賛成員 有栖川宮大妃殿下華頂宮妃殿下を始め奉り貴婦人方八十八名

趣旨 本會の趣旨は女子教育の普及發達を圖らむがため女學の講義錄を發行し入學すへき女學校の設けなき土地に住める者又は父母のもとを離れ難き事情ある者をして居ながらに通信教授を受けしむるに在り其講義は極めて平易懇切を旨とし實踐の用に應し輕佻の風を避け以て賢良貞淑の品性を涵養せむことを期す◎本會は明治廿八年の創立にして三千の會員已に第一期の講修を終りたれは今や新に學科を增設し紙面を刷新し更に第二回講修を開き新に會員を募集す志ある淑女達とく入會あれかし何時入會あるも第一卷より送本差支なし◎本會講義錄は女學講義と稱し畏くも皇后陛下叡覽を給ひ特に大御歌下賜の光榮を辱うす一卷の紙數菊判二百頁以上の優美なる大冊子にして毎月廿五日發行す總て講義の質問に答へ歌文習字の添削批評をも爲す◎會費一箇月參拾錢束修參十錢◎會則希望者は郵券貳錢を添て申込まれよ

學科及ひ擔任講師 ◎修身(女子修身談)細川華族女學校長が從來同校に於て教[illegible]演說せられたる者に係る(禮法)佐方女子高等師範學校教諭◎國語(國文)關根學習院教授(作歌)大口御歌所錄事(作文文法)今泉城北中學校長◎漢文、土屋華族女學校教授◎歷史(日本歷史萬國歷史)大森文學士◎地理(日本地理萬國地理)喜田文學士(地文)脇水理學士◎理科(物理化學)近藤工學士(博物)石川理學博士(生理衛生)未定◎家事(家庭教育)三輪田高等女學校講師(家事經濟)後閑女子高等師範學校教諭(家事衛生)三宅醫學博士(小兒衛生)三島醫學士◎割烹、御園華族女學校教員◎小兒心理學、下田文學士◎裁縫、渡邊東京裁縫學校長◎習字、坂華族女學校教授◎音樂、未定◎手藝、活花點茶)田邊東京女學館講師◎附錄◎史談下田華族女學校學監◎小說、遊佐學海紅葉三大家◎お伽譚、漣山人◎詞藻◎質問應答雜報雜錄

發行 第二卷既に發行せり

東京市麴町區土手三番町二十八番地　**大日本女學會**

皇后陛下御製和歌

皇朝婦女鑑

東久世伯爵題字
磯野德文撰

插畫筆者（松本楓湖 富岡永洗）（永峯秀湖 其他數氏）

第一編
一月十日發行

用紙舶來上等品
菊判美本密畫數十入
口畫松本楓湖畫彩色摺

定價一冊代金三拾錢
郵稅金四錢

本邦婦德の美其の淵源遠し之を維持し之を發揮するは今日婦女子たる者の任務なり本書は斯主旨に依りて太古より現今に至るまで貞淑賢良の婦女數百人の傳を撰み以て百代の明鑑と爲さんことを期す大日本帝國の女子たるもの此に依りて益々其女德を養ひ以て神州國民の慈母たらんに資せよ

本書の特色とする所は事實正確なるにあり・本書の特色とする所は文章流麗なるにあり・

本書の特色とする所は挿畫精美なるにあり・本書の特色とする所は氣品秀麗なるにあり・

以て婦德の經典と爲すべく以て文章の模範と爲すべし

第一篇 目次

第二篇目次（奈良朝より平安朝まで）四十餘人の傳ををさむ 挿畫筆者松本楓湖以下斯道名家數氏

第三編以下 每月十五日發行凡七編乃至八編にて完結の豫定

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 靜思館

東久世伯題字　杉谷正隆編

家庭
歌訓

修身百首

全一冊

定價金貳拾錢
郵税金四錢
郵劵代用一割增

この書は我が國古來の和歌の中につきて修身の訓誡となすべきもの一百首を擇び是に深切なる義解を附して一讀人をして其本義を了得し而して大に發明する所あらしむる者あり我が國道徳の標準は之を古人の言行にとりて是非善惡の歸を明にするを學者の要務とす淑女諸子乞ふ此籍を讀みて其の徳器を養ひ給へかし

東京京橋區築地二丁目廿一番地（電話番號本局八十八）

發行所　國光社

細川十洲翁序　三輪田眞佐子著

女子の本分

全

四版

●定價金二十五錢
●郵税金四錢
●郵劵代用一割增

目錄○第一章●總論●風俗の變遷●今日の情態●本著の目的●人の人たる所以●女子本來の面目●日本女子と西洋女子と●維新前の女訓●西洋女子の才能●折衷○第二章●女徳●節操●孝行●和合●慈悲●簡婉と靜止と●恭謹と勤勞と●自重と忍耐と●女徳の基源○第三章●女子特別の身分●婦道●婚嫁の主義●早婚の弊害●夫婦とは如何●從順●補佐●誠實●母道●胎敎●育兒●慈愛●敎戒●母の責任●繼母の道第四章●女子藝業●女藝の本領●例證●松苗先生と紅蘭女史との言●實用の藝●裁縫●料理●經濟●衛生及生理●家内の整理●良人と同藝●優美ノ藝●和歌●音樂●活花●茶道●專門の藝●文學●美術●敎師●醫業●西洋の女業●貴女の職分○第五章●女子の容裝●人類と禽獸と異なる點●靜淑●天眞●恭敬●裝飾●實用●禮儀●雅致●高尚●風禮●結髮●服制●佳人の資格○第六章●女子の人に接する道●交際●女子の交際●交際の効徳●親切●愛嬌及世辭●自遜と他愛と●禮節●恆操●交際上の責任●秘訣●心得●女禮●進退●事宜●自然●習慣●婢僕を御する法●寬容●範例●獎勵●探明○第七章●女子の生活及人物●生活●幸福●快樂●品尚●質實●安心●脫塵●中康●女子に適する學派●人物と養生と●天稟●性癖●多能●達才●富貴●美貌●好人物の本相●上流●中流●下流●應報○第八章●結論●公道●尊卑の原因●反動●御國の道●女權に就いて●報恩

東京市京橋區築地二丁目二十一番地（電話番號本局八十八）

發行所　國光社

社告

〇代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事〇郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割増の事〇別に領收證を出さす金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ者は別に證書郵送料送附の事〇未納税の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一冊	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六冊前金（三ヶ月分）	五十五錢	
十二冊前金（半年分）	壹圓	
全國無遞送料		

明治三十一年二月四日印刷
同　年二月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　川崎直衞

東京京橋區南八丁堀一丁目十一番地
印刷人　並木艮雄

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行所（電話番號本局八八）　國光社

金製指環

●川端玉章先生考案並畫

●加納夏雄先生考案並畫



●十八金目方三匁付片切彫刻價十八圓ヨリ二十五圓マデ

●十八金目方三匁付平象嵌入價二十三圓ヨリ二十九圓マデ

●二十二金目方三匁五分付片切彫刻價二十五圓ヨリ三十七圓マデ

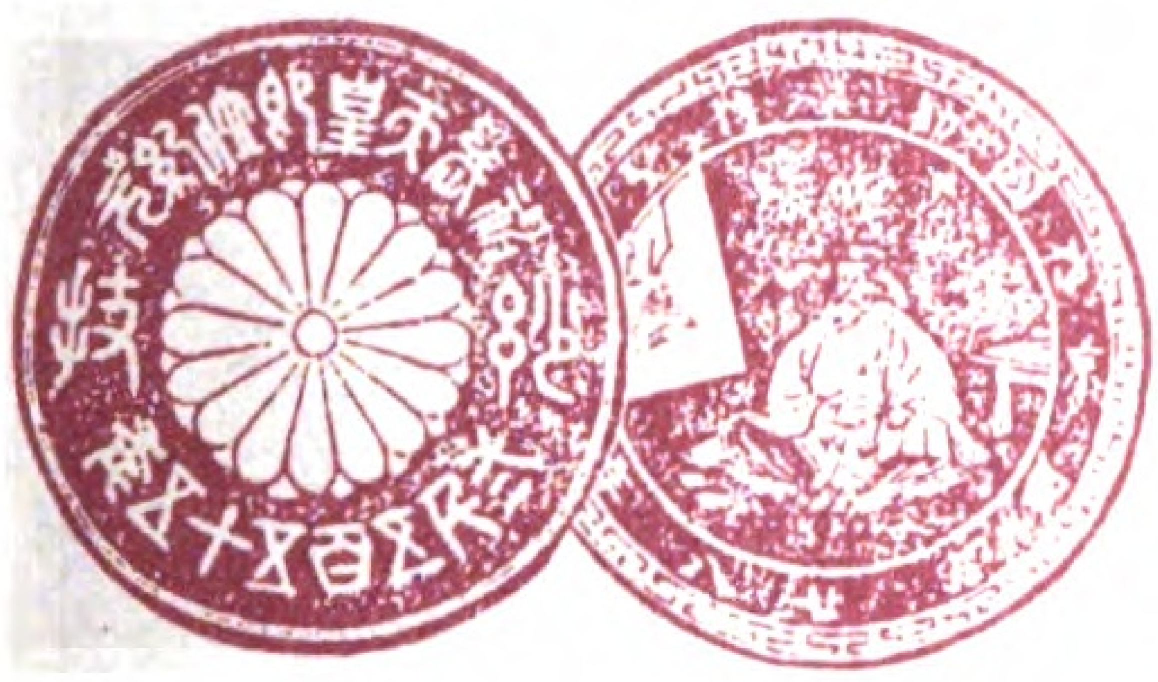
●二十二金目方三匁五分付平象嵌入價三十一圓ヨリ四十七圓マデ

指輪は其人の正札なりとは千載不勉の名言男女に限らず其指にはめたる指環を見れば、其人の性質品格おのづから現はるゝ事、諸君御承知の通なり、なまじひ其品位を劣す樣なる指輪は、寧ろ指さゞるが愈ぞかし、強に金の量が重くて、寶石が輝きて、彫刻が奇麗なる計で、品格を上るものに非ず、品格は金にて買ると思ふは誤なり、假令その價は高からずとも、其意匠や彫刻が優美なれば、何と無く氣高く見ゐて、其人までが奥ゆかしく成ること、是ぞ即ち美術の德なる本堂深く此に意を注ぎ、金製指輪の製作に意匠を凝し彫刻に精妙を竭し、内外の時好に魁して、殊に高尚を旨と致すなれば、優美なるは勿論、瀟洒風流の意氣自然に溢れて、是を指せば其品格を進め、其人の性情さこそと見ゆるきつと保證いたすなり、願くは一覽して、本堂が諸君を欺かざる事を知し召せ、謹で白す

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八番地

時計及寶玉類
貴金屬美術品 商 （電話番號本局三百三十三）

天賞堂



妙技一等賞牌

天賞堂小川町出張所

東京市神田區小川町十九番地（電話架設中）

天賞堂大坂出張所

大坂市南區心齋橋北詰北ニ入ル（電話番號七百三十三）

天賞堂名古屋出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番地

天賞堂廣島出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地

天賞堂熊本出張所

熊本市唐人町上通鍛冶屋町十番地

天賞堂長崎臨時出張所

長崎市萬歳町上野屋方

天賞堂小樽臨時出張所

北海道小樽色内町越中屋方

（明治二十四年八月四日內務省許可
明治二十五年三月十一日遞信省認可）

（印刷所　東京國光社印刷所）